

靈界物語 第五一卷 眞善美愛 寅の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五一卷』愛善世界社

2005(平成17)年04月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onidodo.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第三章 犬馬の勞けんばらう（一三一八）

第四章 乞食劇こじきげき（一三一九）

第五章 教唆けうさ（一三二〇）

第六章 舞踏怪ぶたふくわい（一三二一）

第二篇 夢幻樓閣むげんろうかく

第七章 曲輪玉まがわのたま（一三二二）

第八章 曲輪城まがわじやう（一三二三）

第九章 鷹宮殿たかみやどの（一三二四）

第一〇章 女異呆醜にょいぼつしゆ（一三二五）

第三篇 鷹魅艷態ようみえんたい

第一章 をとめ 乙女の遊 あそび (一三二六)

第二章 はつはなひめ 初花姫 (一三二七)

第三章 やりぶすま 槍襖 (一三二八)

第四章 うぬぼれがみ 自惚鏡 (一三二九)

第五章 もち 餅の皮 かは (一三三〇)

第四篇 夢狸野狸

第六章 あんとう 暗闘 (一三三一)

第七章 たぬきすまう 狸相撲 (一三三二)

第八章 ふんどし 糞奴使 (一三三三)

第九章 ぎきやうしん 偽強心 (一三三四)

第十章 たぬきひめ 狸姫 (一三三五)

第十一章 ゆめものがたり 夢物語 (一三三六)

序文
じよぶん

この物語は、凡て心理描寫的に口述してありますから、讀者の中には、普通の著書と比べて非常に露骨だとか、左様なことがあらう筈がないとか云つて批評する人士が出て來るであらうと思ひます。然し靈的即ち内的意志を基として述べたものですから、一片の虚偽も虚飾もなく、人心の奥底に入つてその真相を究め盡し、之を神助の下に編纂したものです。上手も追従も何もありません。書中高姫の物語に就ても、實に常識極まる如く見ゆる箇所が澤山にあるでせう。併し是も亦その心底深く別け入つて、憑依せる精靈や本人の至誠心の状態や時々變轉の有様を描き出したものです。總ての人の心理状態も亦高姫の如きものあることを思考して自ら戒め自ら省み、愛善の徳を養ひ、信眞の光明を照らし、地獄的境域を脱出し天國の住民として永遠無窮に人生の本分を守り、神明の御心に和

合ふしもつ以しんてせい神じやう政じゆめ成ふと就はしらの太と柱ちゆうとなり、現げん幽い神しん三さん界かいの爲ために十じふ分ぶんの努どり力りよくを勵はげまれむことを希望きぼう致いたします。口こう述じゆつ者しやも目もく下かの處とこにては、或ある事じじやう情じやうに制せいせられ、實じつに悲ひ境きやうに陥おちりたる身みながらも、一いつ分ぶんの時間じかんも空くう費ひせず、心しん骨こつを苦くるしめつつ、三さん界かい一いつ般ばんの萬ばん靈れい救きう濟さいのために奉ほう仕しの誠まことを盡つくし、此この物もの語がたりの編へん纂さんに努どり力りよくしつつある次しだい第だいであります。讀どく者しや宜よろしく瑞ずい月げつの至し誠せいを御ご諒りやう承じやうはあつて、御ご研けん究きうあらむ事ことを願ねがひます。

大正十二年一月二十七日（舊十一年十二月十一日）

天城山麓湯ヶ島に於て

王仁識

總説

人間にんげんはその内ない分ぶんに於おて至し聖せい至し美び至し善ぜんの天てん界かい即すなはち高たか天あま原はらに向むかひ、その外ぐわい分ぶんに於おては地ぢ獄ごく界かいに向むかつて居あるものである事ことは既すでに已すでに述のべた處ところであります。故ゆゑに人間にんげんは常つねに神かみの光ひかりに背そむいては決けつしてその人じん格かくを保たもつ事ことは出で來きませぬ。本ほん卷くわん物もの語がたりの主しゆ人じん公こうたる高たか姫ひめが小こ北きた山やまの聖せい場ぢやうに到いたりて、自じ己こに憑ひよ依ういせる兇きよ靈うれいのために誤あやまれ、又また兇きよ

靈界の妖魅なる妖幻坊に欲のために誑かされて熱狂的暴動を敢行し、神威に當てられ身を以て免れ、妖幻坊と共に怪志の森に落ち延び、妖幻坊が遺失したる曲輪の玉を、反逆者なる小北山の役員、初公、徳公に命じ、文助の手より奪還せしむる場面より、浮木の森に於て妖幻坊の魔法に欺かれ種々の狂態を演ずる處より、一旦三五教に歸順したるバラモン軍のランチ、片彦將軍が、高姫の化相せる初花姫に誘惑されて苦悶の淵に沈むところより、ケース、初公、徳公が狸のために裸體となつて角力を取らせらるる悪夢等、波瀾重疊の面白き物語であります。讀者は一片の滑稽的小説と見ることなく、意を潜めて通讀あらむことを願ひます。

大正十二年一月廿七日

於天城山麓 王仁識

第一篇 靈光照魔

第一章 春の菊（一三一六）

足曳あしびきの四方よもの山々やまやま春はるめきて 冬ふゆ枯がれしたる梢しすままで

芽め含ぐみそめたる春はる景色げしき 瞬またたき初そめし陽炎かげろふの

彼方あなた此方こなたにキラキラと 閃ひらめき渡わたり天國てんごくの

御苑みそのも今いまや開ひらけむと 思おもふべらなる小北山こぎたやま

小鳥ことりは歌うたひ胡蝶舞こてつまひ 吹ふき來くる風かぜも何なんとなく

ボヤボヤボヤと肌はだざはり 長閑のどかな庭にはに立出たちいでて

お菊きく、お千代ちよの兩入りやうにんは 咲さき誇ほこりたる白桃しらももの

木蔭こかげに戯たはむれヒラヒラと 袖そで翻ひるがへす胡蝶こてふの遊あそび

同じ腹から生れたる 姉妹の如睦じく

互に愛し敬ひて 他所の見る目もいと清く

羨ましくぞ思はれぬ かかる所へ急坂を

スタスタ登り来る男女 雲突く許りの荒男

年増女を引連れ大門の 廣庭指して現はれぬ。

妖幻坊の空助、高姫兩人は、お菊、お千代の桃の木の下に胡蝶を追ひ、睦じげ

に遊び戯るるを見て、

高姫「コレ、お前さま達二人は此お館に参拜してゐるのかい」

お菊「どこの小母さままだ知らぬが、ようお参りやしたなア。サ案内して上げま

せう」

案内はして貰はなくとも、盲ぢやありません。受付位はよく分つて居るのだから

……併し私の尋ねたのは、お前は此處の信者か、但は誰か役員の娘か、それが

聞きたいのだ」

「それでも小母さま、其大きな男の人、頭を括つてゐるぢやないか。私は又目でも悪いのかと思つたのよ。さう偉さうに、年老りだてら、娘を掴まへて理窟を言ふものぢやありませんぞえ。ここへ詣つて来る人は皆おとなしい人ばかりだよ。お前さまのやうに、いきなり口を尖らして、理窟がましい事を云ふ人は今が始めてだ。ホンにまあ好かぬたらしい小母さまだこと。アタ阿呆らしい、お千代さま、放つといてやりませうかな」

千代「それでもお菊さま、ここへお出になるお方はどんな方でも、鄭重に取扱はねばならないと、魔我彦さまが仰有つたぢやありませんか」

「ナニツ魔我彦が、ヤツパリ此處にくすぼつてゐよつたのだな。ドレドレ調べて来う。どうせ碌な奴ア居らしようまい。ここは日の出神の生宮に神様からお與へなされたお館だ。サ空助さま、私に跟着てお出でなさい」

と受付に立現はれ、高姫は横柄な顔しながら、稍輕蔑氣味な聲を出して、
「へー、御免なさい、一寸物を探ねます。一體此處には何といふ方が大將をしてゐられますかな」

受付で切りに日の出に松を描いてをつた文助は、繪筆の手を止めて、臃げな目で少しく首をかたげ顔を覗く様にして、

「お前さまは、どつかに聞覚えがあるやうなお聲だが、何方でムいましたかな」

「何方も此方もあるものか、義理天上日の出神の生宮の高姫ぢやぞえ。お前は文助ぢやないか。マアマア御壯健でお目出度う」

「ヤ、高姫様でムいましたか。これはこれは久振でお目にかかります。貴女は齋苑の館へ此頃は御越しと承はり、大變な御出世を遊ばしたといふ事でムいます。ヤ、お目出度うムいます。ようマア立寄つて下さいました。そして何處へお出に

なります？」

「立ち寄つたのぢやない、義理天上の命令によつて、小北山の教祖として來たのだ。サアサア是から何もかも、私の云ふ事を聞くのだよ」

「ハテ、妙な事を承はります。此お館は一切齋苑の館の八島主命様の御管掌なれば、貴女様が此處へお越しになるのなれば、前以て御通知があるべき筈になつて居ります。又此館の教主として御出で下さるのなれば、此方にもそれ相當の歡迎

準備もせなくてはなりません。何と又火急な事で、教主様の松姫様もヨモヤ御存じは、いますまい。それでは私もかうしては居られない。御報告を申し上げねばなるまい。一寸待つて下さい。教主様に此由を申上げて来ますから……」

「ナニ、松姫が教主となア。あれは私の家来で、お前も知つてゐる通り、高城山をかまはして居つたのだが、彼奴は腰の弱い奴だから、お節の玉能姫に誤魔かされ、ウラナイ教を捨てて三五教に降参した奴だ」

「モシ高姫さま、貴女だつて、三五教の宣傳使ぢやありませんか。貴女が率先して黒姫さまと一緒に、三五教へ改心歸順なさつたでせう。それだから松姫さまだつて、歸順遊ばすのが當然ぢやありませんか」

「ホホホホ、そりやさうだ。併しこれは、一寸副守護神が、あんな事を云つたのだよ。此高姫は義理天上日の出神様の、いよいよ身魂の因縁が分つて来ました。高天原の最奥靈國の天人様だ。そして此高姫は稚櫻姫命の御系統、常世姫の肉宮だぞえ」

「ヤ、そんな事は、耳がタコになる程承はつて居ります。サ、何卒教主館があいて居りますから、そこで一服して下さいませ。其間にいろいろの準備をせなくちやなりませぬから……エー、そして、高姫様、貴女の後に立つてゐるのは、影法師か、但はお連れの方か、私には目が悪くつて分りませぬが、人間なら人間と仰有つて下さいませ」

「ヘン、馬鹿にしなされるな、お前さまのやうな人間とはチツと違ふのだよ。畏くも齋苑館の総務、時置師神又の名は空助様でゐるぞや。サ、早くお出迎へをなされ、粗忽があつては貴方のお爲になりませぬぞえ」

「それはそれは、存ぜぬ事とて、誠に御無禮を致しました。此頃は相當に参拜者もムいますので、斯様な所で御話して居つてもつまりませぬ。サ、教主館へ御案内を致しませう」

妖幻「拙者は噂に高き三五教の三羽鳥、空助でゐいます。以後御見知りおかれまして、宜しく御交際を願ひませう」

「ハイ、それはそれは、自己廣告を承はりまして、尊き空助様を拜まして戴きま

した。併し空助様は三五教切つての言靈の清らかな御方と承はりましたのに、大變なダミ聲ぢやムりませぬか。どうも私には、失禮ながら、イー心の底から尊敬の心が起つて参りませぬ。守護神が腹の中から、違ふ違ふ、と申します。もし間違ひましたら御免下さいませ」

高姫「コレ、文助、何といふ失禮千萬な事を云ふのだい、空助様は、此頃一寸お風邪をめしてお聲が變つてゐるのだよ。お前だつて風邪ひいた時にや、満足に祝詞もあがらぬぢやないか」

「イヤ、どうも恐れ入りました。それなら、之から教主館へ御案内致します。何卒御神殿で御拜禮をなさつて下さいませ。其間にチャンと座敷を片付けて用意を致しますから」

高姫は神殿に行くのが、どこともなしに恐ろしいやうな、内兜を見すかされるやうな気分がして氣が進まなかつた。そこで又例の詭辨を弄し始めた。

「コレ、文助さま、最前も云つた通り、義理天上日の出神は靈國の天人ぢやぞえ、祭典をしたり拜禮をしたりするのは天國の天人のする事だ。それから又お前たち

のやうな八衢人間が、助け給へ救ひ給へと、祈る爲に拜禮をしたり、お祀りをするのだよ。吾々は教を傳へるのがお役だ。それぞれ身魂の因縁性來によつて御用が違ふのだからな」

「それでも貴女、今迄は一生懸命にお祀りもなさつたり、朝も早うから御祈願を遊ばしたぢやありませんか」

「それはきまつた事だよ。よく考へて御覽なさい。蛙の子のお玉杓子だつて、鯰の子だつて、小さい時にはヤツパリ同じ姿をして居りませうが。此高姫もお玉杓子の時は、蛙の子と同じやうに、人竝に拜禮をしなくちやならぬぢやないか。けれども日日が経つと、同じ形のお玉杓子でも、靈の性來によつて、手が生え足が生え、糞蛙になる靈と、大きな鯰になる靈と立て別れるぢやないか。例へて言へば、お前はお玉杓子の出世した蛙だ。此高姫は鯰ぢやぞえ。鯰は地の底に居つて、尻尾をパイと掉つても、此大地がガタガタと動くのだ。其因縁がハツキリと分つたのだから、今迄の高姫と同じ様に思つて貰ふと、チツと了簡が違ひますぞや、なア空助さま、三五教にはかふ言ふ分らぬ受付が居るのですからな、困つた

ものですよ」

妖幻「さうだなア、ロクな男は一人も居ない。これでは三五教も駄目だ。一つお前が此處で奮發して一働きせなくちや駄目だ。オイ文助殿、これから空助がここに暫らく出張して、事務を調査し監督致す、そして高姫は筆先の御用を致すによつて、何事も其命令に服従するのだぞや」

「ハイ有難うムいます。併しながら此館は變性男子様のお筆先を以てお神徳を頂くやうになつて居りますから、もう日の出神様のお筆先は必要がないかと心得ます」

高姫「オツホホホホ、譯の分らぬガラクタばかりぢやなア。變性男子のお筆先は餘りアラごなしで、お前達を始め、人民の腹へは入りにくいによつて、此度誠生粹の水晶靈の根本の日の出神様が、お筆先を書いて、細かう御知らせなさる世が参りたのだぞえ、此筆先を讀まなくては、誠の五六七神政は成就致しませぬぞや」

「さうかも存じませぬが、私は松姫様の御意見に従はねばならぬ事になつて居りますから、何卒松姫さまにお會ひになつたら、貴女より詳しく其由を仰有つて下

さいませ」

「成程お前としては無理もない。さうすれば之から松姫にトツクリと言ひ聞かしてやりませう、サ、兔も角館へ案内して下さい」

「承知致しました。サ、かう御出でなさいませ」

と早くも足駄をはいて、杖をつきながら、五六間より隔つてゐない庭を跨げ、蝶別、お寅の住まつてゐた教主館へ案内した。

お菊は三人の姿を見て、

「コレ文助さま、そんな喧しい小母さまを、こんな所へ連れて来るのはイヤよ、大廣間へ連れて行つて鎮魂をして、四足の靈をのけて上げて下さい。何だか知らぬが、エライ物が憑いてゐますよ」

「ハハハハ、どうも仕方のない娘さままだな。モシモシ高姫さま、何卒氣にして下さいませ。此方は一人娘で氣儘に育つてゐるから、人さまにあんな事を仰有るのです。何卒若い人の云つた事だから、お咎めなく許して下さいませ」

「許していらぬよ。此處は私の留守を預つて居る所だ。お母さまや魔我彦さまが

お歸りになるまで、誰も入れることはならぬのだから、歸つて下さい」

「そりやさうでムいます、此方は又特別のお方だ。お前さまがいつも、それ、憧憬して居つた、ウラナイ教の教主様の高姫さまだぞえ。サアサア、叮嚀にお辭儀をして、御無禮のお詫をするのだよ」

「聞くを見るとは大違ひだネー。蠓蠓別さまも、こんな品格のない、ヤンチャ婆アさまを可愛がつてゐたのかと思ふと、可笑しいワ、ホツホホホ。モシ蠓蠓別さまのレコさま、生憎、来て下さつたけれど、蠓蠓別さまは不在なのよ。會ひたけりや浮木の森へ御出なさい。萬緑叢中紅一點のお民さまといふ、あたえのやうな別嬪と、手に手を取つて驅落しましたよ。そして、何時も高姫々と寢言をいったり、お酒を呑んで朝顔のチヨクを口へあて、これが高ちやまの口によく似てると云つてはキツスをしたり、うちのお母さまと掴み合の喧嘩をしたり、鼻を捻られたり、それはそれは面白い事だつたよ」

高姫「ナニ、蠓蠓別がお民といふ女と驅落した？ ヤ、其奴は大變……」

といひかけて、空助の側に居るのに氣がつき、

「ホホホホ、何とマア面白い話を聞かして貰うたものだ。高姫といふ名は私ばかりぢやない。廣い世間には澤山あるからな、ソリヤ人違ひだ。此高姫とは違ひますぞや」

「それなら、お前は蝶螭別のお師匠さまではないのだなア。ウライナイ教の元を開いた高姫さまとは違ひますね。此小北山は今では三五教だけれど、それまではウライナイ教の神様ばかり祀つてあつたのよ。其ウライナイ教の根本の教祖は高姫さまだと云つて、私達も朝から晩まで、御神體を拵へてお給仕をしてゐたのよ。其高姫さまと違ふのなら、こんな所へ來る資格はない。サアサア トツトと出て下さい」

妖幻「ハハハハ高姫も随分色女だなア、蝶螭別の男つ振りを、此空助に見せびらかさうと思つて、此處迄つれて來たのだなア。イヤもう其凄腕前には感心致した。ヤこれで、お前の心もスツカリ分つた、高姫、これまでの縁だと諦めてくれ、左様なら……」

と踵を返し歸り行かむとする氣色を見せた。高姫は慌てて袖を控へ、涙を流して、

「コーレ、空助さま、短氣は損氣だ、一寸待つて下さい。之には言ふにいはれぬ譯があるのだから……」

「イヤ、譯を聞くには及ばぬ、何もかもスツクリと判明致した。イヤ空助は馬鹿だつた。よくマア今まで黽つて下さつた。眉毛をよまれ、尻の毛の一本もないとこまで、金毛九尾さまにぬかれて了つたかと思へば残念だ。千言萬語を費しての辨解も、俺には何の效能もない。高姫、左様ならば……」

と袖ふり切つて行かうとする。

高姫は妖幻坊の足に確かとしがみつぎ、一生懸命の泣き聲を出して、

「コレ空助さま、短氣は損氣ぢや、一通り私の云ふ事を聞いて下さい。今となつてお前さまに捨てられて、どうして五六七神政の御用が出来ませうか、義理天上日の出神がお願い致します」

お菊は手を拍つて、

「ホツホツホ、雪隠の水つき、婆浮きぢや、イヤイヤ婆泣きぢや。面白い面白い、こんな所をお千代さまに見せて上げたいのだけれどなア。お千代さま、又何處へ

行つたの、まるで蠼螋別さまとお母さまとの喧嘩のやうだワ、ホツホツホー」

妖幻坊はお菊の聲に、何と思つたか、後ふり返り、二歩三步近寄つて、

「ハハハハ、子供は正直だ、面白い面白い。コレお菊さまとやら、蠼螋別の素性から高姫の關係、お前は知つとるだらうな、どうか緩りと聞かして貰ひたいものだ」

「詳しい事は知らないよ。何時も蠼螋別さまとお母さまとが酒を呑んで、喧嘩ばかりしてゐたのよ、其時の話を聞いたばかりだ。高姫さまの顔を、まだ見た事がないのだから分らないワ。其高姫さまはお人が違ふと仰有つたが、口許が朝顔の杯によく似て、唇が妙に反り返り、曲線美をうまく發揮してゐるワ。ホホホ可笑しい顔だねー、コレ小父さま、お前、そんな婆アさまが好きなの、イツヒヒヒ、エ工物好だねえ。ドレ是から松姫様に面白い門立藝者が出て来て、いま一幕活劇を演じてゐる、之からが正念場だから……と云つて知らして來う、お千代さまもキツと喜ぶだらう」

と云ひながら、逃げるやうにして二百の階段を登つて行く。

文助「皆さま、何卒氣にさへて下さいませ。あの子はお寅さまの娘で、どうにも仕方のない、侠客娘と綽名を取ってるオキヤンですから、あんな子の云ふ事を耳に入れて居らうものなら、腹が立つて仕方がありません。何時も受付へ出て来て、私の目が悪いのをつけ込み、首に手拭を引掛けたり、ソツと出て来て耳を引張つたり、鼻を摘んだり、熱い茶と水とをすり替へたりして、手を叩いて喜んで居る悪戯盛りだから、何卒貴方等も、廣き心に見直し聞直し、許してやつて下さいませ」

妖幻「ハハハハ、何と面白い子だなア。そんな子なら、甘く仕込んだら、すぐに改悪するだらう」

高姫「コレ空助さま、何と云ふ事を仰有る、改悪するだらう……なんて、チツと心得なさらぬか、なぜ改善するだらうと仰有らぬのだい」

「改悪といふことは悪を改むる事だ。悪を改むれば善になるぢやないか。改善といふことは善を改むる事だ。善を改むれば悪になるぢやないか」

「成程、さうすると、今迄三五教で言つてゐたのは逆様だつたなア。ハハ、ア

アそれで分つた、義理天上さまが素盞鳴尊の行り方は駄目だと仰有つたのは……
其事だ、流石は空助さまは偉いわい、改悪と云つたら無上の善だ。之から一つ言
霊を改めねばなるまい。流石は高姫の夫だけあつて、仰有る事が違ふワイ。ホホ
ホホ、時置師の大神様、イヤもう、流石の義理天上も感服仕りました。コレコレ
文助殿、お前は結構なおかげを頂きましたなア。改悪の因縁が分つたかい
「ハイ、貴女等の仰有る事は餘り六つかしうて、文盲な吾々には、どうも解釋が
出来ませぬ。何と云つても、逆様の世の中で、悪が善に見えたり、善が悪に見え
たりする世の中ですからなア、改悪……否皆目分りませぬ」
「さうだろ さうだろ、お前は眼目からして分らぬのだから、皆目分らぬといふ
のは無理はない、今までは改心といふは善い事、慢心と云ふは悪い事と思つて居
つたが、ヤツパリ之も逆様だつた。なア空助さま、さうぢやありませんか」
「ウンさうだ、お前の云ふ通りだ」
「何と義理天上さまも偉いわい。ヤ、此筆法でゆけば凡ての解決がつく。三五教
は善に見せてヤツパリ悪の教だつた。何もかもスカタンばかり言つて、吾々を誤

魔化して居つたのだな……義理天上日の出神様、有難うムいます。……コラ金毛九尾、貴様も其積りで、これから活動するのだぞ』
と小聲に囁いてゐる。

かかる所へ最前のお菊は慌しく歸り來り、

『高姫さま、松姫様に申上げましたら、大變にお喜びやして、どうか鄭重に、お酒でも出してもてなして上げて下さい。今一寸御用の最中だから、御用濟み次第御挨拶に行きますと云つてましたよ。コレ文助さま、徳さまと初さまと呼んで來て、お酒の用意をさすのだよ』
文助『それなら、これから徳と初とに御飯やお酒の準備をさせますから、一寸待つてみて下さい』

とまたヨボヨボと受付さして歸り行く。

『コレ空助さま、松姫といふのは私の弟子だから、一寸も遠慮はいりませぬよ。マ、ゆつくりと寛いでお酒でもあがつて下さい。お氣に入りますまいが、此義理天上がお酌をさして頂きますから、ホホホホ餘り憎うもありますまい』

妖幻坊は俄に機嫌を直し、赤い尖つた口をあけて、

「オツホホホ」

「何とマア。俄に尖つた口をして、アタ厭らしい。そして、赤い口だこと」

「ウツフフフ」

（大正一二・一・二五 舊一一・一二・九 松村眞澄録）

第二章 怪獸策（一三一七）

初、徳の兩人は種々と馳走を拵へ、酒を澤山に爛して二人の前に恭しく竝べた。初「私は此お館の新役員でムいます。魔我彦様にお引立に預りまして、つい此間から幹部に選定されました。今迄はウラル教の信徒でムいましたが、餘り此お館にお祀りしてある神様の御威勢が高いので、ついお参りする氣になり、信者として四五日籠つてる中、拔擢されまして、今では魔我彦様の御用を聞いて居ります。

炊事なんかするやうな地位ではムいませぬが、今日は特別を以て、文助様の御命令により、料理法の粹を盡して拵へて参りました。どうぞお口には合ひますまいが、何卒一つ召上つて下さいませやう御願ひ致します。たまたまのお越し故、可成山海の珍味を以て獻立がしたのでムいませぬが、餘り俄かのお出で材料が缺乏致し不都合でムいませぬ

高姫「ヤ、お前は魔我彦の家來かな、成程、下り眉毛の、一寸面白い顔だな。之から此高姫が此處の教主だから、其積りで居つて下さい。そしてこの信者は幾ら程あるかな」

「へーお初にお目にかかつて、顔の批評までして頂きまして、イヤもう感服致しました。まだ新任早々の事で、ハツキリは分りませぬが、トツ百ばかり、あるとか、ないとか言ふことでムいませぬ。魔我彦さまも、この調子なら、今にパツ百人ほど殖えるだらうと申して居りました。貴女は噂に……イ……高き、ダカ姫さまでムいませぬかな。どうもよくお出で下さいました。そして立派な男様は貴女様の御主人であらせられますか、どうも御夫婦打揃ひ、御出張下さいました段、やつ

がれ身にとりまして、恐悦至極に存じ奉りまする』

「何と面白い男だなア、ヤ御馳走さま、これからお腹もすいたなり、一寸くたぶれたからゆつくりと頂きませう』

「私で宜しうムいますれば、一寸お酌をさして頂きませうかな。私も餘り、飲めぬ口でもムいませぬから……』

「ヤ、結構でムいます、何れ用があつたら、此鈴をふりますから来て下さい』

「承知致しました、それぢやお菊さまにお給仕をして貰ひませう』

お菊「コレ初さま、厭だよ、誰がこんな小父さまや小母さまのお給仕するものか

い。私がお給仕するのは萬さまだよ。イヒヒヒ、すみませぬなア、お構ひさま』

妖幻「オイお菊とやら、此空助に一つ注いでくれまいか。お前の若い手で注い

で貰ふのは、餘り氣持が悪うはない。高姫さまといふ天下第一の別嬪さまがついて

ムるのだから可いやうなものの、又變つたのも、此方の氣が變つていいかも知れ

ない』

「いやですよ、之からお千代さまと遊んで來なならぬワ、待合の酌婦ぢやあるま

いし……御夫婦さま仲よう、シンネコでお樂しみ……御免よ

と逃げるやうにして、腮を三つ四つしやくりながら、肩をあげ首をすくめ、兩手を前へパツと開き揃へ、

「イツヒヒヒ」

と胴までしやくつて、飛出して了つた。後に二人はイチヤイチャ言ひながら、酒を汲みかはし始めた。

高姫「コレ空助さま、松姫だつて、文助だつて、中々さう易々と服従するものぢやありませんよ。口先では立派な事言つて居つても、心の底は容易に歸順致しませぬよ。あのお菊だつて、中々手に合はぬぢやありませんか、此奴は一つ、何か工夫をせなくちやなりませんよ」

「兔も角、あの初と徳とを此處へ呼んで、酒でも飲ませ、腸までよく調べて、其上でこちらの味方を拵へておかねば、駄目だと思ふ。何程お前が義理天上だといつても、空助だと云つても、松姫の外、俺の顔を知つた者はないのだからな」

「ソリヤさうですな、それなら一つ、初と徳を呼んで酒を飲ましてやりませうか」

い
□

「ウン、それが可い、就いては、あのお菊も此處へよせて、酌をさせるがよからう。さうでなくちゃ、彼奴、一すぢ繩ではいかぬ奴だから、甘く手の中へ丸めておく必要があらうぞ」

「貴方は又、お菊に秋波を送つてゐるのですか、エー工油斷のならぬ男だなア、それだから義理天上さまが、お前を目放しするなと仰有るのだ。本當に氣のもめる男だな。私の好く人、又人が好く……といふ事がある。こないい男を夫に持つと、此高姫も氣のもめる事だワイ」

「まるで監視付だなア、高等要視察人みたいなものだ。ああ、こんな事なら、今までの通り、獨身生活をして居つたらよかつたに、娘の初稚姫にだつて、何だか恥しくつて、顔さへ合されもせないワ。娘どころか犬にさへ恥しいやうだ。それだから、俺はあの犬は嫌といふのだ」

「お前さまは、二つ目には【いぬ】いぬと仰有るが、何程【いぬ】と云つても、綱をかけたなら歸なしはせぬぞや。いぬなら歸んでみなさい。假令十萬億土の底ま

でも探し求めて、お前さまの胸倉をグツと取り、恨をはらしませうぞや」

「ああ、怖い事だなア。それなら今後はおとなしう御用を承はりませう。義理天上様、金毛九尾様、今日限り改悪致しますから、お許しを願ひます、エへへへへ」

「何なつと、いつてゐらつしやい、どうでこんな婆アはお菊には比べものになりませぬから」

「それなら、女王様の御命令を遵奉し、ドツと改悪致して、お菊は入れない事にし、初公と徳公を、ここへ呼んで、ドツサリ酒を飲まさうぢやないか」

次の間から、

「へー、初も徳もここに居ります。お相手を致しませう」

とまだ呼びもせぬ先から、喉がグーグーいつて仕方がないので、襖をあけて、又ツと顔を出した。

高姫「コレ、初さま、徳さま、お前は最前から私達の話聞いて居つたのだなア」

初「へー、大命一下、時刻を移さず、御用に立たむと、次の間に手具脛引いて控

へて居りました。イヤもうドツサリと結構なお二人様の情話を聞かして頂き、有
難いこつてムりました。あれだけ結構な話を聞かして頂いた以上は、一杯や二杯
奢つて下さつても損はいきまずまい。のう徳公、本當に羨ましいぢやないか」
妖幻「ハハハハ、どうも氣の利いた男だ、お前達二人は小北山に似合はぬ立派な
者だ。こんな立派な役員が、吾々の來るに先立ち、おいてあるとは、全く神様の
お仕組だ。オイ、初公さま、徳公さま、俺の杯を一杯うけてくれ」

初「イヤ、これはこれは御勿體ない、お手づから頂きました、實に光榮です、な
ア徳よ」

徳「ウン有難いなア、こんな事が毎日あると尚結構だがなア」

妖幻「朝顔形の杯はないかなア」

徳「へー、朝顔形の杯も澤山ムいました、前の教主様が、高姫さまの唇に似て
ると仰有つたので、お寅さまと云ふ内證のレコが、悋氣して皆破つて了はれたさ
うで、今では一つもムいませぬ」

「フフフフ、さうすると、此杯は敗殘の兵ばかりだな。打ちもらされし郎黨ば

かりか、ヤヤ面白^{おもしろ}い面白^{おもしろ}い、サ、徳公^{とくこう}、一杯行^{いっぱい}かう^ゆ」

「ヤ、これはこれは誠^{まこと}に以^{もつ}て有^{あり}難^{がた}く頂戴^{ちやうだい}いたします。酒^{さけ}といふものは百薬^{ひやくやく}の長^{ちやう}とかいつて、いいものですな、かう青々^{あをあを}とした春^{はる}の野^のを眺^{なが}めて、一杯^{いっぱい}やる心持^{こころもち}と云^いつたら本當^{ほんたう}に譬^{たと}へやうがありませぬワ、どうぞ之^{これ}から貴方^{あなた}等^{がた}御兩^{ごりやう}人の指^し揮^き命^{めい}令^{れい}を遵^{じゆん}奉^{ほう}致^{いた}しますから、可愛^{かあい}がつて下^{くだ}さいや」

「ウン、よしよし、併^{しか}し蠨^{いもり}蠨^{わけ}別^{この}と此^{この}空助^{もくすけ}とは、どちらがお前^{まへ}は偉大^{ゐだい}なと思^{おも}ふ」
初^{はつ}「ソリヤきまつて居^をります。背^せい恰好^{かつかう}と云^いひ男振^{をとこぶり}と云^いひ、天地^{てんち}の違^{ちが}ひでムりま
すワ」

「どちらが天^{てん}で、どちらが地^ちだ」

「そこがサ、テインと、イー私^{わたし}には分^{わか}らぬ所^{ところ}です。併^{しか}し、チーとばかり劣^{おと}つて居^をりますなア」

「どちらが劣^{おと}つて居^をるのだ」

「空助^{もくすけ}様、言^いはいでも分^{わか}つてるぢやありませぬか。劣^{おと}つた方^{ほう}が劣^{おと}つてるのですもの、高姫^{たかひめ}さまの前^{まへ}だから、何方^{どちら}へ團扇^{うちわ}をあけて可^いいだやら、マア言^いはぬが花^{はな}です

なア、夫婦喧嘩をたきつけるやうな事があつては誠にすみませぬから……」

「ハハハハ、其奴ア面白い、マア言はぬが宜からう」

高姫「コレ初、構はないから言つておくれ、私だつて何時までも、蠓蛸別さまの事など思つてはゐやしないよ。あの方は大廣木正宗さまの生宮だつたが、今はサツパリ三五教へ沈没したのだから、最早普通の人格者としても認めてゐないよ。何卒蠓蛸別さまのこた、言はぬよにして下さい」

初「モシ、高姫さま、ここはウラナイ教ぢやありません、松彦さまがお出でになつてから、ユラリ彦さまや義理天上さま、ヘグレ神社其外、サーパリ、ガラク夕神をおつ放り出し、残らず三五教の神様と祀り替へてあるのですから、蠓蛸別さまが三五教へお入りになつたのが悪い筈はないぢやありませんか、さうすると今は貴女は三五教ぢやないのですか」

「コレ初さま、お前も野暮な事をいふものぢやない、神の奥には奥があり、表には裏があるのだ。此高姫だつて、表面は三五教になつてゐるけれど、矢張りウラナイ教だよ。世の中は一通りや二通りでいくものでないから、お前も其精神で居つ

て下さい。これからお前等二人を空助さまの兩腕として出世をさして上げるから、さうすりや文助さまを頭でつかふやうになるよ、今に受付の命令をハイハイと聞

いてるやうぢや詮らぬぢやないか

「イヤ、分りました。のう徳公、貴様も賛成だらう」

徳「ウン、お前が賛成すりや、賛成しない譯にも行かぬワ、併しながら松姫さ

まは何うだろ、こんな事を御承知なさるだらうかなア」

初「ソリヤ高姫さまの腕にあるのだ、俺達や、只御兩人の頭使に従つて居れば可

いぢやないか」

お菊は外から、窓へ顔をあて、四人の酒を飲んでゐるのを見て、あどけない聲

でうたつてゐる。

「天に口あり壁に耳 企んだ企んだ陰謀を

お菊はソツと兩人の 腹の中まで推知して

一寸其處まで出て來ると 甘くゴマかし戸の外で

スツカリ様子やうすを窺うかがへば

耳みみをペロペロ動うごかして

尖とがつた口くちをしながらも

高たか姫ひめさまと意い茶ちやついた

揚あげ句くのはてが小こ北きた山やま

此この神しん殿でんをウマウマと

占せん領りやうせむとの企たくみごと

初はつ公こう、徳とく公こう兩りやう人にんを

うまく抱だ込きみ酒さけ飲のまし

さうして之これから松まつ姫ひめの

目めを晦くらまして義ぎ理りてん天じやう上やう

日ひの出で神のかみの生いき宮みやと

居あ据すわり泥どろ棒ぼうをする積つもり

何なに程ほど高たか姫ひめ偉えいとて

どうしてどうして松まつ姫ひめの

鏡かがみのやうな魂たましひを

曇くもらすことが出で來きようか

そんな惡あく事じを企たくむより

早はやく改かい惡あくするがよい

改かい心しんするにも程ほどがある

オツトドツコイこりや違ちがうた

さはさりながら高たか姫ひめは

善ぜんをば惡あくと取とり違ちがへ

惡あくをば善ぜんと確かく信しんし

改かい心しん慢まん心しんゴチャませに

なさつてムるお方かた故ゆゑ

私わたしも一寸ちよつと其その流りつ儀ぎ

臨りん時じに使用しやうしましたよ

コレコレもうし空さまえ
蝶蜷別の思ひ者

朝顔猪口の高さまえ
何程お前等兩人が

初と徳とを抱込んで
うまい事をばしようとしても

忽ち陰謀露顯して
逃げていなねばならぬぞや

松姫さまがお前等の
詐り言を眞に受けて

聞かれたところが此お菊
中々承知は致さない

侠客娘と名を取った
浮木の森のチヤキチヤキだ

オホホホオホホオホホ
窓から中を眺むれば

あのマア詮らぬ顔ワイナ
イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ

空ちやま、高ちやま左様なら
ゆつくり陰謀お企みよ

あとからあとから此お菊
叩きつぶしてゆく程に

何だか知らぬが空さまの
姿が時々變り出し

耳の動くはまだおるか
口までチヨイチヨイ尖り出し

鼻より高うなつてゐる
私が一寸首ひねり

考へました結末は 虎と獅子との混血兒
 金毛九尾と御夫婦に なつてここまで小北山
 貴の聖場を占領し 朝から晩まで酒のんで
 威張り散らさむ計劃か 但はここに網を張り
 齋苑の館へ往來する 數多の信者を引捉へ
 墮落さした上ウライナイの 醜の教に引込んで
 此世の中を泥海に 濁らし汚すつもりだろ
 何程辨解したとて お菊がここにある限り
 お前の企みは駄目だぞえ ああ面白い面白い
 面白うなつて來ましたよ 妖幻坊の空助や
 金毛九尾の義理天上 鼻高姫の運の盡
 松姫さまの神力と お千代の方の神懸
 さとき眼に睨まれて 尻尾を出しスタスタと
 忽ち此場を驅出すは 鏡にかけて見るやうだ

悪魔あくまがそんな扮装なりをして 大日おほひの照てるのに吾々われわれを

化ばかそしても反對あへこへに 化ばけが現あらはれ舌したかんで

旭あさひに打うたれて消きえるだろ それ故ゆゑお前まへ空助もくすけは

祠ほこらの森もりにゐた時ときゆ 日輪にちりん様の照てる所ところへ

一度いちども出でたこたないぢやないか たまたま外そとへ出でた時ときは

日蔭ひかげの深ふかき森もりの中なか 初稚はつわかひめ姫とこなの伴ともなひし

スマートさまにやらはれて ビリビリ慄ふるうてゐただらう

お菊きくはチツとも知しらないが 何なんだか知しらぬが腹はらの中なか

グルグルグルと玉たまころが 喉のど元もと迄までもつきつめて

妙めうな事ことをば云いひますぞ これこれ高たか姫ひめ、空もくさまよ

初公はつこう、徳公とくこう兩人りやうにんよ 胸むねに手てをあて思案しあんして

臍ほぞをかむよな事ことをすな 誠まことの日ひの出での義理ぎりてんじやう天上

お菊きくの體たいをかりまして 四人よにんの獸けものに氣きをつける

ああ惟かむ神な々々がら 目玉めだま飛とび出だしませよ

怪しくないかと直覺致しました、違ひますかな

「空助さまと夫婦になつたのが、何が怪しいのだ。神と神との許し給うた結構な生宮だぞえ。神だとして夫婦がなければ、陰陽の水火が合はないから、天地造化の神業が成功せないぢやないか」

「ヤ、さうキツパリと承はりますれば、今後は其考へでお仕へ致します。さうすると空助様は貴女の旦那でムいますか。よくお似合ひました夫婦でムいます。へへへ、イヤもうお目出度う、それでは今日は御婚禮の御披露の酒とも申すべきものですな、ドツサリ頂戴致します。誠に御馳走さまで」

徳「オイ、初ウ、さう御禮を言ふに及ばぬぢやないか、お酒も御馳走の材料も、皆小北山の物でしたのなり、料理も俺達二人がしたのだ。そして新夫婦に、こちらから振舞つてゐるのだから、御馳走さまも何もあつたものかい、先方の方から禮を云つたら可いのだ」

高姫「コレ、徳とやら、お前の云ふ事は一應理窟があるやうだが、それは神界の事の解らぬ八衢人間の云ふ理窟だぞえ。現界の理窟は靈界には通じませぬぞや。」

かうして御馳走が出来るやうになつたのも、皆天上から日の出神様が御光を投げ
與へ、雨露を降らして下さるお蔭で、五穀、さわもの、菜園物一切が出来てるぢ
やないか、其生神様にお給仕さして頂くお前は誠に結構だ。神の方から御禮申す
といふ理窟がどこにあるものかい。チツとお前も神界の勉強をしなさい、さうす
りや、そんな小言は云はないやうになつて了ひますよ」

徳「へー、何とマア都合の好い教理でムいますこと」

「コレ、お前は義理天上の云ふ事が、どうしても腹へ入らぬのかなア」

「へー、さう俄かに入りにくうムいます。何分お酒や御飯で格納庫が充實してあ
ますから、今の所では餘地がムいませぬ」

「何とマア盲ばかりだなア、そら其筈だ、靈國の天人の靈と、八衢人間の靈とだ
から無理もない、お前さまもチツと之から日の出神様の筆先を読みなさい。さう
すれば三千世界の事が見えすくやうになるだらう、コレ初さまえ、お前はチツと
賢さうな顔してるが、高姫のいふ事が分つたかなア」

初「ハイ、仰せの通り、此お土の上に来たものは皆神様のお力でムいます。何

程立派な人間でも、菜の葉一枚生み出すことは出来ませぬ、仰せ御尤もだと考へます

成程、お前は偉いわい、之から空助様の片腕にして上げるから、どうだ嬉しくないか、結構だらうがな。何といつても三五教の三羽鳥の一人、時置師神様だぞえ

ハイ、身に餘る光榮でムいます。オイ、徳、貴様も改心して、結構だといはぬかい……否改悪して、貴女の仰有る通りだ、と、心はどうでもいい、いつておかぬかい。社交の下手な奴だなア

徳、それなら高姫さまの御説に、ドツと改悪して賛成致します。何卒宜しう御願ひ申します

心からの改心でなければ駄目だぞえ。ウツフッフ、コレ空助さま、人民を改心さすのは高姫に限りませうがな

妖幻坊は俄に體が震ひ出した。窓の外を一寸覗いて見ると、猛犬が矢の如く階段を登つて、松姫館の方へ姿を隠した。高姫はアツと一聲、ドスンと腰を下し、

目を白黒してゐる。妖幻坊も亦冷汗をズツポリかき、ガタガタと震ひ戦くこと益々甚しい。

(窓外白雪皚々たり 大正一二・一・二五 舊一一・一二・九 松村眞澄録)

第三章 犬馬の勞(一三一八)

松姫は各神社の拜禮を終り、吾居間に入つて神書を調べてゐた。そこへお千代は慌しく歸り來り、門口の戸をピシヤツと閉め、中からツツパリをかうた。松姫は之を見て怪しみ、

「これ、お千代、夜分か何ぞの様に、何故戸にツツパリをしたり等なさるのだい」
千代「ハイ、今怪體なド倒しものが來たのですよ。何れ此處にも來るか知れませぬから、來たら入れない様にしてゐるのですよ」
「晝の最中に戸を閉めてツツパリかふ等とは可笑しいぢやありませんか。大方晝

泥棒の連中が隊を組んで来たのかい。構はぬぢやないか。ここは神様がムるから、何が来たつて大丈夫だよ。

何、お母さま、泥棒位なら一寸も構やしないが大化物が来たのだよ。今お菊さまと桃の木の下で遊んでゐたら、一人は高姫だと云つて嫌らしい顔した女、又一人は大きな男で耳がペロペロ動いてゐるのよ。屹度あれは化物に違ひありません。お母さまをちよるまかさうと思つて来たのだらうから、屹度會つちやいけませぬよ。それで私が急いで歸つて戸を閉めたのです。

高姫さまと云へば蝶鰻別さまのお師匠様だ。そして今は三五教の立派な宣傳使、何しに又案内もなしに突然お越しになつたのだらうか。ハテ、如何も不思議だ。昨夜も昨夜で妙な夢を見たのだが、ヒヨツとしたら化物ぢやなからうか。いやいや晝間に此神聖な場所へ化物がやつて来る筈がない。いや高姫さまなら會はずなるまい。ハテ、不思議だな。

と云つて首をかたげている。

千代「三五教の宣傳使の高姫さまなら、もちと品格がありさうなものですよ。そ

れはそれは下品な……何とも云へぬ賤しい姿で、一目見てもゾゾ毛が立つ様な女
でしたよ。そして連つてゐる男は半鐘泥棒の様な不恰好な、怪體な面した奴です
よ。如何しても私の目には人間とは見えませぬわ。全く妖怪ですよ」
松姫「ハテ、妙な事を云ふぢやないか。そして受付の文助さまは何とか云つてゐ
ただらうな」

「文助さまは何だか、高姫と云ふ怪體な女と話をして居りましたが、一度松姫様
に申し上げて來ると申して居りましたよ。それを聞いたものだから、文助の様な
盲が、何も分らずにお母さまに、せうもない事を云つて告げようものなら大變だ
と思つて、一步先に知らしに歸つて來ましたの。お母さま、屹度あの二人に會つ
ちやいけませぬぜ」

「それだと云つて、神様のお道では何んな方にでも會はなけりやいかぬぢやない
か。假令化物でも曲津でも、神様の教を説き聞かして改心さしてやりさへすれば
宜いぢやありませんか」
「だつてあんな奴、何を企むか知れやしなわ。お母さまが何と云つても、お千

代よはあんな化物ばけものは入いれませぬよ」

「マア何事なにごとも私わたしに任まかしておきなさい。お前まへさまは未だ子供こどもだから、さう一つ一つひとつひとつ嘴くちばしを容いれるものぢやありませんぞや」

斯かく親おやこ子が話はなしてゐる處ところへ、門口かどぐちの戸とをポンポンと叩たたく音おとがする。之これは受付うけつけの文助ぶんすけが高姫たかひめの來きた事ことを松姫まつひめに報告ほうこくのためであつた。

文助ぶんすけは戸との外そとから、

「もしもし、松姫様まつひめさま、文助ぶんすけでムります。一寸門口かどぐちを開あけて下くださいませぬか。急用きふようがムりまして御相談ごさうだんに参まゐりました」

「ハイ、一寸待まちつて下くださいませ。子供こどもが惡戯いたづら致いたしまして……今直いますぐに開あけますから……これお千代ちよ、早く門かどを開あけぬかいな」

「お母かあさま、門かどを開あけたら文助ぶんすけが這入はいつて來きますよ」

「這入はいつてムる様やうに開あけるのぢやないか」

「だつてお母かあさま、文助ぶんすけの云いふ事ことに卷込まきこまれちやいけませんよ。あの爺ぢいは化物ばけものにひどう感心かんしんしてゐた様やうですから……」

と云ひながらツツパリを取外しガラリと開けた。文助はヨボヨボとしながら鬨を
跨げ、四邊をキヨロキヨロ見廻してゐる。されど松姫の姿はハツキリ見えなかつ
た。只目が悪いので、聲をしるべに話するより仕方がないのである。松姫は、
「さア何卒お上りなさいませ」
と座蒲團を出し文助の手を取つて坐らせた。

文助「アア、年が寄つて目が不自由なものも厄介なものですわい」

「それだつて貴方は心眼が開けてゐるのですもの、結構ですわ。目が見えないと
云つても、あれ位な綿密な繪が書けるから結構ぢやありませんか。時に文助さま、
何か急用でも出来たのでムリますのか」

「ハイ、折入つて貴女と御相談を申し上げたい事が突發致しました。實にお氣の
毒で……何から云つてよいやら、地異天變、言葉の出しやうもムリませぬ」

お千代は側から、

「これ文助さま、駄目よ。彼奴ア化物だから、お前が騙されて居るのだ。お母さ
まに何も言ふぢやありませんか。さアさア トツトとお歸り。足許が危なけりや、

お千代が手を曳いて上げませう」

松姫「これお千代、何と云ふ事を仰有るのだい。お前は子供だから黙つて居りなさい。文助さま、こらへて下さいや。如何も此の子は教育が出来て居ないから困つたものです。お菊さまと好一對です。遊ぶ友達が悪いとサツパリ感化されて了ひます。本當に親も迷惑してゐますのよ。時に文助さま、お氣の毒だとは何事ですか」

「ハイ、實は高姫さまが見えましてムります。そして齋苑の館の總務空助様までがおいでになり、何者か貴女の悪口を申したものと見えて、貴女は今日限り教主の役を解き、高姫様が教主となり、空助様が出張して監督をなさる事になつたのだと云つて、今下に見えて居ります。誠に長らくお世話になりましたが、貴女様とはお別れせなくちやならぬかと思へば實にお名残惜しうムります」

松姫は平然として、

「ホホホホ、何か大變事が起つたかと思へば、そんな事ですか。そりや結構です。妾も實は此處を立退いて、夫と共に大活動をして見たかつたのです、併し

ながら已むを得ず今日まで勤めて居りました。そりや本當に結構ですわ」

「それを聞いて私も一寸安心致しました。いや如何も上のお方の心と云ふものは分らぬものですな。さうなくちやかなひますまい。櫻は夜の嵐にうたれて一つも残らず潔く散るのが譽だと聞きました。イヤ天晴々々、見上げたお志、實に感じ入りました」

と袖に涙を拭うてゐる。お千代は側から、

「これ、文助さま、お前は盲だから化物に騙されてゐるのだよ。お母さままでが、何ですか、あんな奴が來たと云つて此處を飛び出す積りですか。未だ齋苑の館から何とも御沙汰がないぢやありませんか。假令何んな方が見えても相手になつちやいけませんよ。此間もお寅さまが魔我彦を連れて行かれてから、もう四五日になるのに、何の沙汰もないぢやありませんか。同じ齋苑の館から見えるのだから、八島主の神様から御内報がある筈、又魔我彦さまからも何とか知らせがある筈です。先づトツクリと調べた上でないと、えらい目に遭はされますよ」

松姫 「いかにもさうだな。お前の云ふのも一理がある。いや文助さま、何か其高

姫さまは齋苑の館から辭令でも持つて來てゐるか。それとも教主様か魔我彦さまの手紙でも御所持か、それを聞いて來て下さいな」

「ハイ、聞いて參りませうが、何を云つても三羽鳥の一人時置師の神様が御出張になつてゐるのだから、尋ねるにも及びますまい。外の方なら兔に角、何と云つても齋苑の館の總務さまだから、尋ねない方が宜いでせう」

千代「これ文助さま、お前がよう尋ねにや私が之から行つて、本眞物か、偽物か、検査をして來ますわ。お母さま、それで宜いでせう」

「これこれお千代、何を云ふのだ。お前は今日は何にも云つちやなりませんぞや。母が箝口令を布きますぞや」

「だつて千騎一騎の此場合、お母さまの箝口令位で閉口出來ますか」

「ああ困つた娘だな」

「ああ困つたお母さまだな」

文助「困つた事が出來たものだな」

千代「ハツハハハハ」

と笑ふ聲を外から聞きつけて這入つて来たのはお菊であつた。

「お千代さま、何が可笑しいの、よく笑つてゐますね」

「お菊さまか、よう来て下さいました。今ね、文助さまが出て来て、あの化物を空助さまだ、高姫さまだと云つてゐますのよ。それをお母さまが本當にしてるのだもの、可笑しうて堪らないわ」

「本當にね。怪體な奴が来たものですわ。私い高姫と云つたら、もつと立派な小母さまと思つてゐたのに、まるで化物だわ。空助さまだと云つてるが獸の様に耳がペロペロ時々動くのだもの。何でも彼奴ア可笑しい化さまですよ。然しあの婆が「私は高姫だ、高姫さまの師匠だから早く呼んで来い」と云つたので仕方なしに来たのよ。もし高姫さま、あんな奴に會つちやいけませぬよ。然し何とか返事をせなくちやなりませんから、一寸御報告やつて来ましたの」

高姫「それは、まアよう来て下さつた。お菊さま、お前怪しいと思つたのかい」

「如何も可笑しい奴ですわ。キット、ありや贗ですよ」

「お菊さま、それなら貴女御苦勞だが、その高姫さまとやらに斯う云つて下さい

ね、「今松姫は神様の御用の最中だから、濟み次第お目にかかります。それまで

教主館で、お酒なつと飲つて待つて居て下さい」と私が云つたと傳へて下さいね。

文助さまも一緒に歸つて下さい。そして粗忽のない様にもてなしを頼みますよ」

文助「ハイ、承知致しました。サアお菊さま、歸りませう」

とお菊に手を曳かれコチコチと階段を下つて行く。後にお千代は聲を潜めて、

「お母さま、高姫は本當のよ。けれど後からついて來た空助と云ふのは屹度化物

よ。その積りでつき合はなくちやいけませぬよ」

「そんな事、どうしてお前に分つたのかい」

「それでも、私の耳許でエンゼルが囁いて下さいましたもの。お母さまによく氣

をつける様にと云はれましたよ」

「お前は時々エンゼルの御降臨があるので本當に重寶な體ね。そして其化

物は何物だと仰有つたかい」

「あれは妖幻坊と云ふ兇黨界の相當の位地を占めてる大惡魔ださうです。然し日

輪様を恐れる事が非常なもので、晝歩く時は深編笠を被り、中々外へは出ないさ

うですよ。晝間は何時も森の中で寝てると云ふ事ですわ。その妖幻坊に高姫さまが化かされて、又義理天上をふり廻してゐるのだから尚々始末が悪いのよ」

「ハテ、困つた事だな。何とか工夫があるまいかな」

「お母さま、屹度會つちやいけませぬよ。そして高姫は自分勝手に、此處の教主だと云つてるのですよ。齋苑の館からお沙汰のあるまで動いちやいけませぬぞえ。お母さまは小北山の神司だから、誰に指一本さへられる體ぢやありませんからね。屹度調べて見たら、齋苑の館の書付は持つてゐない事はきまつてゐますわ。それで面白いから、一遍調べてやらうと思つたのよ」

「そんな要らぬ事をせなくてもいいぢやないか。高姫さまに恥をかかさないう様に、なるべく御改心を遊ばす様に眞心を盡して御意見を申上げるのだな。お前も出過ぎた事は云はない様にして下さいや」

「それでも餘り馬鹿にしてゐるのだもの、ちつとは言ひたくなつて來るのよ。一遍神様を拜ましてやつたら吃驚するだらうね。それを見るのが楽しみだわ」

「何とまあ口の悪い子だな。人がビツクリするのが、お前はそれ程面白いのかい。」

困こまつたお轉てん婆ばだな」

「それでも世よの中なかを誑たぶらかし人ひとを苦くるしめ、大神おほかみ様の道みちを妨ばう害がいする惡魔あくまだから、チツとは懲こらしめてやらなくちや、神かみ様さまにお仕つかへしてゐるお母かあさまの役やくも濟すみますまい。私わたしだつて化物ばけものを看過かんくわしちや職務しよくむふちうじつ不忠實ふちゆうじつと云いふものですわ。こんな時ときこそは審神さにはを充分じゅうぶんしなくちやなりませぬわ」

「併しかし高姫たかひめさまは本物ほんものだとあれば、私わたしの大恩だいおんある御師匠おししやう様さま、お目めにかかつて御挨ごあいさ拶さつを申上まをしあげねばなるまい。そして其その様やうな惡魔あくまに騙だまされて居をりなさるなら、氣きをつけて上あげなくちや師弟していの役やくが濟すむまい。ああ困こまつた事ことが出來できたものだ」

斯かく話はなす所ところへ尾ををふつて潔いさぎよく這入はいつて來きたのは巨大きよだいなる猛犬まうけんであつた。見みれば首くびたまに何なにか手紙てがみの様やうなものが下さがつて居ある。

松姫まつひめ「ア、これは何處どこからか手紙てがみを持つてお使つかひに來きたのだな。これこれお犬いぬさま、何處どこからか知らぬが御苦勞ごくらうだつたな。どれどれ、お手紙てがみを見せて頂いただきませう」とやさしく云いひながら二ふたつ三みつつ首くびの邊あたりを撫なでて可愛かあいがり、括くりつけた手紙てがみを取とり、上書うはがきを見みれば、「小北山こぎたやまの神司かむつかみ松姫まつひめ様さまへ、祠ほらの森もりに於おいて、初稚姫はつわかひめより」と記しる

してある。

「ああ之は初稚姫様の御手紙だ。何か變つた事が出来たのかな。これお千代や、一寸門口を閉めて下さい。祕密の御用かも知れないから」
お千代は外をキヨロキヨロ見廻し、誰も出て来ないので安心の胸を撫で下し、ソツと戸をしめて堅くツツパリをかうた。此猛犬は云はずと知れた初稚姫の愛犬スマートなる事は云ふまでもない。

(大正一二・一・二五 舊一一・一二・九 北村隆光録)

第四章 乞食劇(一三一九)

松姫は靜に封を押切り押戴いて讀み行く。おひおひと顔色變り兩手は慄ひ、容易ならざる文面の如く思はれた。そして松姫は手紙を讀み了りホツと溜息をついた。

千代「お母さま、私の云つた事違やしますまいがな。高姫は齋苑の館からの命令
ぢやありますまい。そしてあの空助と云つてるのは化物でせうがな。此犬は初稚
姫様の愛犬でスマートと書いてありませう」

「ああ、油断のならぬ魔の世界だな。こりや斯うしては居られますまい。併し
ながら初稚姫様の仰せ、何處までも善一つで高姫様を改心させにやらぬ。然し
初稚姫様のお言葉に……お前は小北山の神司だから、何處までも此處を動いては
いかぬ……と書いてある。もしも高姫さまが何處までも此處の教主と頑張つたら、
何うしようかな。せめて魔我彦さまでも居つてくれたら、何とかいい相談が出来
るだらうに、困つた事だ」

「お母さま、決して心配要りませぬ。どうせ一度はお宮さまを巡拜するでせうか
ら、上のお宮のお扉を開いたら、屹度ビツクリして逃げるでせうよ。エンゼルさ
まが私にさう仰有いました」

「ああさうかな。何卒まア都合よくやりたいものだ。然しお前も此スマートさま
を連れて高姫さまの目にかからぬ處へ暫く遊びに行つて来て下さい。お前が居る

と都合が悪くからな」

「それならお母さま、確りなさいませや。何卒巻き込まれぬ様になさいませ。これ、スマートさま、お前は可愛い犬ね」

と云ひながら首たまに抱付いた。スマートは薄い平たい舌でお千代の頬をペラツと舐めた。お千代はビックリしてスマートを庭に押し倒した。スマートは仰向に轉けたまま呑気な風で足で空をかいて居る。

「ア、此犬は牝だわ。さアおスマちやま、お千代と春先でもあり、陽氣がいいから、林の中へ行つて遊んで來ませう。兔でも居つたら脅してやりませうね」

と云ひながら頭を撫でる。スマートはムツクと起き上り、お千代の後について山林の中へ遊びに行く。後に松姫は只一人手を組んで思案にくれてゐた。

「あああ、高姫さまは困つた方だな。どうしたら本當の御改心が出来るのだらう。初稚姫様の御手紙によれば、此頃はスツカリ精神亂れ、金毛九尾の惡狐や蟆や蛇や狸、鼬などの無料合宿所になつてゐられるとの事、それに又空助と名告つてるのは、初稚姫様のお父さまでなくて大雲山の妖幻坊だとか、ほんとにいやらしい

化物をつれて、夫婦氣取りで、こんな處に出て来て松姫を追ひ出し、自分が教主にならうとは、どうした事だらう。私は別に此處の神司に執着心はないのだけだ、惡神にみすみす此處を開け渡して出る譯にも行かない。そんな事しては神様にも濟まない。ここは何處までも孤軍奮闘の覺悟でなければならぬ。ああ國治立大神様、豊國姫大神様、木花姫大神様、金勝要大神様、守り給へ幸へ給へ、惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世』
と一生懸命に祈つてゐる。

そこへバラバラとやつて来たのは初、徳の兩人であつた。足許もヨロヨロしながら兩人は、

「松姫さま、エー、一寸御報告に來ましたが、三五教の宣傳使、ウラナイ教の元の教祖高姫さまがお越しになつて居ります。そして松姫は何故私が來てゐるのが分つてゐるのに挨拶に來ないのか。御用が濟んだら出て來ると云つておきながら、まだ出て來ないと云つて、大變な立腹でムります。そして此館は今日から高姫が教主だ。空助様が監督に來たのだと、それはそれはえらい御權幕でムりますよ。」

早く御挨拶においで下さいませぬと、貴女のお身の上に關した一大事が出來致しますから、ソツと御注意に參りました」

「假令高姫さまが此處の教主になられようが、事務を引繼がぬ間は此處は松姫の管轄権内にあるのだから、折角伺ふと云つたけど、私の方からよう伺はないから、高姫さまと空助さまに、此方へ出て來て貰つて下さい。それが至當だからな」

初「松姫さま、何とえらい勢ですな。泣く子と地頭とには勝たれないと云つて、そこは貴女の方から折れてかかりなさるがお得かも知れませぬよ。きつと悪い事は申しませぬ。貴女も足掛け首掛け四年振此處にゝつたのだから、今日俄に立退き命令を下されては面白うゝりますまい。それは私もお察し申して居ります。併しながら、これも因縁だと諦めて、素直に高姫さまや空助さまに御面會をなさるが宜しい。そしたら又何とか貴女の都合のいいやう取計らつて下さるでせうからな」

「何と云つても、そんな理由はありませんから、高姫さまに私交上としては私の師匠だから濟まないが、公の道から行けば私は此處の神司、何の遠慮もありません

ぬから、何卒私の職務として調べたい事がある、よつて直様御兩人に此方へ来て下さる様に傳達して下さい」

「それでも大變な權幕で、動きさうにやムりませぬ。そんな事をお傳へしようものなら、私は折角空助さまの片腕になつた職務まで剥奪されて了ひます。のう徳よ、さうぢやないか」

徳「ウン」

松姫「これ、初さま、お前さまは空助さまの片腕になつたと今云ひましたね」

初「ハイ、確に申しました。新教主高姫殿の夫空助、又の御名は時置師の神、齋苑の館の總務を遊ばす空助様の兩腕と兩人がなつたのだから、凡ての宣傳使を願で使ふ初さま、徳さまですよ。如何に松姫さまだつて、もう斯うなつた上は此初さま、徳さまの命令を聞かすには居られますまい。如何でムる。返答承はりませう」

「ホホホホ愈三助人形か瘦バツタの様なスタイルをして、よくも威張つたものだね。お前さまは空助さまの兩腕になつたか知らないが、此處に居る間は此松姫

の命令を聞かなくちやなりません。魔我彦からお役目解除の辭令でも受けた上、
空助さまの推薦によつて、八島主さまから立派な辭令を頂いて來なくちや駄目で
すよ。そんな夢なんか、いい加減にお覺ましなさが宜からうぞや」
「何と云つても駄目ですよ。現に空助様の口から仰有つたのですもの。そして高
姫さまが證據人ですもの。へん、之が違ひつこはありませぬわい、のう徳公」
と初公は、

「ウン　ウン　ウン」

と拳を握り反身となり、稍酒氣を帯びし事とて、高慢面をして得意氣に雄猛びし
て見せた。松姫はあまりの可笑しさに吹き出し、

「ホホホホ」

と笑ひ轉けた。初公は大いに怒り、

「こりや、松姫、無禮千萬な、勿體なくも總務の片腕と聞えたる、齋苑の館の二
の番頭さまだ。某の面體を見て笑ふと云ふ事があるものか、いや輕蔑致すと云ふ
事があるか。公私本末、自他の區別を知らねば決して神司たる事は出來ませぬぞ。

實の所は空助さまが、お酒の上ではあるが、私等に全權を任すから松姫をボツ拂へとの仰せ、さア初公の言葉は空助の言葉だ。さア尻を繋げてトツトと出て行け。猶豫に及ばば了簡致さぬぞや」

「ウツフフフあのまア、乞食芝居が上手なこと。さア一文あげるから歸んで下さい。もう澤山拜見致しました」

「愈以て怪しからぬ事を申す。松姫の阿女奴、さア只今限り事務を引渡しトツトと出て失せう。最早其方は小北山には何一つ用もなければ權利もない。おい徳公、貴様は高姫さまの代理ぢやないか。何故黙つてゐるか」

徳公は高姫氣分になり、肩を揺り首をふり婆聲を出して、

「これ松姫さま、私は高姫の代理ぢやぞえ。長らく御苦勞でムりました。併しながら今日迄お前さまは神様の御都合で御用をさせてあつたのだ。然し上義姫はもう此處に用事はない。之から義理天上日の出神が此處を構ふによつて、お前はトツトと出て行つて下さい。それとも十分改悪して、空助や高姫の云ふ事を聞くなから、炊事場のおサンどんに使つて上げぬ事もない。然しお前も此處に住み慣れて

來たのだから、此處を追ひ出されるのは残念だらう。それは高姫もよく分つてる。それでお前さまは、どんと、かばちを下げて炊事の御用か雪隠の掃除をなさいませ。そこまで苦勞をなさらぬと、今から偉さうに教主だなんて威張つて居ると、猿も木からバツサリ落ちる例もありますぞや。サアサア、返答々々、如何でゐる。高姫の代理が此處でキツパリと承りませう。さてもさても残念さうなお顔だな。他人の俺でさへ涙が零れませぬわい。アーン、アーンアーンアーンアーンアハハハハ、泣くのか笑ふのか、いやもう譯がわかりませぬ。松姫さまの事を思へば泣きたくなり、高姫さまの事は思へば笑ひたくなる。悲しい事と嬉しい事と一度になつて來た。親の死んだ處へ花嫁が出て來た様な心持だ。悲喜交々相混り苦樂一度に到來す。上る人と下る人、ほんに浮世は儘ならぬものだな。アツハハハハ「アーンアーンアーンアーン如何しようぞいな」如何しようぞいな。此行先はお千代を連れて袖乞ひ、物貰ひに歩かにやならぬと思や、俺は胸が引裂けるやうに思ふワイの……（義太夫）之と云ふのも前の世で、如何なる事の罪せしか、悲しさ辛さ、身も世もあらぬ憂き思ひ、エエへへへん

エーエー、如何しようぞいなー」エーエ、到頭俺の體に松姫さまの副守護神がのり憑りやがつて、泣いたり笑つたり、いやもううつり易い水晶魂は斯んなに苦しいものかなア。のう初公、俺等もヤツパリ春が來たぢやないか。此好機を逸して、何時の日か、出世の時を得むやだ。おい、有力なる後援者が出來たのだから、チツとは無理でも氣の毒でも、奴隸的道德は廢めにして權利義務を主張し、自分の位地を高めるのが一等だぞ。のう初公、確りやつてくれ。俺も今度は大車輪だから、イツヒヒヒヒヒ」

「ホホホホ、あのまアお二人さま、揃ひも揃うて、何時の間に、そんな芝居を覺えて來たの。犬が笑ひますよ」

初「こりや、松姫、何處までも教主面をさげやがつて、俺達二人を何と心得てる。無禮ぢやないか。左様な失禮なことを申すと、此儘には差許さぬぞ」

徳「こりや松姫、何と心得てる。今迄の徳さまや初さまとはチツと値段が違ふのだ。エー、俄仕入れのバチ者とは違つて上等舶來品だ。あまり見違へを致して貰はうまいかい」

「ホホホホ、虎の威をかる糞喰ひ狐とはお前達の事だよ。もう斯うなつちや松姫も了簡なりませぬ。さア今日只今から暇をつかはすによつてお歸りなさい。一分間も此聖場にはお前の様な薄情者置く事は出来ませぬ」

初「ヘン、馬鹿にすない。もう此小北山は貴様の権利ぢやないぞ。勿體なくも空助さまの御監督の許に高姫さまの御管轄区域だ。お前の方から暇を貰ふよりも、こつちの方から暇をくれてやるのだ。有難く思へ。さアさア出て行かう出て行かう。グズグズして居ると邪魔になるわい」

徳「おい、こんな分らぬ女に何時まで掛合つた所が駄目だ。空助さまがやつつけて了へと仰有つただぢやないか。おい、やつつける やつつける」

「よし来た」

と二人は仁王立となり、松姫を中に置いて、今や拳骨を固めて飛鳥の如く飛びかからむとしてゐる。松姫は泰然自若として少しも騒がず、二人の目を見つめてゐる。二人は打掛らうとすれども、何故か、松姫の身體から光が出る様に思はれて、目が眩み飛びつく事が出来ない。松姫は心靜かに歌を歌つてゐる。

虎の威をかる古狐

小北の山に現はれて

松姫館に侵入し

無道の難題吹きかけて

卑怯未練に兩人が

嚇し文句を並べ立て

木偶坊の様なその姿で

握り拳を固めつつ

慄ひゐるこそ可笑しけれ

初公、徳公よく聞けよ

空助司と名告りゐる

彼は誠の人でない

大雲山に蟠まる

八岐大蛇の片腕と

兇黨界にて幅利かす

妖幻坊の曲津ぞや

高姫司は戀淵に

知らず知らずに陥りて

妖怪變化と知らずして

空助司と思ひつめ

得意になつて今此處に

夫婦氣取りで來たなれど

決して誠の三五の

八島の主のお言葉に

従ひ來りしものでない

これらの館を奪はむと

曲津の神に唆られて

惡逆無道の企みをば

敢行せむとするものぞ

汝等二人は曲神に

魂をぬかれて目が眩み

名利の欲に迷ひつつ

見るに堪へざる狂態を

演ずるものぞ、いと惜しや

早く心を改めて

此松姫が言の葉を

完全に委曲に聞くがよい

早目を覺ませ目を覺ませ

神は汝と俱にあり

汝も神の子神の宮

恵みの光に照されて

正しき神の御子となり

吾に犯せし罪科を

此場で直に悔悟せば

許してやらむ惟神

神に誓ひて兩人に

完全に委曲に宣り傳ふ

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひ終るや、兩人は兩眼より涙をハラハラと流した。そして少しく首を動か
改心の意を表した。松姫は忽ち靈縛を解いた。二人は身體もとの如くになり、パ

夕（ゆふ）パタと表（おもて）へ驅（か）け出（だ）した。果（はた）して彼（かれ）等（ら）兩人（りやうにん）は改（かい）心（しん）したであらうか。但（ただ）し再（ふた）び惡（あく）意（い）を起（おこ）して、松（まつ）姫（ひめ）に對（たい）し如（い）何（か）なる危（き）害（がい）を與（あた）へむとするであらうか。後（こう）節（せつ）に於（おい）て審（つまび）かになるであらう。あゝ惟（かむ）神（な）靈（ら）幸（ち）倍（は）坐（ま）せ。

（大正一二・一・二五 舊一・一・一二・九 北村隆光録）

第五章 教唆（けうさ）（一三二〇）

妖（えう）幻（げん）坊（ぼう）、高（たか）姫（ひめ）は、イチヤイチヤ云（い）ひながら酒（さけ）を汲（く）み交（か）はし、へべレケになつた妖（えう）幻（げん）坊（ぼう）の無（む）理（り）をなだめながら、初（はつ）公（こう）、德（とく）公（こう）の兩（りやう）人（にん）が返（へん）答（たふ）如（い）何（か）にと心（こころ）待（ま）ちに待（ま）つて居（ゐ）た。そこへスタスタと青（あ）い顔（かほ）して歸（かへ）つて來（き）たのは、初（はつ）公（こう）、德（とく）公（こう）の兩（りやう）人（にん）であつた。高（たか）姫（ひめ）は目（め）敏（びん）く之（これ）を見（み）て、
『オイ兩（りやう）人（にん）、えらい暇（ひま）が要（い）つたぢやないか、どうだつたな。松（まつ）姫（ひめ）はウンと云（い）つただらう』

初はつ「へい、イヤもう何なんでムじむいました。それはそれは偉えらいものですなア、本ほん當たうに一ちよ寸つと手に合あひませぬわ」

「手に合あはぬとは、松まつ姫ひめが義ぎ理り天てん上じやうの申まをす事ことを聞きかないと云いふのかえ」

「オイ徳とく、貴き様さまは高たか姫ひめさまの代だい理りぢやないか、お前まへ代かはつて報ほう告こくして呉くれ」

徳とく「工たく高たか姫ひめさま、貴あなた女なつの御ご命めい令れいによつて種いろ々いろと申まをしました所ところ、松まつ姫ひめの奴やつ、金きん毛まう九きう尾びがのり憑つつて居ゐるのか、それはそれは偉えらい勢いきほひで、到たう底てい吾われ々われの云いつた位くらゐでは

「かて」つけませぬがな」

「かてつかぬとはどうしたと云いふのだえ。つまり高たか姫ひめの云いふ事ことは聞きかないと云いふのかえ」

「ハイ、聞きかないとも申まをませぬが、お前まへさまにはいろいろのものが雑ざつ居きよしてゐるさうですよ。さうして空もく助すけさまは大たい雲うん山ざんの妖えう幻げん坊ぼうと云いふ妖えう怪くわいだといつて居ゐましたよ。何なんとかして追おつぽり出だす積つりだと意い氣き込ごんで居をりましたよ」

「何なんと、空もく助すけさまを妖えう幻げん坊ぼうだと、いよいよもつて怪けしからぬ。松まつ姫ひめの奴やつ、グヅグヅして居ゐるとどんな事ことを申まをすか分わかつたものぢやない。これ空もく助すけさま、起おきなさら

ぬかいな。お前さまを本當の空助ぢやない、化州だと云つて居るさうですよ」

妖幻「ハハハハハ、化物と云つたか、さうであらう。變性女子の瑞の御靈でさへ

も大化物と云はれて居るのだから、俺も化物と云はれるやうになれば光榮だ。高

姫喜べ、これでもつて俺の人物の偉大崇高なる事が分るだらう、アハハハハ」

初「それでも化物と松姫の云つたのは、そんな意味ではありませんませいぜ、貴方は

何でも大雲山の妖幻坊だとか云つて居ましたよ」

「怪しからぬ奴だ、さう云ふ事を云はして置いては、吾々の目的の邪魔になる。

こりや何とか致さねばなるまい。俺が行つて取り挫いでやるのは容易い事だが、

それでは餘り大人氣ない。オイ初、徳、俺の最前言つたやうに思ひ切つてやつつ

ける。お前達も俺の兩腕となつた以上は、今が手柄の仕所だ」

初「へエ、エエやつつけますが、それがそれ中々の強かものでげして、實はその、

エー何でげす」

と頭をガシガシ搔いて居る。

高姫「コレみつともない。松姫にやられて來たのだな。時に空助さま、やつつけ

ると仰有つたが、滅多に手荒い事をなさるのぢやありますまいな。松姫は私の弟子ですよ。何程反對致しても、私は彼奴を構うてやらねばなりません。」

妖幻「何と高姫さま、貴女は慈善家ぢやなア。ヤ、感心々々、それなら何故、珍彦に毒酸を盛つたり、虬の血を盛つた杯を與へたのだ。やつぱり奥には奥があるのかなア、アハハハハ」

「これ初さま、徳さま、きつと手荒い事をしてはなりませんよ。併し正當防衛は此限りにあらずだから、どうか空助さまのお言葉に従つて一働きして下さいな」

「へエ私は何でも致しますが、この徳の奴が臆病ですから、氣を取られて思ふやうに働かせぬわ」

妖幻「それならお前一人行つてやつて來たらどうだ。多寡が女の一匹ぢやないか。それ位の事が出來なくて、大望な御用が出來るか」

「私一人では、どうも都合が悪いちやありませんか、よう考へて御覽なさい。貴方の兩腕ぢやありませんか、片腕では飯喰ふ事も、針仕事一つする事も出來ませぬだらう。それだから、どうしても徳を邪魔になつても連れて行かなくちや都合

が悪いですな」

徳「馬鹿を云ふな、貴様が一番がけに靈縛にかかつてふん伸びたぢやないか」

「ふん伸びたのは貴様も同然だ、偉さうに云ふない」

「それでも第一着に貴様がふん伸びたのだ。俺はおつき合にふん伸びて居たのだ。

餘程松姫が怖ろしいと見えるのう。そんな事で俺の上役にはなれぬぞ。サアどう

だ、茲で彼奴を倒した方が上役にして頂くと云ふ事を御兩人様の前で願はうぢや

ないか」

妖幻「アハハハハ、そりやさうだ、手柄があつた方が上役になるのは當然だよ、

ちやんと草鞋でもはいて足装束をし、身動きのし易いやうにして行くのだ」

「ハイ畏まりました」

と兩人は、慌しく納屋に入り、喧嘩装束に身を固め、櫂の棍棒を携へて松姫館に

進むべく準備に取り掛つた。妖幻坊、高姫は以前の如く、ひそひそ何事か囁きな

がら飲酒に耽つて居る。

お千代はスマートと共に躑躅の花などをちぎり戯れながら、向ふの谷の森林に

何時とはなしに進み入つた。スマートは何とはなしに俄に體を慄はせ、遂にはお千代の袖を銜へて引つ張り出した。お千代は驚いて、

「これスマートや、何をやるのだい。ちつと温順しうおしんか」

とぴしやつと横面をはる。其處へ慌しく走つて来たのはお菊であつた。お菊は八

アハアと息を喘ませ、お千代の此處に居るのを見てやつと安心したらしく、

「お千代さま、貴女此處に居たの、私此處まで逃げて来たのよ。あの空助と云ふ

奴化物だわ。さうして此館を横領しようと考えて居る太い奴だから、すつかり素

破抜いてやつて、此處まで逃げて来たの。きつと怒つて追驅けて来るに違ひない

と思つたからねえ、本當に困つた奴が来たものだわ。そしてその犬は何處から來

たの」

「これはスマートと云つて、初稚姫さまの愛犬だと云ふ事よ。どこともなしに賢

い犬よ」

「こりやスマートさま、よう来て下さつたねえ。何さうお前は騒ぐの、些と靜に

しなさらぬか」

と頭を撫でる。スマートは益々落付かぬ風情をする。

千代「どうも不思議だわ、大方お母さまの身の上に何か變つた事が出来たのぢやあるまいか。俄に胸騒ぎがして來ましたわよ」

お菊「あの化物奴、お母さまを嘔ひに行きよつたのか知れませぬ。それでスマートが、こんなに騒ぐのでせう、お千代さま、其綱を解いておやり」

お千代は、

「さうねえ」

と云ひながら松の株に繫いだ綱を解いた。スマートは一目散に、細くなつて谷を越え姿を隠した。

千代「何とまあ早い犬だ事、もう姿が見えなくなつて仕舞つたわ。お菊さま、私氣に掛るから一寸歸つて見ますわ。お前さまもそこまで來て下さいな」

「ハイお供致しませう。若しも化物が暴れて居つたら何うしませうかねえ」

「サア、神様をお願ひして助けて貰ふより仕方ありませんわ」

とこんな事を話し合ひながら、覺束ない足許で小柴を分け、松姫館をさして歸り

行く。

さて松姫は唯一人戸を閉め切つて神殿に向ひ、いろいろと取るべき目下的方針について神示を伺つて居た。其處へ裏と表の戸を一度に押し破り入つて來たのは初、徳の兩人であつた。松姫は驚いて、

「ヤアお前は初公、徳公、血相變へて何しに來たのだ」

初「そんな事問ふだけ野暮だ。吾々は空助さまの命令によつて、頑固なお前をやつつけに來たのだ。最前は馬鹿な事をしやがつて大きに憚りさま。今度は空助さまから神變不思議の魔法を授かり出直して來たのだから、ジタバタしても駄目だ、覺悟せい」

と兩人は櫂の棍棒をもつて打つてかかる。松姫は已むを得ず、其處にあつた机を取るより早く二人の打ち込む棒を右へ左へうけ流し、暫く防戦につとめて居た。そして心の中に嚴の御靈大神、瑞の御靈大神、守らせ給へ、救はせ給へと念じつ

つ、命限りに二人の荒男の激しき棒先を受けて居る。松姫は數十合戦つて見たが、最早體力盡き、二人の鋭き棒に打ち殺されむとする

一刹那、宙を飛んで駆け来りたる猛犬スマートは、矢庭に初公の足を銜へて引き倒した。續いて徳公の足を又もや銜へて其場に引き倒し、ウーウーと眼を怒らし睨みつけて居る。されど靈犬スマートは二人の體に些しも傷を負はせなかつた。二人は起き上り這々の體にて空助、高姫の酒宴の席へ、バラバラツと命辛々かけ込んだ。二人の逃げ行く姿をお千代、お菊の兩人は、十間許り間隔をおいた地點より打ち眺め、手を拍つてワアワアと心地よげに嘲笑ひして居る。妖幻坊、高姫は二人の様子に不審を起し、

妖幻「こりや兩人、其態は何だ、些と確りせぬかい」

初「イヤもう大變でムいます。命辛々逃げて参りました」

「何が出たと云ふのだ。松姫にとつて放られたのか。エー、何と弱味嘈だな」

「へエ松姫も中々の豪傑ですが、松姫所か、どてらい奴が出て来て、イヤもう散々の目に遇つて来ました」

高姫「エ工間に合はぬ奴だな、これ徳、一體何が出たと云ふのだえ」

徳は慄へながら、

「ハイ、松姫と渡り合つて居りました所へ、俄に小北山の狼が飛び出し、吾等二人を銜へて倒しました。それ故俄に怖ろしくて、髪の毛が縮み上り手足が慄ひ戦き、たうとう此處まで命辛々逃げ延びました。何程出世さして貰つても、こんな怖い事は孫子に傳へてお断りです。出世などはもうしたくはありませぬ」

妖幻「何とまあ弱蟲だな、狼位が何怖ろしいのだ。狼なんかは友人だ……おつとどつこい、友人も同様だ、アハハハハ」

初「もし空助さま、貴方は狼が怖くないのですか」

「狼が怖くて此世の中に居られるか。今の人間は、何奴も此奴も美しい顔をして人間の假面を被つて居るが皆狼だ。ちつと下れば狐、狸、蛇、鼬、蝶のやうな代物だ。貴様も矢張四つ足の靈と見えて、たうとう尻尾を出しやがつたな。口程にもない代物だ、アハハハ」

高姫「どうも口ばかりで、間に合ふ靈はないものだ。これ空助さま、中途半に置いて置く譯には参りますまい。お前さまがこれから行つて始末をつけて下さい。若し松姫が此處を逃げ出し齋苑の館にでも行かうものなら、忽ち露顯して困るぢや

ありませぬか。何れは分る事ですが、仕組をするまでは、やつぱり三五教に化けて居なくちゃ、完全に目的が達せられないぢやありませんか。ウラナイ教の再興を企てるのだから、今が肝腎要の時ですよ」

「俺が行けば何でもないので、併し茲は一つ工夫をして、下から出て松姫を懐柔し、樽俎折衝の間に都合よく談判を済ませる方が無難でよからう。其代りに初公、徳公は亂暴を働いた奴だから、松姫の前に連れて行つて尻を引きめぐり、三百の笞を加へてやれば、それで松姫も安心して此方の云ふ事を聞くだらう」

「成程、刃に血塗らずして敵を降すと云ふ御方針、遠は空助さまだワイ。私もそれなら賛成致します」

初「アアもしもし空助さま、高姫さま、吾々兩人は貴方の御命令で荒仕事に行つたのです。それに何ぞや、松姫さまの前で尻を捲つて、三百も笞打たれて耐りま

すか、なア徳、本當につまらぬぢやないか」
徳「こんな事なら、云ふ事を聞くぢやなかつたになア。空助さまは、さうすりや矢張悪神かも知れぬぞ」

妖幻えうげん「もう斯かうなつた以上いじやうは、貴様等きさまらりやうにん兩人、逃にげようと思つたつて逃にがすものか。
曲輪まがわの魔法まはふによつて其方等そのほうらりやうにん兩人を卷まいてあるから逃にげられるものか、カナリヤが
鳥籠とりかごに入いれられたやうなものだ」

初はつ「のう徳とく、餘あまりぢやないか、命いのちがけの仕事しごとをさされて、其上そのうへしり尻さんびやくの三百たも叩たたかれ
て耐たまるものかなア」

徳とく「アンアンアン、えらい事ことになつて來きたわい、これと云いふのも餘あまり欲よくに呆はうけた
から罰ばちが當あたつたのだ。アンアンアン、三五あななひの大神おほかみさま様、えらい取違とりちがひを致いたしました。
何卒どうぞお許ゆるし下くださいませ、惟かむな神がらたま靈ちはへ幸ませ倍ませ坐せ世せ」

と涙なみだながらに手てを合あはす。

高姫たかひめ「ホホホホ、正直しやうちきの男をとこだな、態わざと芝居しばゐをするのだから、お前まへの尻しりを叩たたくやう
に見みせて地ちべたを叩たたくのだから、些ちつとも痛いたい事ことはない。そして甘うまく松姫まつひめを得とく心しんさ
せ、無事ぶじ事務じむの引繼ひきつぎをさして了しまふのだ。さうすればお前まへも立派りつぱなお役人やくにんになれる
のだからなア」

「ヤアそれでやつと安心あんしんしました。オイ初はつ、矢張やっぱり高姫たかひめさまや空助もくすけさまの智慧ちゑは偉えら

いものだ。もう安心だ、尻を叩いて貰はうか

「ウン、そんな尻の叩きやうなら、百でも千でも、ビクとも致さぬ豪傑だ。何卒、高姫さま、空助様、尻の千切れる所までお叩き下さりませ。之位の御用は屁のお茶でムいます」

妖幻「アハハハ、それなら是から愈第二の作戦計畫にかからうかなア」

高姫「オホホホ、何とまア、腰抜の英雄、有名無實の豪傑だこと」

兩人「ウエエエエ、ウエエハハハハ」

(大正一二・一・二五 舊一・一二・九 加藤明子録)

第六章 舞踏怪(一三二一)

松姫の館には、お千代、お菊と女三人首を鳩め、ひそびそと何事が囁いて居る。勇敢なスマートが、松姫の危難を助けて呉れた事などが無論話頭に上った。スマー

トは俄に魔の如く姿を消して仕舞つた。

千代「あれまア、可愛いスマートが何處へやら行つて仕舞つたわ、私どうしませう」

松姫「スマートは神様のお使で吾々の危難を助けに来て下さつたのだから、もうお歸りになつたかも知れないよ」

「それだつて私、あのスマートが好きで耐らないのよ。お母さまの危難を谷の向ふからよく探知して助けに来て呉れたのだから。そして賢い犬で私とお友達にならうと云うて約束して置いたのだから」

「茲暫くスマートさまの事は云うてはいけませぬよ、どんなお仕組があるか知れないからねえ」

「だつてスマートは戀しい犬だわ。なア、お菊さま、ほんたうに貴女だつて好きでせう」

お菊「私、貴女の次にスマートが好きのよ」
と斯んな話をして居ると、表にどやどやと人の足音が聞えて來た。

妖幻「こりや初、徳、工工貴様は不届きの奴だ。サア尻を捲れ、なぜ松姫様に御無禮を働いたか。是から此空助が其方の尻引つ叩いて懲しめて呉れる。悪の報いだと思つて観念せい」

初「ハイ誠に誠に濟まぬ事でムいました。貴方のお名を借りました、松姫さまを嚇かしましたのは重々悪うムいました。決して殺さうなぞと思つては居ませぬ。つい酒の興に乗つて狂言をかけたのですから、何卒耐へて下さいませ」

馬鹿申せ、そんな事申しても松姫様に御無禮を加へ、此方の名を騙つたのだから了簡はならぬ、尻を捲れ」

高姫「これ初、徳兩人、お前は空助さまや私の名を騙つて松姫さまに御無禮をしたぢやないか、何と云つても松姫さまに濟まないから、お前の尻を、千切れても構はぬから三百ばかり叩いて上げよう、徳公さまは私の名を騙つたのだから私が叩いてあげる。初公は空助さまの名を騙つたのだから空助さまに叩いて貰ひなさい。サア早く尻をまくりなされ」

徳「ハイ仕方がムいませぬ。どうぞソツと叩いて下さい。三百もそんな太い杖で

やられては命いのちがなくなりますから」

「命いのちがなくなつたつて仕方しかたがないぢやないか、お前まへは松姫様まつひめさまの命いのちを取とらうとしたのだから。サア空助もくすけさま、貴方あなたは初公はつこうをお叩たたきなさい、オイ徳とく、もうかうなつては駄目だめだ、早く尻しりを出ださぬか」

と館やかたの中なかに聞きこえるやうな聲こゑで四人よにんは八百長芝居やほちやうしばゐを始はじめかけた。

兩人りやうにんは答むちを振ふり上あげながら、二人ふたりの尻しりを叩たたくやうな顔かほをして大地だいちを叩たたく。

妖幻えうげん「一つ、二つ」

「キヤツ、キヤツ」

高姫たかひめ「一つ、二つ」

「アイタタタ、アイタタタ」

「四よツ、五いつツ、六むつツ、七ななツ、八やつツ、九ここのツ、十とを」

「キヤツ、キヤツ、キヤツ、アイタタタ、アンアンアン」

手許てもとが狂くるうて、妖幻坊えうげんぼうが力ちから一いつぱい打うち下おろした棒ぼうが初公はつこうの尻しりにビウと當あたつた。初はつ公こうはキヤツと云いつて其場そのばに倒たふれた。妖幻坊えうげんぼう、高姫たかひめの兩人りやうにんは、持場もちばを定さだめて、尚なほも

つづ 続け打ちに數をかぞへながら打つて居る。

初「これ空助さま、約束が違ふぢやありませんか、本當に叩かれるのなら、もう止めですわ、アア痛いワ」

高姫「これ初さま、黙つて居なさらぬか、あいさには二つや三つ手が狂うたつて仕方がないぢやないか」

「それだと云つて痛いワな」

「二十、二十一、二十二、二十三、二十四」

「アイタタアイタ、キヤア、キヤツキヤツ」

高姫「痛かる痛かる、痛いやうに撲るのだ。かうせねばお前の罪も亡びず、私の疑も晴れぬから、辨慶でさへも御主人の頭を撲つた事を思へば辛抱をしなさい」

徳「本當に高姫さま、撲つちや耐りませぬわ、約束が違ふぢやありませんか。何ぼお前さまの辨慶の（辨慶の）ためだと云つてもやりきれませぬわ」

何だか屋外にザワザワ音がするので、お菊、お千代の兩人は立ち出でて見れば右の體裁である。兩人は一度に手を叩いて、

「ああ面白い面白い、芝居ぢや芝居ぢや、痛くもないのに猿のやうに初公と徳公が泣いて居るわ。ありや八百長だよ。お母さま、一寸來て御覽、面白い芝居が始まつて居ますよ」

松姫も氣掛りでならぬので、お千代の言葉に引かれて外に出て見た。空助、高姫の兩人は八百長と見られちや大變だと思ひ、眞劍に力をこめてビウビウと撲り出したから耐らない、忽ち臀部は紫色に腫上り血が滲み出した。二人は動きもならず、目を眩かして仕舞つた。松姫は驚いて其場に走り寄り兩手を擴げて、

「ヤア高姫様、空助様、如何なる事が存じませぬが、どうぞ暫くお待ち下さいませ」

高姫「イヤ、お前さまは松姫さま、長らくお目に掛りませぬ、此兩人が吾々の名を騙つてお前さまを苦しめたさうですから、今折檻を加へて居る所です。何卒お止め下さいますな。これ空助さま、もつと打つてやりなさい。こんな奴は死んだつて構ふものか」

「空助さま、高姫さま、お腹が立ちませうが、これら兩人は小北山の役員、如何

なる事がムいませうとも、私に云つて下されば何とか致しますから、まアまア待つて下さいませ」

妖幻「イヤ初めてお目に掛ります。貴女が松姫さまでムいましたか、えらいお氣を揉ませまして恐れ入ります。許し難い奴なれども、貴女のお言葉に免じ許してやりませう。これ高姫、お前も許してやりなさい」

高姫「エエ私はどうしても許しませぬ。三百の笞を加へなくてはなりません。私や貴方の名を騙つて悪事をなした代物だから、以後のみせしめ、息の止まる所まで撲つてやりませう」

とピシヤピシヤと撲りつけた。徳公は息が切れむばかりになつてヒーヒーとひしつて居る。漸くにして松姫の仲裁によつて鞭を加へることだけはやめて了つた。松姫は、お千代、お菊に命じ水を運ばせ、兩人に吞ませ且つ尻に水をかけてやつた。二人は無我夢中になつて起き上り、尻の痛さに肱をついて庭に横たはつて居る。

松姫「まア可愛さうに、酷いことなされますなア、貴方等の氣の強いには私も

感心致しました」

高姫 「私だつて斯様な事はしたくはありませんが、空助さまと私が貴女を殺して来いといつたやうに申して亂暴を働いた悪者ですから、以後のみせしめに咎を加へたのです。松姫さま、何卒疑はないやうにして下さい、こんな獣は何を申すか知れませぬからなア」

「ハイ何卒お氣遣ひ下さいますな。善悪は神様が御存じですから、私等は善悪を審く力はありません。サア何卒此處は門先……中へ入つて下さいませ。これお千代や、お菊さまと二人、初公、徳公の側に筵をもつて行つて其上に寝かせ、お前等が世話を上げて下さい。お母さまは一寸お二人さまとお話があるから」と二人の介抱を二人の少女に命じ置き、高姫、空助を居間に引き入れた。

松姫 「高姫様、お久しうムいます。貴女は生田の森の神司として、琉の玉を御守護遊ばすとか承はり、お羨ましい事だと存じて居りました。此頃は又齋苑の館へお越しになつて居たさうでムいますねえ」

「ハイ、一寸都合があつて齋苑の館へ参りましたが、神様の命令に依つて、此小

北山は高姫の系統蝶蛸別が開いたのだから、其方が行つて教主となり、松姫さまは生田の森へ行つて貰へとの事でムいます。つまり云へば更迭ですな、自轉倒島は又景色のよい所ですな、高城山からは僅か三十里許りの所でムいますからな」
「それは神界の御都合とあれば是非に及びませぬが、併し貴女は齋苑の館の八島主の命様から御命令を受けてお出でになりましたか、神様の命令と云つても、現界の仕事は矢張現界の法則を守らねばなりません。ついては御辭令がムいませう。一寸拜見さして頂きませう」

「馬鹿な事を仰有るな、松姫さまにも似合はぬ愚問を發するぢやありませんか。三五教は人民の教を立てる所ぢやありません。神様の御命令で働く所でせう。私も誠の義理天上様の御命令で忙しくして仕方がない身を、小北山の神司となつて來たのですよ。お前さまは神様の御命令を聞いて生田の森へ行つて貰ひたい、元はお前さまの師匠ですから、私の云ふ事を聞くでせうね、そして空助さまは生田の森にムつたけれど、今は齋苑の館の總務、此お方がムつた以上は辭令も何も要りますまい。つまり八島主さまの意見は空助さまの意見、空助さまの意見は八

島主さまの意見、又八島主さまの意見は義理天上の意見、義理天上の意見は高姫の意見ぢやぞえ」

「いや分りました、それなら仰に従ひ貴女に事務の引繼を致しませう。それについて私は解職の奉告祭、貴方等は新任の奉告祭をなさらなくてはなりません。それでなくては神様の御用の引繼ぎは出来ませぬからなア」

「イヤ尤もでムいます。お前さま立派に引渡して下さるか、偉いものだなア。其代り生田の森へ行つて下さい、又生田の森へ轉任の辭令がないと仰有るだらうが、現在此處に空助さまがムるから、生證文だ。どうか安心して行つて下さいや」

「左様ならば事務の引繼ぎを致しませう、善は急げと申しますから、一時も早くお空の大神様へ参拜致し、奉告祭を行はうぢやありませんか」

「それは眞に結構でムいます。空助さま、お前さまも、何程靈界の天人だからといつて、今日は新任の奉告祭だから参らねばなりませんぞや」

「ウン仕方が……ウナない、イヤ結構だ、私も奉告祭に参列させて貰ひませう」
松姫 「それでは貴方等にお装束をつけて頂きたうムります。又それ迄に神饌の用

意や被戸の式をせなくてはなりません。役員にその準備を致させませう。肝
腎の初や徳は貴方等に咎を當てられ、八百長芝居が利き過ぎて、あの通り平太つ
て居ますから、他の役員に命じませう。これ、お千代や、お前はお菊さまに二人
の介抱を頼み、文助さまに祭典の用意を命じて下さい。□

お千代は、

□ハイ□

と一言後に残して、文助に松姫の命令を下すべく階段を下り行く。文助は早速四
五の役員に命じ、祭典の準備を整へしめた。彌被戸も濟み神饌も濟んだ。松姫、
高姫、空助は新しき衣装を着替へ、悠然として上段の石の宮の前に現はれた。

忽ち神饌は踊り出し、供へた木の果などは空中に蚋の舞ふ如く舞ひ狂うて居る、
さうして人參も大根も山の薯も蜜柑も川魚もピンピン跳ね出し踊り出した。高姫
は首を傾けて非常に感心をして居る。

□何とまあ神徳の高い者が御用をする事になると偉いものだなア、神様が大變に
お勇みだと見えて、お供へ物が中天に舞ひ上り、皆踊つて居る。これ松姫さま、

偉いものでございませうがな。あれ御覽なさいませ。神様が四邊の木のの上に鈴なりになつて居られませうがな、工工見えませぬか、修業の足らぬものは仕方がございませぬな。義理天上さまが、松姫をおつぱり出せ……いや生田の森に遣はせと仰有つたのも、斯んな仕組があつたからだらう。ああ宙空に八百萬の神様が勇んでお出でになることわいなア。ネーブルなどは、あの通り目の届かぬ所まで上つて舞踏をやつて居ます。何と神徳と云ふものは争はれぬものだなア」

空助は何とも云へぬ澁い顔をして頭の痛いのを耐へて居る。高姫は益々調子に乗つて法螺を吹いて居る。

松姫「これ高姫さま、これ程神様がお勇みになつて居るのですから、一遍、ユラリ彦や月の大神、日の大神様のお扉を開けさせて頂きますせうか」

「ああそれが肝腎だ。お前さま、開けて下さい、私が神様に直接にお話し致しますから。嘸神様も高姫にお給仕をして貰ひ、空助さまに構うて貰へば御満足なさるだらう。大神様、齋苑の館の空助と義理天上日の出神が、今日から御世話をさして頂きますぞや」

まつひめ
松姫はスツと神前に進み、中の社の扉をパツと開いた。空助、高姫の二人はアツと叫んで其靈光に打たれ、ヨロヨロと七歩八歩後すぎりをした途端に、斷岩絶壁から逆とんぼりに、キザキザの岩の上に顛落し「ウン、キヤツ」と怪しき聲を立てながら、痛さを耐へ、

□ 高姫來れ □

と一生懸命坂道を逃げ出した。初公、徳公兩人は之を見るより尻の痛さも忘れ、トントントンと二人の後に従ひ一生懸命に逃げ出す。折からヨボヨボと階段を上つて来る文助に突きあたり、妖幻坊は文助の顔を引つかき坂の下に投げつけながら、飛ぶが如くに雲を霞と驅け出す。高姫は金切聲を振り立てながら髪振り亂し、「でつかい」尻を振りながら可愛い男を逃がしちや大變だと、一町許り間隔を保ち、一本橋を渡り怪志の森を指して逃げて行く。又一町許り後れて、初、徳の兩人が、

□ オイオイ □

と叫びながら、青草の芽含んだ野路を追つ驅けて行く。小北山の頂から、

「ウーウーウー　　ワウ　　ワウ　　ワウ」
とスマートの聲こゑ、雷らいの如ごとくに空助もくすけの妖幻坊えうげんぼうの耳みみに入る。
是これより、スマートは松姫まつひめの返書へんしょを首くびに括くくりつけられ、初稚姫はつわかひめに報告ほうこくすべく祠ほこの森もりをさして歸かへり往ゆく。

（大正一二・一・二五　舊一一・一二・九　加藤明子録）

第二篇　夢幻樓閣

第七章　曲輪玉〔一三三二二〕

階段かいだんを十二三階じふにさんかい上がった所ところで、文助ぶんすけは妖幻坊えうげんぼうに顔かほをひつかかれ、突倒つきたふされ、ウ

ンと呻うめいて、暫しばくは氣きが遠とほくなつてゐた。それ故ゆゑ、後あとから走はしつた高姫たかひめや初はつ、徳とくの事ことはチツとも知らなかつた。依然いぜんとして、彼等かれら一同いちどうは教けう主しゆ館かたに休きう息そくし居ゐるものとのみ考かんがへてゐた。ヤツと氣きが付つき見みれば、懷ふところに何物なにものか蜂はちの巢すのやうな聲こゑが聞きこえて來くる。文助ぶんすけは、

「ハテ此奴こいつア不ふ思し議ぎだ。空助もくすけさまに衝しやう突とつして氣きが遠とほくなり逆のぼ上ぼせて居ゐるのかなア」と思おもひながら、懷ふところへ手てを入いれると、餘あまり重おもくない、丸まるい塊かたまりの物ものが懷ふところに残のこつてゐた、周圍まはりは石綿いしわたのやうに軟やはらかく、そして耳みみへあてて見みると「ウン、ウン」と呻うなつてゐる。文助ぶんすけは少時しばらく掌てのひらに載のせたり、耳みみに當あてたりして考かんがへてゐた。そして八や夕ゆふと片かた手てに膝ひざを打うち、

「ヤ、此奴こいつア、蜂はちの巢すだ。うつかり破やぶらうものなら、此この悪わるい目めを此この上うへに刺さされちやたまらぬ。空助もくすけさまも随ずい分ぶん惡いたづ戯ら好きずきだな、人ひとが目めが見みえぬかと思おもうて、懷ふところへつこ込んで行いつたのだな。餘あまりエライ勢いきほひでおりて來きたものだから、私わたしと衝しやう突とつして、それですたふき倒たふされたのだ。何なんだか顔かほがピリピリする。石いしで顔かほをすり剥むいたと見みえ

と獨り判斷してゐる。

「そして握りつぶしちや蜂が可愛相だ、併しながら、そこらに放つておけば人がいたづらすると困る、此奴ア一つ、御玉筥の中へでも入れておかうかなア。ウン、幸ひ、ここに鞠の空箱がある。丁度具合がよささうだ」

と云ひながら、あつい板箱に玉を入れ、荒白芋で固く結び、自分の座右において、又もや松に日の出の繪の書きさしを、せつせと彩色つてゐた。箱はカタカタと自然に飛上るのを別に怪しとも思はず、蜂が非常にあばれてをるのだと早合點し、其上に珍石の風鎖を載せておいた。唸りはますます烈しくなつて來た。

「ハハア、蜂がたうとう巢を破つて出よつたとみえる、エーエー蜂の巢を破つたやうだといふが、いかにも喧しいものだなア」

と獨語ちつつ、又もや繪筆をせつせと走らしてゐる。

話變つて妖幻坊は逃げしなに、自分の變相術に必要缺く可らざる曲輪の玉を、どつかにおとし、俄に體の具合が悪くなつて來た。此曲輪は肌を離れてから一晝夜經てば、變相が現はれるのである。そして山の上からスマートが雷の如き聲で

唸つたので、ペタリと路傍の芝生の上に倒れて了つた。そこへ高姫が一生懸命に追つ付き、

「コレ空助さま、お前さまはこんな所に倒れてゐるのかいな、サアサア起きなさい起きなさい、どつこも怪我はありませんかぬかなア」

妖幻坊は、懐を探り、曲輪のない事に気がつき、蒼白な顔をし、

「ヤ、失敗つた、肝腎の寶を失つて了つた。これがなければ忽ち正體が現はれるがなア、ああ如何したらよからうかなア」

「コレ空助さま、正體が現はれると今仰有つたが、ソラ一體何の事ですか。そして曲輪とか、今云はれたやうだが、其曲輪は何をするものですか」

「ウン、これは一名金剛不壞の如意寶珠と云つて、あれさへあれば、世の中は自由自在になるのだ。それをたうとう落して了つたのだ、ああ困つた事をしたわい」

「何、金剛不壞の如意寶珠？ それはお前さま、何處から手に入れたのだい。私も其寶珠については随分苦勞したものだよ。一旦私の腹に呑込んだ事があるのだ

からな、それをお前さまが持つてゐたとは、因縁といふものは怖いものだ。如

何して、空助さま、貴方のお手に入りましたか

私が總務をやつてみたものだから、始終齋苑の館のお寶物として監督してみたのだ。それをば此方へ來がけに、ソツと物して來たのだよ

それを何うしたと云ふのだい

どうも小北山でおとして來たやうだ。確に階段を下る時には懐にあつたやうに思ふが、あの文助に行當つた時に、彼奴に取られたかも知れない。ああ向ふの手に入るからは最早取返す事も出來まい。反對に、あちらからあれを使はれようものなら、何うする事も出來ぬからのう

空助さま、そんな氣樂な事言うてをれますか。假令火の中へ飛込まうが、水の中へ入らうが、取返さなくちや、思惑が立たぬぢやありませんか。其玉さへあれは三五教を崩壊させ、ウラナイ教の天下にするのは朝飯前の仕事ぢやないか、何程吾々があせるよりも、其玉一つがどれだけ働きをするか分りますまい。之から私が調べて來ます。もしも文助が持つて居つたら、ひつたくつて來ますから

イヤ、あの玉はお前なんぞが、いらふものぢやない、人がいらふと消えて了ふ

からな」

「馬鹿な事を言ひなさるな、私だつて一度は手に持った事もあり、口に呑んだ事もあるのだ。滅多に消える氣遣ひはありませぬぞや。サ、これから私が取返して來ませう」

「何と云つても、お前は此處を動いちや可かない、此處に居つてくれ。何時スマートがやつて來るか、分つたものぢやないから」

「ヘン、スマートスマートで、何ですか、ありや四足ぢやありませんか」

「俺はあの犬に限つて、頭が痛くつて仕方がないのだ」

と話してゐる。そこへハアハアと息を喘ませながら、初、徳の兩人が漸く追付いた。

妖幻「ヤ、初、徳、お前はついて來たのか、ああ偉いものだ。ヤツパリ俺たちの

味方だ」

初「ハイ、もうあなた、かうなつちや、私だつて小北山には居られませぬ。貴方等のお世話になるより仕方がないと思つて、後追つかけて參りました」

高姫「ああ徳も来て居るぢやないか」

「ハイ、何卒宜しう願ひます。到底小北山へは歸る顔がムいませぬからな。貴方等の御世話になるより、最早活路はムいませぬ」

「お前、御苦勞だが、一寸マ一度、小北山まで行つて来て貰へまいかな」

初「へー、行かぬこたムいませぬが、何かお忘れにでもなつたのですか」

「空助様が一寸した、丸いものを落してムつたのだ。大方、あの文助が拾うて居るに違ひないから、お前うまくチヨロまかして、文助の手から受取つて来て下さい。いい子だからな」

「へー、行かぬこたムいませぬが、又尻の三百も叩かれちや堪りませぬから、小北山ばかりはこらへて貰ひたいものですな。約束を破つて、貴女は本當に叩いたものですから、足が痛くつて、ここまで走つて來るのが竝大抵のこつちやなかつたですよ。此痛い足で、あのきつい坂を再び登れとは、チツと酷いですな。徳、お前何うだ。おれとは餘程疵が軽いやうだから、一寸使に行つて来てくれまいかなア」

徳「俺だつて、貴様より餘程きついぞ。どうも痛くつて、【いのこ】がさして、碌に歩かれやしないワ。足が丸切り棒のやうになつて了つたよ」

「それなら二人行つて来て下さいな。少々ばかり遅くなつても構はないから、私は向ふの怪志の森で、空助さまと、神様に祈つて待つてゐるから……」

二人は不承々に踵を返し、足をチガチガさせながら竹切れを拾つて杖となし、一本橋を危く渡り、小北山の急坂を登つて、漸く受付の前に行つた。見れば文助は一生懸命に繪を描いてゐる。

初「もし文助さま、お前さま、最前はひどうこけましたなア、どつこもお怪我はありませんんだかなア」

「ハイ有難う、空助さまが、餘り勢よく坂を下つてゐるのに、私は目が悪いものだからヨボヨボして上ると、細い階段だから、衝突し、はね飛ばされて、チツとばかり、こんな疵をしました。ピリピリして仕方がないのだ。それでも神様のお蔭で、御神水をつけたら餘程痛みが止まりましたよ。今晚はお土をドツサリ頂いて休まして貰はうと思つてゐるのだ」

「ヤア、何とえらい疵だな、爪形が入つて居るぢやないか」

「尖つた石が澤山に敷いてあるものだから、こんなに傷いたのだよ。空助さまは教主館にゐられるだらうな。そして高姫さまも機嫌がよいかなア」

初公は文助が、まだ空助、高姫等が逃出した事を知らぬものと悟り、稍安心の胸をなで、

「ハイ、今奥に休んでゐられますよ。そして、エー、文助さまに衝突してすまなかつたから、斷りを云つて来てくれと仰有るのですよ。空助さまも目がまはるとか云つて休んでゐられます、高姫さまも介抱してゐるものだから、貴方にお伺ひにも行かれないからと云つてくれと云はれました」

「それはマア御親切に有難いことだ。何卒宜しう、文助が云つて居つたと傳へて下さい。ああ神様のお道の方は、何から何までよく氣の付くものだなア」

「時に文助さま、お前さま何か不思議なものを拾はなかつたかな」

「別に何にも拾つた覺はないが、空助さまと衝突した時、私の懐に妙な聲がするので探つて見れば、蜂の巣のやうなものが出て來たのだ。そしてそれを耳にあて

て見ると、ブンブンと唸つてゐる。此奴ア空助さまが土窩蜂の巣を握つて来て、私を吃驚ささうと思つて、私の懐へ捻込んだのだな。エエ年してテングする人だと思つてゐる。併し何程年寄つても、神様のお道へ入ると子供のやうになるから、つい誰しも悪戯のしたくなるものだ」

「其蜂の巣とやらを一寸見せて下さらぬか」

「イヤイヤそんな物いらつて、何うなるものか。私はそこらへ蜂に出られちゃ大變だと思つて、箱の中へ入れて了つたのだ。どうやら蜂が巣を破つたとみえて、喧しい事いひの。こんなものをいぢつたら、それこそ一遍に目を刺されて了ひますよ」

徳「其蜂の巣を是非とも見せて頂きたいものだな、刺されたつて構やしないぢやないか」

「イヤ、おきなさい おきなさい、お前さまばかりの難儀ぢやない、こんな所であばれられようものなら、誰もかれも大變な目に遇はねばならぬ。それだから私がチャンと箱に入れてしまつておいたのだ」

初はつ 何卒どうぞ 一遍いつべん、其箱そのはこ なつと見みせて下くださいな。中なかまで開あけようとは言いひませぬから

……

「イヤイヤ、お前まへ達たちに渡わたしてたまらうか、之これは直接ちよくせつに空助もくすけ様さまにお渡わたしするのだ。

お寝やすみになつて居をれば、何いづれお目めが醒さめるだらう。其時そのわたし私しが手てづから御渡おわたしする積つもりだ。これは蜂はちの巢すのやうだが、よくよく考かんがへると、何なにかの寶たかららしいから、お前まへさまに渡わたすこたア出で来きませぬワイ。たつて渡わたせと云いふなら、空助もくすけ様さまから何なにか印しるしをもつて來きて下ください、さうすりや其印そのしるしと引替ひきかへに渡わたしませう。後あとから面めん倒だうが起おこると文助ぶんすけも困こまるからなア」

「ああ困こまつた事ことだなア、何なんとかして持もつて歸いななくちや駄目だめだぞ」

「コレ、お前まへは何なんといふ事ことを仰おつしや有ある。どこへ持もつて歸いぬのだい」

「空助もくすけさまのお居間いままで持もつて歸かへつて、其そのブンブン玉たまをお慰なぐさみにするのだ。さうすればお氣きの慰なぐさめになつて、早はやくお治なほりになるだらうからな」

「それ程ほど必要ひつえうなら、之これから私わたしが、つい五間ごけん許ばかりだから、空助もくすけさまのお居間いまへお訪たつね申まをして、直接ちよくせつお手てに渡わたしませう。遠とほい所ところではなし、面めん倒だうな手て續つづきもいらなにか

ら……」

「オイ、初公、此奴ア逆も駄目だぞ。直接行動だ。此文助を押し倒しといて持つて

行かうぢやないか」

「ヘン、偉さうに云ふない、私が隠してあるのだから、口から外へ出さぬ限り、

お前たちが二年三年かかつて探した所で、其所在が分つてたまるものか。何でも、

あれは結構な神力を持つてゐる寶に違ひない、私の身に添うてゐるのかも知れな

い。何だか俄に惜しくなつて来た。空助さまが私を突き倒してまで、懐に入れて

くれたのだから、今になつて返せと云つたつて、権利が此方へ移れば最早文助の

物だ。滅多に返しませぬぞや」

此時側において風呂敷で隠してあつた玉箱が、ウーンウーンと一層高く唸り出

した。二人は、

「ヤ、何でも此近くにあるらしいぞ。オイ、此盲爺を貴様、突倒して抑へてをれ、

其間に俺が搜索するから……」

「コリヤ、目がみえなくても、まさかの時になればコレ此通り、細かい繪を描く

俺だぞ。俺はワザとに盲と云つて、貴様たちの様子を考へて居るのだ。盲でない證據は此繪をみい、これでも分るだろ。そして柔道は百段の免状取りだ。お前達が十人や百人束になつて來たとて、こたへるやうな文助ぢやないぞ。此玉はブンブンいふから文助に授かつた文助玉だぞ。貴様達に渡すべき物ぢやない、秋口の蚊のやうにブンブンぬかさずに、すつ込んでみなさい。それよりも早く炊事場へ行つて、御飯の用意でもしたがよからうぞや。ゴテゴテ申すと、松姫さまに申上げるぞえ」

初「ヤア、此奴ア、一寸グツが悪いワイ。柔道百段と聞いちやア、滅多に手出しは出來ぬぞ。俺も尻さへ痛くなけりや、こんな爺さまの一人や二人何でもないが、だんだん腫れて來て歩けないからな」
徳「それでも空助さまや高姫さまが怪志の森に待つてゐるぢやないか」
「ナニ、怪志の森に待つてゐると。ハハア、さうすると、松姫様に叱られて、逃げよつたのだなア、フーン、それで何だか犬がワンワン吠いて居つたて」
「オイ初公、此奴、目が見えるなんて嘘だよ。何でも此間中捜せばあるのだ。貴

様、此爺と一つ格闘してをれ、其間に俺が搜すから」

「俺は體が自由にならぬから、ヤツパリ貴様、文助と格闘してをれ、其間にマンマと玉を搜し出して持つて行くから……」

「ヨ―シ」

と徳は文助の足をさらへ、其場に倒した。文助は實際目が見えぬのである。一生懸命に文助は呶鳴りながら、徳と格闘をしてゐる。徳も尻がはれ、足が自由に動かぬので、盲の文助に捻ぢ抑へられ、フーフーいつて居る。初公は音のするのを耳をすまして考へてゐたが、前にするかと思へば後に聞える、右に聞えたり左に聞えたり、頭の上に聞えたり又床下のやうでもあり、チツとも見當がつかなくかつた。そこへ二人がドタン、バタンと騒ぐ音、喚く聲がゴツチヤになつて、如何しても處在が分らない。フト風呂敷に躓いた拍子に、古い四角い箱が出て來た。手早く手に取つて耳にあてると、ウンウンウンと唸つてゐる。初公は、

「ヤ、これに間違ひない」

と懐に捻込み、文助の頭を三つ四つこついた。文助はビツクリして手を放した、

トタンに徳公は漸く遁れ、初公と共に足をチガチガさせながら、坂路を這ふやうにして下つて行く。漸くにして命カラガラ怪志の森へ歸つて來た。そして手柄さうに妖幻坊の前に現はれ、

兩人「へー、やつとの事で、只今歸りました」

妖幻「ヤ、それは御苦勞だつた、分つたかなア」

初「へー、中々分りませぬ。文助の奴、どつかへ隠して了ひ、すつたもんだと、

小理窟ばかり吐して、そんな物は知らぬといふのです。そこで私と徳公が、何知

らぬ筈があるものか、其ブンブン玉を渡せと左右よりつめよりますと、あの文助、

柔道百段の免状取ですから、はしかいの、はしこないのつて、吾々兩人を右へ投

げ左へ投げ、手玉に取つて翻弄致します。私も常なら、あんな爺位指一本で押へ

てやるのですが、何しろお前さまに打たれて此通り腫れ上つたものだから、其

上又痛い尻を叩かれ、イヤハヤ苦しい目を致しました」

「それはさうと、玉は手に入つたのか。どうだ、早くいはぬか」

「へー、此ブンブン玉は、ブンブンいふから文助に因縁がある、これは空助さま

が私にくれたのだ。私を突飛ばしてまで懐へ捻込んで下さつたのだから、返せと
いうても、何處までも返さないと頑張ります。そして此玉は始めは蜂の巣かと思
つてゐたが、決してさうではない、結構な寶だと云つて、あの爺、執着心が強く、
何と云つても返さないのです」

高姫「エーエ、雉子の直使とはお前の事だ。何をさしても役にたたぬ男だな、お
前さまは鞆丸を何處へ落したのだ」

初「へー、餘り尻を叩かれたものですから、ビツクリしてどつかへ轉宅してしま
ました」

徳「併し兩人が奮戦激闘火花を散らし、戦ひの結果、戦利品として、其ブンブン
玉をここへ持つて歸りました。イザ、改めて、お受取り下さいませう」

「何だ、本當に腹の悪い、肝をつぶしたぢやないか。早く此處へお出し、コレ空
助さま、喜びなさい。此奴等二人、碌でなしだと思つて居つたが、みんな役
立つたやうです」

妖幻「オイ兩人、本當に其玉を取返して來たのか」

「へーへ、それは流石初さまですワイ」

「それがしぶんすけぢい、だいかくとう、大格闘を演じてゐる、其隙に初公に命じてぼつたくらしたのですよ」

「それは御苦勞だつた、どうぞ、サ、早く俺の懐へソツと入れてくれ」

高姫「一寸私に見せて下さい、如意寶珠の玉なれば私も因縁があるのだ、眞か偽か一遍調べておく必要があるから、サ、チャツと見せなさい」

「イヤ決して見せちゃならないぞ、直様私に渡すのだ、高姫に渡すと、一寸都合の悪い事がある、之は誰にも渡さないといふ玉だから」

「へん、よう仰有いますワイ。初公が今現に持つて歸つたぢやありませんか。女房の私が何故一寸位見られぬのです。お前さまに返さぬといふぢやなし、そんな水臭い事云ふものぢやありませんか」

「それでもお前は、大變に如意寶珠に執着心を持つてゐるから、渡せないと言ふのだ。此寶珠はチツとも欲のない者が持たなくちや汚れるからな」

「へん、汚れますかな。それなら、よう私のやうな汚れた女と酒を飲んだり、一

緒しよに寝やすんだりなさいますな。何なんとマア口くちといふものは調法てうはふなものだ。それ程ほど私わたしが憎にくいのですか。へん、宜よろしい、私わたしも私わたしで、考かんがへがありますから」

「さう怒おこつて貰もらつちや困こまるぢやないか。今いま見みせなくても、かうして立派りつぱに箱はこへ入はいつてるのだから、トツクリと又また見みせてやるぢやないか。オイ初はつ、徳とくの兩りやう人にん、中なかを開あけて見みたか、何どうだ」

初はつ「エ工滅相めつさうな、かうブンブン唸うなつてるのだから、うつかり開あけて蜂はちにでも刺さされたら大變たいへんですからな、コハゴ八持もつて來きたのですよ」

「ヤア、そりや出でかした、それで結構けつこうだ。オイ高姫たかひめさま、又また今晩こんばんゆつくりと、お前まへだけに見みせるから、それまで待まつてゐてくれ。ここで開あけると、此兩このりやうにん人が見みるからなア。さうすりや、それだけ神力しんりきがおちるのだから」

「成程なるほど、それなら分わかりました。キット見みせて下くださるでせうなア」

「ウン、男をとこが一旦いったん見みせると云いつたら見みせるよ」

「キットですなア」

「ウン、キットだ。もし間違まちがつたら、俺おれのひと一つよりない首くびを、幾いくつでもお前まへに進しんじ

上する。何と云つても、親しい夫婦の仲ぢやないか、さう俺の心を疑ふものぢやないワ」

「誠に濟みませぬ。サ、空ちやま、モウちつと許り先方まで行きませうか」

初「もし空助さま、高姫さま、私は足が痛くつて、モ一步も歩けぬやうになりました。どうぞ此處で今晩は露宿して下さいな」

徳「私も歩けませぬ。餘り尻を叩かれたものですから、どうぞ明日の朝まで、ここでとまる事にして下さい、さうすれば明日になったら、キツト歩けるやうになるでせうから」

高姫「エーエ、仕方のない男だなア。コレ空助さま、ここに、今晩は泊つてやりませうか。二人が餘り可愛相ぢやありませんか」

妖幻「ああ仕方がないなア。せめてモウ一里許り、何うとかして歩くことが出来るのか。オイ兩人、チツと氣をはりつめて、モウ一里許り従いて來たら何うだ」

初「何と云つて貰つても、とても體が動きませぬワ」

「ウーン、そいつア困つたのう。徳は何うだ、チツと位歩けるだろ」

「私だつて、同じ事ですわ、初の疵よりも餘程ひどいのですからなア。本當に貴方等は甚い目に遇はしましたねえ。八百長の芝居がこんなにならうとは思ひませなんだ。今こそ氣が張つて居りますが、實の所は痛くつて痛くつて仕方がありません。」

高姫「あああ、これも係り合せだ。仕方がない、それなら此森で、今晚は一夜明かす事にしませう。なア空助さま、貴方もさうして下さいな。」

「ウーン、それなら、さうしてもよい。併し、高姫、お前はスマートが來ないやうに氣をつけてみてくれよ。俺は何だか知らぬが、あれ位氣にくはぬ奴はないのだから。」

「私だつて、彼奴の聲を聞くと、腹の中がデングリ返るやうに苦しいのですよ。」
初「もし、お二人さま、私の云ふ事を聞いて下さつて、ここで泊りになるのなれば、私は犬の番を致します。犬なら、假令五十匹や百匹やつて來たつて、ビクとも致しませぬ。若い時から犬博勞と綽名を取つた男です。随分犬の咬み合せに、そこら中へ行つたものですから、犬に對する呼吸は充分呑込んで居りますからな。」

ア

高姫「ヤ、それは重寶な男だ。さうすると、お前は今晚は犬番を勤めて貰はうか

な。狐狸の集まつてゐる藝者屋でも、ヤツパリ、ケン番がおいであるからな」

初「それなら、徳と兩人が神妙に御用致しませう、ああ有難い有難い、いよいよ

星の蒲團に草の褥、といふ段取だ。桃の花の香りが、何とはなしに、身に沁みる

やうだ。ああ早いものだ、たうとう日が暮れたとみえるワイ。ここは怪志の森

と云つて、化物が出るといふ事だが、何と云つても、時置師神様のお供だから大

丈夫だ。そこへ、あのブンブン玉があるのだから、何が來たつて、チツとも恐る

る事はない、なア徳」

「ウン、さうださうだ、それなら高姫様、空助様、お休みなさいませ」

高姫「コレコレ、お前達、お祝詞をあげて寝まぬかいな。私は靈が違ふから、空

助さまと二人は神様を拜む譯には行かない。何と云つても高天原の靈國の天人の

靈、日の出神の義理天上だから、お前達は八衢にまだうるついでを、言はば娑

婆亡者だから……天國へやつて下さるやうに、起きた時と寝る時には、必ず天津

祝詞を奏上するのだよ」

妖幻「イヤ、兩人、今晚は天津祝詞は免除しておく。澤山の天人様がお出でにな

ると、一寸御挨拶に困るからなア、ハツハハハ」

「コレ、今日は空助さまの御挨拶で、許して上げるけれど、明日からはキット天

津祝詞を上げるのだよ」

兩人は、

「ハイ承知致しました」

と言ひも了らず、疲勞はてて横になつた儘、白河夜船を漕いでゐる。其間に高

姫は空助を促し、一生懸命に森を脱け出し、浮木の里を指して、暗の道を韋駄天

走りに驅出した。高姫及び妖幻坊は、今後如何なる活動をするであらうか。

(大正一二・一・二五 舊一一・一二・九 松村眞澄録)

第八章

曲輪城〔一三二二三〕

常世の國に生れたる

常世の姫の再來と

自ら名乗る高姫は

地獄中有娑婆世界

ならぬ第二の地獄道

兇黨界に蟠まる

金毛九尾の悪靈や

其外百の曲神に

魅られ茲に兩親の

隙を窺ひアーメニヤ

ソツとぬけ出でエルサレム

都を指して進み行く

高宮姫の若盛り

東野別とゆくりなく

怪しき仲となり果てて

子まで成したる戀仲を

北光神に遮られ

ここに生木のさき別れ

高宮姫は止むを得ず

彼方此方と漂浪の

其成果はバラモンの

神の教やウラル教

三五教を聞きかじり

小才の利きし所より

肉體界の精靈に

其全身を左右され

流れ流れてフサの國

北山村にウライナイの

教をしへの射場いばを建設けんせつし

股肱ここうと頼たのむ黒姫くろひめや

魔我彦まがひこ其他そのたの弟子でし達たちを

呼よび集つどへつつ日にひ月につき

變性へんじやう男子なんしの系統ひつぽうぞ

日ひの出神でのかみの生宮いきみやと

名な乗りて世人よびとを欺あざむきつ

遂つひに進すすんで自轉倒おのころの

島しまに渡わたりていろいと

艱難かんなん辛苦しんくの其結果そのけつぐわ

神素蓋かむすさ鳴のをの大神おほかみの

仁慈じんじ無限むげんの御心みこころに

感喜かんきの淚なみだ絞だりつつ

茲ここに心こころを翻ひるがへし

三五あななひ教けつに救すくはれて

神かみの司つかさと成なりけるが

又またもや兇靈きやうれいに欺あざむかれ

金剛こんがう不壞ふゑの如意寶珠にょいほつしゆ

黄金こがねの玉たまを握にぎらむと

心猿しんえん意馬いばの止とめ度どなく

狂くるひ出だしたる果敢はかなさよ

高砂島たかさごじまや龍宮島りうぐうじま

島しまの八十やそ島しま八十やその國くに

廻めぐり廻めぐりて未遂すゑに

我情がじやう我慢がまんを後悔こうくわいし

又またもや猫ねこの如ごとくなり

綾あやの聖地せいちに奉職ほうじやくし

暫しばらく道みちを布しきけるが

淡路の酋長東助が

幼馴染の戀人と

分りし後は高姫の

心は暗に彷徨ひて

吾子も玉も念頭を

悉皆離れ戀人の

後を慕ひてはるばると

山海河野打渡り

夜を日についでウブスナの

大高原の齋苑館

神素盞鳴の隠れます

高天原に參上り

東野別に懇々と

天地の道理を諭されて

一度は悔悟せしものの

又もや意馬は狂ひ出し

此失戀を如何にして

回復せむかといらちつつ

戀の涙にくれながら

五十を越えた身を以て

執念深き婆々勇み

風吹きすさび獅子熊や

虎狼の吠えたける

河鹿峠をドンドンと

登りつ下りつ漸くに

祠の森に来て見れば

こはそも如何に此は如何に

下つ磐根に宮柱

太しき建てて千木高く 鎮まりゐます皇神の
 瑞の御舎拜觀し ひそかに、うなづくほくそ笑
 此處は名に負ふ河鹿山 齋苑の館の喉首よ
 われは此所にて一旗を 吹く神風に靡かせて
 數多の役員信徒等を 將棋倒しに説き伏せつ
 高姫王國建設し 三五教の向ふ張り
 名を擧げくれむと思ひ立ち 日の出神の義理天上
 變性男子の系統と 現はれ出でし高姫よ
 天地開けし始めより 幾萬劫の末までも
 元を掴んだ因縁の 身魂はわれよと頑張つて
 祠の森の珍彦や 其外百の司等を
 言葉巧に説き伏せて 暴威を揮ふ憎らしさ
 斯かる所へ兇黨界 八岐大蛇の片腕と
 現はれ出でし妖幻坊 高姫司の惡心を

目敏く探り身を變じ 齋苑の館の空助と

現はれ來りウマウマと 高姫司を誑惑し

茲に夫婦の約結び 祠の森に居すわりて

五六七神政の妨害を 力限りに遂行し

大黒主の大望を 助けむものと全力を

盡してゐたる折もあれ 思ひに任せぬ珍彦を

妻諸共に毒殺し 誰憚らぬ身となりて

初心を貫徹せむものと 企む折しも三五の

教の道の宣傳使 初稚姫が現はれて

曲の企みを洞察し 身を謙り兩兇の

非望を妨げ善心に 復して救ひ助けむと

眞心盡し給へども いかがはしけむ曲津見の

垢に汚れし醜魂は 其正體の暴露をば

恐れて犬に逐はれつつ 河鹿峠をトントンと

ちからかぎ
力限りに逃にげ出いだす
又またもや曲津まがつ妖幻えうげん坊ぼう

たかひめつかぎ
高姫たかひめ司つかぎを誑たぶらかし
小北こぎたの山やまの聖場せいぢやうに

のぼ
登りてここに一仕組ひとしぐみ
なさむと思おもひいろいと

よからぬ事ことを企たくらみつ
月大神つきおほかみの靈光れいくわうに

て
照らされ忽たちまち仰天ぎやうてんし
崎嶇きくたる岩上がんじやうに顛落てんらくし

ふしやう
負傷ふしやうをなしてスゴスゴと
此處ここを逃にげ出だす其途端そのとたん

まがわ
曲輪まがわの寶たからを紛失ふんしつし
小北こぎたの山やまを後あとにして

はるくさ
春草はるくさ萌もゆる野路のぢを越こえ
怪志あやしの森もりの此方迄こなたまで

きた
來る折をりしも道みちの邊への
石いしに躓つまづきバツタリと

たふ
倒れて懷查ふとこしむらぶれば
妖幻坊えうげんぼうが變身へんしんの

まはふ
魔法まはふに使つかふ品玉しなだまは
いつしか藻脱もぬけの殻からとなり

すがた
姿すがたも知しれぬ悲かなしさに
大地だいちにドツカと胡床あぐらかき

うつで
腕うつでくみ思案しあんにくれゐたる
かかる所ところへ後逐あとおうて

お
追おつつき來きたる高姫たかひめや
初公はつこう、徳公とくこう兩人りやうにんと

しばし息をば休めつつ

肝腎要の寶をば

小北の山に落せしと

妖幻坊のかこち言

聞くより高姫いらだちて

初、徳二人に命令し

曲輪の寶を取返し

來れと厳しく下知すれば

主命拒むに由もなく

再び小北の聖場に

忍び歸りて受付の

様子いかにと眺むれば

盲爺さまの文助が

繪をかきながら物語る

ブンブン玉の因縁を

聞くより二人はいろいろと

言葉巧に言ひなして

取返さむと思へども

流石の文助頑張りて

容易に渡さぬもどかしさ

二人は茲に意を決し

忽ち爺さまを突倒し

其間に玉をふんだくり

雲を霞と痛い足

無理に引ずりドスドスと

怪志の森に到着し

妖幻坊や高姫に

お褒めの言葉を頂いて

笑壺えつぼに入りし時ときもあれ

俄にはかに疵きずは痛みいた出し

モウ一歩ひとあしも進すすまねば

ここに一夜いちやを明あかさむと

四人よにんは評議ひやうぎ一決いつけつし

初はつ、徳とく二人ふたりは忽たちまちに

白河夜船しらかはよぶねの夢ゆめうつつ

四邊あたりに聞きゆる高たかいびき

聞ききすましたる高姫たかひめは

妖幻坊えうげんぼうを促うながして

暗やみを幸さいはひドシドシと

浮木うききの里さとを指さして行ゆく

浮木うききの里さとの入口いりぐちに

水音みなおと高たかき玉たま瀧たきの

落おつるを目當めあてに立寄たちよつて

曲輪まがわの玉たまを洗せん滌てきし

見みれば曲輪まがわは咬かう々と

輝かがやき初そめて高姫たかひめは

眼まなこを射いられ眩暈げんうんし

其場そのばにドツと倒たふれける

妖幻坊えうげんぼうは逸いち早く

失心しっしんしたる高姫たかひめの

隙すきを伺うかがひ妖術えうじゆつを

使つかつて此處ここに樓閣ろうかくを

忽たちまち現あらはす屋氣樓しんきろう

珍うづの都みやこのエルサレム

其壯觀そのさうくわんに比くらぶれば

幾いく十倍じふばいとも知しれぬよな

驚く許りの建築を
數多の魔神を役使して

現出せしぞ不思議なれ
妖幻坊は打笑ひ

これにて吾の計畫は
いよいよ其緒につきにけり

いかに魔法を使ふとも
神の形に造られし

心の強き人間を
使はにや出来ぬ醜の業

ここにウマウマ高姫を
擒にしたる曲神の

得意や思ひ知らるべし
妖幻坊は高姫に

瀧の清水を掬ひ上げ
口にふくませオイオイト

聲を限りに呼ばはれば
息吹返し正氣づき

四邊キヨロキヨロ打眺め
晝より明かき怪光に

目を見はりつつ舌をまき
ああ不思議、ああ不思議

最早俄に天津日の
日の出神のお出ましか

合點いかぬと俯いて
思案にくれる可笑しさよ

妖幻坊は打笑ひ
アハハハハツハ高姫よ

われは空助神司もくすけかむつかさ 瑞の御霊の御寶みづのみたまのおんたから

手に入る上は此通りていはいうへこのとほ 暗を變じて晝となしやみへんひる

神の力を現はしてかみちからあら 春風渡る此野邊をはるかぜわたこののべ

忽ち變じて城廓をたちまへんじやうくわく ゑがき出したる勇ましさいさ

喜び祝へ高姫とよよろこいはたかひめ 背なでさすり呼ばはればせなよ

高姫頼に感激したかひめとみかんげき 假令空助神司たとへもくすけかむつかさ

善であらうが悪だるがぜんあく モウ此上は構はないこのうへかま

細工は流々仕上をばさいくりうりうしあげ みて下されよ天地のくだあめつち

皇大神を始めとしすめおほかみはじめ 其他百の神様よそのほかももかみさま

日の出神の義理天上ひでのかみぎりてんじやう いよいよ之から空助とこれもくすけ

力を併せ神の爲ちからあはかみため 世人の爲に活動しよびとためくわつどう

五六七の御代を目のあたりみろくのみよま 築きまつりて天の下きづあめした

四方の民草喜ばせよもたみくさよろこ 三五教の神司あななひけうかむつかさ

瑞の御霊を初としみづのみたまはじめ 東野別や其他のあづまのわけそのほか

百ももの司つかさを驚おどろかせ アフンとさしてやらむずと

俄にはかに元氣げんきを盛返もりかへし 妖幻坊えうげんぼうと手てをひいて

今いま現あらはれし樓閣ろうかくの 表門おもてもんをばくぐりつつ

奥殿おくでん指さして進すすみ入いる 曲津まがつ身魂みたまぞ忌々ゆゆしけれ。

(大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 松村眞澄録)

第九章 鷹宮殿たかみやどの（一三二四）

高姫たかひめは妖幻坊えうげんぼうを何處どこまでも空助もくすけと固かたく信しんじてゐた。而しかして金剛こんがう不壞ふゑの如意寶珠にょいほつしゆの力ちからに依よつて、かかろる廣大くわつだいなる樓閣ろうかくが出來できたのだと思おもつてゐる。

「ああ、私わたしが秋山彦あきやまひこの館やかたで腹はらへ呑のんだ時ときには、これだけ威力ゐりよくのあるものとは思おもはなかつた。ヤツパリ私わたしは神力しんりきが足たらなかつたのだなア。小人玉せうじんたまを抱いだいて罪つみありと

いふ事は私の事か、同じ玉でも空助さまがお使ひになると、こんなに立派に其神力が現はれるのだ。阿呆と鉄は使ひやうで切れるといふ事がある。使手がよければ阿呆も間に合ふ、竹光の刀でも正宗に優るものだ。ヤア私もこれから改心をしませう……イヤ改悪をしませう。空助さまに使はれる如意寶珠は仕合せだなア。併しながら、是だけ自由自在に神力を持つてゐる男だから、天下の美人は此神力を見たならば、キツと惚れるであらう。さうなつた時は年の寄つた此高姫は、折角結構な樓閣に住みながら、お拂ひ箱になつてはつまらない。どうかして如意寶珠を空助さまの隙を伺つて吾懐に入れるか、但は吞込んで了つて、まさかの時の権利を握り、空助さまの喉首を押へ、鞆丸を握つておかねば、此高姫は安全な生涯を送る事は出来ぬ。オオさうだ、それが上分別だ。鎌の柄を向ふに握られて、こつちが切れる方を握つてるやうな事では、到底生存競争の激甚なる世に立つことは出来ない。空助さまも偉い人だ、併し又女にかけてはズルイ男だから、これからあらむ限りの身だしなみをして、充分に盪かしてやらねばならうま

と堅く決心しながら、空助の後に従いて行く。奥殿深く進んで見れば、金、銀、瑠璃、玻璃、碑礫、珊瑚珠等にてちりばめられたる立派な寶座がある。妖幻坊は高姫を顧みて、

「オイ高さま、空助の腕前は分つたかなア。サア、之からお前と俺とが此寶座に、日々上つて、萬民の政治をするのだ、どうだ、嬉しうはないか」

「ハイ、餘りの事で、あいた口がすぼまりませぬ」

と云ひながら半信半疑の念に打たれ、寶座を押へて見たり、柱を押して見たり、足元が若しや草「ぼうぼう」たる田圃ではあるまいかと、探つてみたり、いろいろ雑多と調べてゐる。けれども何うしても疑ふ餘地がない。高姫はますます笑壺に入り、

「俄に私も出世したものだ、三千世界に高姫位仕合せな者があらうか、ヤツパリ義理天上日の出神様のお蔭だなア」

と小聲に言つてゐる。妖幻坊は高姫の背を二つ三つ叩きながら、
「オイ高姫、どうだ、違ひますかなア。屋氣樓的城廓か、或は現實的城廓か、よ

くお調べなさい。之でも空助の云ふ事に反きますか」

「イヤ、モウモウ感心致しました。何處までも絶対服従を致しませう」

「高姫、お前の姿を一寸見てみよ、それそこに玻璃鏡が懸つてゐる。其前に立つてみなさい」

と指示す。高姫は玻璃鏡の前に現はれると、鏡面には十七八才の妙齡の美人、金欄綾錦の立派な衣服を着流し、色あくまで白く、頭に七寶の纓絡の垂らした冠を戴き、裾を一文許り後に垂らした美人が立つてゐる。高姫はハツと驚き、心の中に思ふ様……ハハハ、空助さまは腹の悪い男だなア。こんな結構な館を持ち、こんな美人をかくまうておき、私のやうな婆を、此處へ連れて来て、恥をかかし、悋氣をささうと企んでゐるのだらう。エ工悔しい……と鏡に映つた天女のやうな美人に打つてかかる。妖幻坊は高姫の手をグツと握り、

「アハハハハ、オイ高ちやま、あれはお前の姿だよ。如意寶珠の神力によつて、三十三年許り元へ戻したのだ。お前が十八の時の姿は即ちこれだ。まだ十八の時は、こんな立派な装束を着てゐなかつたから別人のやうに見えるが、これが正眞

の高宮姫時代だ。此空助はお前の皺のよつた現界的肉體に惚れたのぢやない、靈界で見たお前に惚れたのだ。随分綺麗なものだらう。それだから、高ちやまに空助が現をぬかすも無理ではあるまいがなア。もしも疑はしいと思ふなら、お前が目を剥けば目を剥く、口を開くれば口を開く、お前の姿其儘だから、一つ調べてみたら何うだ」

「イヤもう疑の餘地はありません。何と立派な美しい女だこと、われながら見とれますワ。之では高姫といはずに高宮姫と舊の名に歸りませうか」

「ウンさうだ、高宮姫の方が、餘程優雅で崇高で、何となく雲上の人のやうに聞えて床しいやうだ」

「それなら、これから高宮姫と改めます。何卒空助さま、舊の名を呼んで下さいや」

「ウンよしよし、就いては俺も空助々々と言はれるのは、何だか毘舍か首陀の様だ。刹帝利に齊しき名をつけねばならうまい……ウン、お前の高宮姫の夫だから、今日から高宮彦と改名しよう」

□ それなら高宮彦様、何卒天地に誓つて、どこどこまでも夫婦だといふ事を守つて下さいませなア」

□ 天に在つては比翼の鳥、地にあつては連理の枝、梅に鶯、假令幾萬劫の末までも、忘れてくれな、忘れはせぬぞや。サアサア之から其方の居間を案内致さう」

□ ハイ有難うムいます」

と妖幻坊に跟いて、ピカピカ光る瑪瑙の板を以て造られたる長い廊下を渡り、銀の色をなせる庭園の樹木を眺めながら、えも言はれぬ美はしき居間に案内された。高姫は既に十八才の娘氣分になつて居た。

□ サ、これが奥様のお居間、随分整頓して居りませうがなア」

□ 成程鏡臺から化粧道具、絹夜具から絹座布團、金銀瑪瑙の火鉢、碑礫の脇息、紫檀の机、黒檀の障子の骨、玻璃の瓶、白檀の水屋、何から何まで立派な物でムいますなア」

□ お前は此城廓の城主の奥様だ、随分出世をしたものだらう。之から高宮彦は自分の居間に行つて休息するから、其方は此處で、今日一日はゆつくりと寛いだが

よからう」

「私と一緒に、なぜ居つて下さりませぬ。何程立派でも只一人こんな所におかれ
ては、たまらぬぢやありませんか」

「お前は義理天上さまでゐるなり、金毛九尾様も狸、狼、大蛇、蟻其他いろいろ
のお客さまもゐるのだから、別に淋しい事はなからうに……」

「ソリヤ居ります。けれども、聲がするばかりで、チツトも形を現はしませぬか
ら、つまりませぬワ」

「それなら、二人程腰元を、後からつけるやうに取計らつてやる。こんな立派な
城内に主人となつた者は、普通の毘舍や首陀のやうに、一間に同棲することは體
面上出来るものでない。いざ高宮姫、ゆつくりなされ、高宮彦は吾居間に入つて、
暫く休息を致す」

と言ひすて、ドアを開き、悠々として、奥へ奥へと進み入る。

高宮姫は聲を限りに、

「モシ空助さま、モウ一言お尋ね致したい事がゐます。此お城は何と云ひます

か

妖幻坊は後ふり向いて、

「ここは今まで鶏頭城と申したが、今日より改めて高宮城と命名致す」

「ハイ、有難うございました。高宮城に高宮彦、高宮姫、何とゆかしい名でムいま

すな、ホホホホ」

妖幻坊は、

「左様なら」

と云ひすて、ドンドンと奥に入った。

すべて妖魅は變相する時は非常に苦しいものである。それ故時々人に見られな

い所で體を休める必要がある。高姫の今入つて居つた一間は、其實浮木の森の可

なり大きな狸穴であつた。妖幻坊はモ一つ奥の楠の根元の大洞穴の中に身を隠し、

他愛もなく寝て了つたのである。

妖幻坊には幻相坊、幻魔坊といふ二人の眷屬があつた。而して幻相坊は火の術

をよく使ひ、幻魔坊は水の術を使ふに長じてゐた。又妖幻坊は幻術を以て、一時

に數百數千の軍人を現はしたり、妙齡の美人を現はしたり、或時は老翁、或時は老婆を忽ち現はして、世人を騙る事を楽しみとしてゐた。而して妖幻坊は日々獸の肉を喰はなくては、體がもえて仕方がなかつた。又時々人肉をも、殊更喜んで喰ふのである。

高姫は一人美はしき座敷を與へられた事を非常に喜び、知らず知らずに鼻唄さへ歌つてゐた。そこへドアを開ひて、淑やかに十四五才の女が二人、白綸子の着物に紫縮緬の袴を穿ち、美はしき漆のやうな下げ髪を紫の紐にてしぼり、上に桃色の二衣を着て、

「御免なさいませ、奥様のお居間はここでムいますか。私は高子と申します、妹は宮子と申します。今日から高宮彦様のお指圖によりまして、姫様のお小間使を仰せ付けられました。何分不束な者でムいますれば、何卒叱つてお使ひ下さいませ」

と優しい手をついて、頭を下げ挨拶をする。高姫は二人の姿を見て、
「ああ何と、揃ひも揃つて美しい娘だなア。併しながら今はまだ年が若くて大丈

夫だが、此女が二三年もたつたら、丁度私のやうな姿になるだらう。そして時は、又空助さまが變な心を起しはすまいか
と思ふと、俄に此二人が、何處ともなく憎らしいやうな氣になつて了つた。高姫は舌長に、

「ハイ、お前は高宮彦さまの身内の者か、但は、どつからか頼まれて御奉公にあがつてゐるのか、それが聞かして欲しい、其上でお世話になりませう」

高子「ハイ、妾は父もなければ母もムいませぬ」

「父母もない子が何處にあるものか、ハハ、さうすると、お前は捨兒だなア。そして宮子、お前の父母は何と云ふかな」

「ハイ、妾も兩親がムいませぬ」

「兩親の分らぬやうな子供は要りませぬ。何處の馬の骨か牛の骨か分らぬ、女つちよを、ヘン、此素性の高き高宮姫の、お小閒使なんて、高宮彦さまも餘りだ。

コレ兩人、こちらに用はないから、トツトと歸つて下さい。そして此城内には、高宮姫が今日限りおきませぬぞや」

高子「左様なれば、姫様、是非がムいませぬ。妾と妹が兩親がないと云つたのは外でもムいませぬ、實は如意寶珠から生れた者でムいます。妾は火を守護し、妹は水を守護する靈でムいます。貴女は火と水がいらないとみえますな。左様なれば仰に従ひ歸ります」

と足早に室外へ出ようとする。高姫は驚いて、

「ママ待つて下さい、ヤ、小母さまが悪かつた。つい何う仰有るかと思つて、お前さまの氣をひいてみたのだ。潮干潮満の、お前は玉だつたな。どうもそれに違ひないと思つたけれど、それとはなしに小母さまが探つて見たのだから、何卒悪く思つて下さるな」

高子「ハイ、有難うムいます、併しながら姫様から一遍追つ立てをくつたので御座いますから、私は火でムいます。何卒お暇を下さいませ。なア宮ちやま、お前さまだつて、さうでせうね」

宮子「私小母さまには追ひ出され、小父さまの所へ行つては叱られちや、立つ瀬がありません。私は水の精だから、川の瀬へでも行つて流れませうよ」

「コレコレ、高さま、宮さま、何卒、さう言はずに、私の所に居つて下さい。餘り氣儘な事を云つたと云つて、高宮彦さまに此小母さまも叱られる。又お前たちも叱られちゃ大變だぜ。サアサア、小母さまが大切に上げて上げるから、機嫌を直してくるのだよ」

二人は、

「アーイ」

と細い涼しい聲を揃へて云ふかと思へば、光線の如くパツと室内に入り来り、右と左から高姫に飛び付いて、

「小母さま、姫さま」

と嬉しさうに叫んだ。高子は火の如く熱く、宮子は水の如く冷たい。高姫は火と水に責められ、寒熱に苦しんで、忽ち其場に目をマハして了つた。

（大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 松村眞澄録）

第一〇章 女異呆醜（一三二五）

妖幻坊の曲神が

曲輪の玉を使用して

夢幻の樓閣映出し

名利と戀に心魂を

盪かし狂ふ高姫を

うまく誤魔化し萱草の

茫茫茂る森林に

誘ひ來りいろいと

塵や芥や糞尿を

至善至美なる宮殿や

其他百の珍品と

眼くらませ狸穴に

引き入れ茲に曲神は

天地を救ふ生神の

誠の道を攪亂し

天の下をば悉く

暗と泥との魔界とし

暴威を振ひ永久に

樂しまむとて心力の

あらむ限りを盡すこそ

實にも忌々しき次第なり

高宮姫に仕へたる

高子の素性は幻相坊
宮子の素性は幻魔坊

妖幻坊の兩腕と
頼みきつたる妖怪ぞ

高姫心の誇りより
曲の手管に乗せられて

浮び方なき魔の中に
陥りながら欣然と

天下に無比の出世を
なせしものぞと勇み立ち

日の出神の義理天上
金毛九尾醜神も

亦高姫と同様に
妖幻坊に欺かれ

悪魔の機關と使はれて
喜び居るこそ憐れなれ

寒と熱とに冒されて
一度は失神したれども

暫くありて甦り
四邊を見れば高、宮の

二人の侍女はイソイソと
高姫司の介抱して

薬を煎じ湯を沸し
一心不亂に眞心を

盡して仕へ居たりけり
之を眺めて高姫は

怒りもならず顔色を
和らげ二人に打向ひ

「ほんにお前は如意寶珠 潮満玉や潮干の

尊き玉の御化身か 眞に畏れ入りました

貴女の様なお身魂を 何程日の出神ぢやとて

お使ひ申すは何となく 勿體ない様な氣が致す

何卒貴女は高姫に 構はず寶座に現はれて

金剛不壞の神力を 完全に委曲に現はして

尊き神の御教を 世に輝かしウラナイの

道を照らさせ給へかし 願ひ申す」と手を合し

頼めば二人は首を振り 「いえいえ私は本城の

高宮彦の御命令 天にも地にも代へ難き

高宮姫の側近く 仕へ侍れと嚴かな

命令受けて居りまする 不束なれど吾々を

何卒お使ひ下されて 日の出神の神業の

萬分一に御使ひ 遊ばし給へ」と手を合し

願ふ姿ぞ殊勝なれ

高姫ますます圖に乗つて

高子よ、宮子よ、

汝は又

如何した身魂の因縁か

變性男子の御系統

常世の姫の御再來

日の出神の義理天上

かからせ給ふ生宮の

高宮姫の側近く

仕へ奉ると云ふ事は

之に越したる幸福は

又と世界にあるまいぞ

之から先は神妙に

高宮姫の云ふ事を

一つも背かず聞くがよい

高宮彦は如意寶珠

持たせまへば神力が

斯くも立派に現はれて

清く輝きまませど

あの寶玉を手放せば

人民界に籍を置き

普通の人より勝れたる

智勇兼備の勇將だ

さはさりながら人間は

到底神には叶ふまい

此高姫は人間と

姿を現じ居るなれど

高天原の最奥の

も一つ奥のまだ奥の

天極紫微宮の其奥の

御殿にまします月の神

日の大神の御子とます

日の出神の義理天上

もう此上はないと云ふ

尊き身魂の肉の宮

神人感合した上は

高宮姫は義理天上

日の出神は私ぢやぞえ

曇り果てたる暗の世を

日の出の守護にしよと思や

ヤツパリ日の出神様が

御用を致さにやなるまいぞ

五六七の神世と云ふ事は

日の出の御代と云ふ事だ

嚴の御靈や瑞御靈

ミロクの神と云つたとて

日の出神の又の名だ

お前は年が若い故

こんな事をば云つたとて

分らないのは無理はない

さはさりながら如意寶珠

金剛不壞の身魂なら

一旦私の腹中に

這入つて生れた生魂よ

さすればお前は吾娘

變化の法で世に出でて

ここに母子の廻り會ひ
ほんに嬉しい事だなア

ほんにお前も嬉しかる
之から三人村肝の

心を協せ手を曳いて
瑞の御靈の三女神

高宮彦の神業を
助けまつりて芳名を

幾萬劫の末までも
輝き渡す吾心

諾ひませよ高、宮の
二人の御子よ惟神

神に誓ひて常世姫
日の出神の生宮が

完全に委曲に教へおく
ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

高宮彦や高宮の
姫の命のある限り

金剛不壞の如意寶珠
握つた上は天地を

一つに丸めて義理天上
日の出の御代と立直し

五六七神政の太柱
常磐堅磐に立竝べ

世の大本の生神と

稱へらるるは目のあたり

ああ有難し有難し

この世を造り給ひたる

嚴の靈の大御神

梵天帝釋自在天

大國彦の大御神

盤古神王鹽長の

彦の命や常世彦

ウラルの彦の御前に

畏み畏み願ぎ奉る

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と一生懸命に狸穴の中に寢言の様に歌つてゐる。高子は高宮姫の歌に答へて、綾の袖を胡蝶の如く、しなやかに振りながら、自ら歌ひ自ら舞うて高姫の心を慰めた。

金剛不壞の如意寶珠
世界の火熱を守護する

其半分の分靈
高皇産靈の大神の

其分身が現はれて
ここに高子の姫となり

三千世界を救う爲
心を盡し身を盡し

獅子奮迅の活動を
遊ばし給ふ常世姫

其肉宮の御爲に
近く仕へて神業を

完成せむと勇み立ち
高宮彦の父神と

御身を守護し奉る
日の出神の義理天上

かからせ給ふ生宮よ
何卒々々吾々を

生みの御子とみそなはし
彌永久に何時までも

御目をかけさせ給へかし
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

三五教の神司
勢猛く攻め來とも

吾身の汝に従ひて
守らむ限り百千の

猛き獣も曲津見も
又三五の強敵も

何か恐れむ敷島の
大和魂の如意寶珠

心平こころなひらに安やすらかに
思召おぼしめされよ母ははの君きみ
勇いさみ喜よろこび御前おんまへに
眞心まごころこめて永久とこしへの
誓ちかひを結むすび奉たてまつる
ああ惟かむながらかむながら神かみ々々
御靈みたま幸さちはひましませよ』

と歌うたひ舞まひ終をはる。高たか姫ひめは笑えつ壺ぼに入いり、顔かほの紐ひもをほどいて前ぜん途との光くわう明みやうを夢ゆめみつつあ
つた。宮みや子こは又また歌うたふ。

日ひの出での神かみの生いき宮みやと 現あらはれませる神かむつかさ司さ
愈いよいよ一いち陽やう來らい復ふくの 花はな咲さく春はるの廻めぐり來きて
高たか宮みや城じやうの司つかさ神がみ 高たか宮みや彦ひこの妃ひとなりて
三さん千ぜん世せ界かいの萬ばん靈れいを 救すくはせ給たまふ母ははとなり
現あらはれませず尊たふとけれ 吾われは水みづをば守しゆご護ごする
如に意よの寶ほう珠しゆの片かた割われぞ 宮みや子この姫ひめと現あらはれて

高宮姫の側近く 仕へまつりし嬉しさよ

瑞の御靈の元の靈 神皇産靈の大神の

玉の雫になり出でし 此世を洗ふ瑞靈

巖と瑞とが相並び 高宮城に現はれて

二人の御身を守護せば 三千世界は永久に

無事泰平に治まりて 枝もならさぬ神の御代

五六七の神世は忽ちに 此地の上に顯現し

日の出神の神徳が 輝き渡るは目のあたり

喜び仰ぎ奉る ああ惟神々々

水の靈の宮子姫 眞心こめて母君の

御前に誓ひ奉る

と歌ひ終り、淑かに座に着いた。高姫は、

何とまア結構な事が重なれば重なるものだな。もしや夢ではあるまいか

と頬を抓つて見たり、眉毛に唾をつけて見たり、臍の邊りを突いたり押したりしながら、腹中のお客さまに向ひ、

「おい、義理天上殿、金毛九尾殿、其他の眷屬共、此高姫の出世を知つて居るか。お前達は如何考へる。もしも高姫が夢を見てゐるのなら、夢とハツキリと云うて呉れ。あまり結構過ぎて本當にならないから」

腹の中から大聲で、

「義理天上日の出神、今日のお喜び謹んでお祝ひ申す。高宮姫の肉體、御苦勞でムる。オツホホホホ、先づは目出度い、お目出度い。のう金毛九尾、結構ではな
いか」

「成程々々、之にて願望成就致すであらう。いや大蛇殿、蟆殿、其他の連中、お喜び召され、アツハハハハ」

腹中より、

「アツハハハハ、イツヒヒヒヒ、クツハハハハ、クツハハハハ、チツヒヒヒヒ
とガラクタ靈が勝手に喜び笑ふ聲が一つになつて井堰を切つた様な勢で高姫の口

へ流れ出づるのであつた。

高子「お母さま、何、心配してられますの。何だか、云つて居らつしやつたぢやありませんか」

「あ、お前は子供だからまだ分るまいが、私は今義理天上さまや上義姫様、旭の豊榮昇姫さま、リントウビテン大臣さま等と御相談を申して居たのだよ」

「何とまあ、お母さまは八人藝の様な重寶なお方です。なア宮子さま、私も貴女も、こんなお母さまを持ち、高宮彦のお父さまを持つて居るのだから、三千世

界に恐いものはありませんわネ」

宮子「さうですとも、それに違ひありませんわ」

「オツホホホホ、何とまあ優しい子だな、肉體の人間から生れた子だと、私もチツとばかり悋氣が起るまいものでもないが、何といつても、私の腹にあつた如意寶珠から化けて出た子だから安心なものだ。なア高さま、宮さま、お前二人の名をよせるとお父さまの名にもなり、お母さまの名にもなるね」

高子「ホホホホ、嬉しいわ」

宮子「エへへへへへ、本當に有難いな」

斯く三人は打解けて立派な居間の中で、歌つたり舞うたり、美はしき果實を味はひながら一日を暮した。其實、萱野原の狸穴である事は前述の通りである。

(大正一二・一・二六 舊一・一・一二・一〇 北村隆光録)

第三篇 鷹魅艶態

第一章 乙女の遊(一三二六)

高姫は二人の侍女と共に満面笑を湛へ、蓬萊山に行つて無上の歡樂に酔ひし如く、恍惚として脇息に凭れ、わが運の開け口、宇宙一切を手に握るも斯く樂しく

はあるまいと満悦の折柄、ドアをパツと開いて足音高く入り来るは、六角の金色
燦爛たる冠を戴いた高宮彦命が、さも愉快氣にやつて来た。忽ち床を背にして、
ムクムクとした厚い絹座布團の上に膝を埋める様にして坐り込んだ。高姫はさも
嬉しげに媚びを呈しながら、

「これはこれは吾夫、高宮彦様、よく吾居間を訪はせられました。一時千秋の思
ひで、君のお出でを待ち焦れて居りました。嬉しうムります」

と涙含む。妖幻坊は、

「いや高宮姫殿、長らく顔も見せず失禮を致した。さぞ淋しかつたであらうな」

「はい、幸に二人の娘が近侍してくれて居りますので、あまり淋しいとは存じま
せぬが、君のお姿が見えませぬと、何處とはなしに、ヤツパリ淋しうムります」

「アツハハハハハハ、さうするとヤツパリ此高宮彦が戀しいと見えるのう。や、
さうなくては叶はぬ事だ。斯うして夫となり妻となるも、昔の神代から絶るにき
られぬ因縁であらう」

「尊き神様の御恵によりまして、かかる尊き御殿の内に於て親子夫婦の邂逅ひ、

實にこんな嬉しい事はムリませぬ。貴方の御雄姿と云ひ、高宮姫の若返りと云ひ、此金殿玉樓と云ひ、更に錦上花を添へたる如き金剛不壞の如意寶珠の分靈、高子姫、宮子姫二人の美女、天極紫微宮の壯觀も龍宮城の光景も、よもやこれ程までにはムリますまい」

「それは、その筈だ。金剛不壞の如意寶珠の不思議の神力にて、天極紫微宮の御殿を地上に引移し、又龍宮の最も美しき處を、海底より此處に引上げ建て並べたる大城廓、其中心の金殿玉樓、曲輪城の高宮殿、綺麗なのは尤もだ、アハハハハハ」

「あの空……いやいや高宮彦様、此城廓の廣袤は何程ムリですか」
「うん、さうだ、東西が百町、南北が百町、中々以て廣いものだぞや。其中心なる此御殿に於て、汝と兩人、天下を握る愉快さは又格別だ。併しながら高宮姫、よつく聞け、昨日まではバラモン軍の先鋒隊ランチ、片彦兩將軍が屯せる陣營の跡、彼方此方に散在し、見る影もなき荒野なりしが、神變不思議の魔法によつて、田園山林陋屋は忽ち化して花の都となり、かく城廓を天より海底より引寄せ、天

地の粹を盡したる建物は漸く建つたれど、之より汝は吾と力を協せ、第一吾々が行動を妨ぐる三五教及びウライ教の奴輩を、一人も残らず此城中へ手段を以て引込み、靈肉共に亡ぼさねば、萬劫末代此榮華を保つ事は難かしい。最も恐るべきは三五教を主管致す素盞鳴尊だ。それに従ふ東野別命、八島主命、日の出別命、言依別命、天之目一箇命、初稚姫命、其他澤山あれども、先づ吾々が敵とするは以上の人物だ。それに従ふ奴輩も一人も残らず打亡ぼさねば、吾々夫婦の大望は成就致さぬぞや。高宮姫、そなたが今後採るべき手段は如何でゐるか。それを承

はりたいものだ、アツハハハハハ

もし吾夫様、否吾君様、今となつて左様の事、お尋ねまでもムりませぬ。妾は之より日々此城門を潜り出で、二人の娘を引連れ、火の見櫓の近邊にて往來の人を待ち伏せ、此美貌と辨舌にまかせ、残らず此城内に引き入れ歸順させてやりませう。必ずやお氣遣ひなさいますな

ヤ、出来した出来した。流石は高宮姫殿、然らば吾は奥殿にて休息致し、日々の神務を見るべければ、汝は高子、宮子を伴ひ、火の見櫓の前にて往來のものは

云ふに及ばず、三五教の宣傳使及び三五教に歸順して齋苑の館へ參拜する奴輩を
残らず引捕へ、吾城内へつれ歸られよ」

「仰せにや及びませう。高姫もかく若やいだ上は、いろいろと力を盡し手段を以
て引き寄せませう、必ずともに御安心下さいませ」

「いやそれを聞いて安心致した。兔角浮世は色と酒、も一つ大切なものは權勢だ。
何程智者學者と雖も、聖人君子と雖も、權勢なければ世に時めき渡る事は出來な

い。まづ三五教を崩壊し、大黒主の神様に安心を與へ奉らずば、七千餘國の月の
國は云ふに及ばず、三千世界は亂麻の如く亂れ、且吾々の惡靈世界へ……否惡靈

世界が吾々を滅亡せむと致すは火を睹るよりも明かだ。吾より先に進んで館を亡
ぼさなくては、吾等は彼に亡ぼさるるに至らむ。如何に如意寶珠の妙力ありとも、

敵にも亦一つの神寶あり。必ず油斷なく……いざ之より初陣の功名を現はすべく
出門召されよ」

と常に變り言葉も莊重に儼然として宣り傳へた。高姫は、
「はい、承知致しました。必ず手柄をしてお目にかけてませう。さア高子、宮子、

母ははについでおぢや〇

と錦にしきの袖そでを間風まかせにひるがへし、シヨナシヨナと身振りみぶりしながら裾すそを持ちもち、高宮たかみや
彦ひこに別わかれて長廊下ながらうかを傳つたひ、玄關口げんくわんぐちより黄金こがねの足駄あしだを穿うがち、浮木うききの森もりの火ひの見櫓みやぐらの
麓ふもとをさして、シヨナリシヨナリと太夫たいふの行列ぎやうれつよろしくにじり行く。

高姫たかひめは二人ふたりの侍女じぢよと共に襦衣うちかけを脱ぬぎ、火ひの見櫓みやぐらの下したの間に藏しまひ置おき、長柄ながえの籠かこ
を各携おのおぬつぎへて、堇すみれや蒲公英たんぽぽを餘念よねんなき態ていを粧よそほひつつ摘つんでゐた。さうして其處そこに咲さ
き誇ほこつてる寒椿かんつばきの花はなの自然しぜんに落おつるのを眺ながめて、昔むかしのアーメニヤ時代じだいを思おもひ浮うか
べ、

□ おだやかな

初春はつはるの

小庭こにはにしよんぼりと

乙女をとめの唇くちびるの樣やうな

小ちひさき寒椿かんつばき

滴るばかりの緑葉は

昨晩から雨にぬれた

病人の如く

椿の花は幽かに慄ふ

妾は今

彼の戀男の

痛々しい姿に

悩まされつつ

昔を今に寫して

喘いで居るのだ

涙ぐましい氣分が

四邊に漂ひ

わが小さき胸に襲ひ來る

これの椿の花よ

吾の姿に
わが戀の思ひに似て

と斯んな事を云つてスツカリ十八氣分になり、ありし昔を追懷して其ローマンスを夢の如く浮べて椿の花に思ひを寄せてゐた。世の風波にもまれ、あらゆる權謀を弄し、鬼の如き荒男を凹ませ、神人をなやませたる高姫の言葉とは、何う考へても思はれない程の、あどけなき姿になりきつて居た。されど潜龍淵に沈むと雖も、一度風雲に際會すれば、天地を震撼し、黒雲を巻き起し、億兆無數の星晨を黒雲の下に舐め盡す如き執着心と焰の如き辨舌は、遺憾なく高姫の老軀より迸るのが不思議である。高姫があどけなき姿になり、白い手を出して怖さうに蒲公英を摘んでみると、そこへ蓑笠を着け草鞋脚絆の旅装束、金剛杖を左手に握り、宣傳歌を歌ひながら進み來る二人の男があつた。

神が表に現はれて

善神邪神を立別ける

此世を造り給ひたる
國治立の大神は

天地百の神人の
醜の罪科一身に

引受け給ひ天界の
天極紫微宮後にして

根底の國に落ちましぬ
ああさりながら大神は

仁慈無限の御心に
此世を救ひ助けむと

千々に心を悩ませつ
御身を變じ遠近と

彷徨ひ世人を守りつつ
百の難みを苦にもせず

守らせ給ふ有難さ
バラモン教に仕へたる

吾はランチの將軍ぞ
吾は片彦將軍ぞ

大黒主の命を受け
齋苑の館に現れませる

神素盞鳴の大神を
打亡ぼして世の中の

曲をば拂ひ清めむと
數多の軍勢引率れて

隊伍を整へ堂々と
浮木の森や河鹿山

進み來りし折もあれ
三五教の宣傳使

神力無雙の神人に
説きつけられて三五の

誠の道を相悟り
武装を棄てて治國の

別の命の弟子となり
クルスの森やテームスの

峠に長らく足を止め
天國淨土の御教を

聽聞なして人生の
其本分を悟りしゆ

吾信仰はいや固く
假令巨萬の黄金も

天女を欺く美人にも
汚き心を起さざる

勇猛心となりにけり
これぞ全く皇神の

吾等を救ひ給はむと
降し給へる仁愛の

恵みの雨の賜物ぞ
ああ惟神々々

御靈幸倍ましませよ
向ふの森を眺むれば

印象深き浮木原
數多の軍勢引率れて

滯陣したる馴染の地
暫く月日を経るまに

うつつて變りしあの様子
如何なる偉人の現はれて

かくも立派な都會をば 造りしものか、あら不思議

雲表高くきらめくは 大廈高樓金銀の

竟に輝く日の光 合點の行かぬ此始末

汝片彦宣傳使 彼の光景を何と見る

訝かしさよと尋ぬれば 片彦首をかたげつつ

口許重く答へらく 君の宣らす其如く

實にも不思議の光景ぞ いざ之よりは逸早く

足を早めて實否をば 調べて見むか、如何にぞや

反問すればまたランチ 如何にも尤も探險と

道を行きつつ語り合ひ 火の見櫓の麓まで

二本の杖に地を叩き しづしづ此處に着きにけり。

得も云はれぬ立派な城廓や市街が立並び、火の見櫓は金色燦然として四邊を輝か
ランチ、片彦兩人は自分が四ヶ月以前に駐屯してみた時の梯は煙の如く消え、

して居る。二人は不思議さうに立止まり、目を丸くしながら無言の儘、四邊キヨロキヨロみつめて居る。ランチは漸く口を開き、

「いや片彦殿、何と不思議ではムらぬか。拙者が將軍として貴殿と共に陣屋を構へし、弟はなく、殆ど千年の都の如き此壯大なる構へ、繁華なる市街の櫛比する有様、夢の様にはムらぬか」

「成程、貴殿の申さるる通り實に不思議千萬でムる。もしか悪神等の悪企みではムるまいかな。如何なる神人と雖も、かくの如き事業を短日月に完成すべしとは思ひも寄らぬ。さてもさても不思議の事よ。いや、向ふの椿の木の根元に妙齡の女が三人、花を摘んでゐる様です。彼の女を捕へ、此城内の様子を伺つて見ようではありませぬか」

「成程、それも宜しからう」
と云ひながら三人の乙女の方へと歩を進めた。

四邊は春めきて、去年のかたみの枯草の間から、青草の芽霧が細く柔かく伸びて居る。小鳥の聲は音楽の様に四邊に響いて來た。

第一二章 初花姫(一三二七)

片彦は三人の乙女に向つて言葉優しく、

「もし、それなる嬢様達、一寸お尋ね致しますが、向ふに見えるあの立派な城廓は、何時頃に出來上つたのですか」

三人の女は些しも聞えぬやうなふりをして、頻りに花を摘んで居る。片彦は益々傍に寄つて、一層聲高く、

「お嬢さま、一寸物を伺ひます」

此聲に三人は驚いたやうな顔で、片彦、ランチ兩人の顔を打ち守つた。さうして高姫は、

「ア、吃驚したよ。貴方どこのお方ですか」

片彦「拙者は四ヶ月以前に此浮木の森にバラモン軍を引率し、滞陣して居た片彦將軍の成れの果でムる。此處に居られるのは吾々の上官ランチ將軍でムる。此方も拙者と同じく軍服を脱ぎ捨て、今は三五教の宣傳使でムる」

高姫は、花の唇をパツと開き、媚びを呈し艶かしい聲で、

「ア、左様でムいますか、それは尊い貴方はお役柄、妾は如意王の娘、初花姫と申します」

片彦「ハテ不思議な事もムるものだ。如意王様とは月の國コーラン國の刹帝利様ではムりませぬか」

「ハイ、左様でムいます。此頃は父と共に數多の家來を引連れ、此方に國替を致しまして、晝夜兼行で漸く城廓が建ち上つた所でムります」

「ハテ、何と不思議な事だなア。何程富貴なお方でも、斯様な短日月間にかかる城廓が建ち上るとは、ランチ殿、何と不思議ではムらぬか」

ランチ「如何にも不思議千萬でムる」

「オホホホホ、あのまア、あのお二人様の不思議さうなお顔……吾父如意王は

コーラン國より四ヶ月以前に参りまして、數萬の部下に命じ、漸くこの通り完成致した處でムります。吾父は如意寶珠を所持して居りますれば、如何なる事でも出來ます。さうして貴方は今三五教の宣傳使と仰せになりましたが、私の父も俄に三五教に入信致しまして、齋苑の館からお出での初稚姫様を御招待申し、今奥に御逗留でムいます。どうかお立寄を願ひますれば父も喜ぶ事でムいませう」

片彦「何と仰せられますか、初稚姫様が此御城内に御逗留とは、そりや何時からの事でムいます」

「ハイ、二三日以前齋苑の館から祠の森とやらに御出張になり、それから此曲輪城をお訪ねになり、吾兩親は尊きお話を承はり、今は全く三五教の信者になりました。初稚姫様のお言葉には、やがて片彦、ランチと云ふ三五教の宣傳使がお通りになるであらうとのお言葉に、かうして二人の侍女をつれ、花を摘みながら、もしお二人様がお出でになれば、お迎へ申したいと最前から此處に待つて居ました。何卒一寸お立寄をお願ひ申す譯には参りますまいかなア」

片彦は少しく首を傾げながら、ランチに向ひ、

「ランチ殿、貴殿のお考へは如何でムりますか。初稚姫様が御逗留と云ひ、斯かる麗しき乙女と云ひ、いやもう吾々は一向合點が参りませぬ」

「成程、拙者も何うも不思議でムる。斯くも立派な普請が出来る以上は、少しは尊位はありさうなものでムるのに、忽然としてかかる屋氣樓的城廓が出来るとは、察する所魔神の仕様ではムいますまいかな」

高子はランチの傍に寄り、

「モシ小父さま、魔神とは如何なるものでムりますか、どうぞ教へて下さいな」

「ハハハハハ、教へて上げませう、魔神と申せば悪魔の事です」

「貴方は此立派なお屋敷を、さうすると悪魔の住家と思つておいでになりますか。それなら妾は悪魔の虜になつて、斯様な所へ連れて來られたのでせうかなア」

宮子「姉さま、それなら私も魔神とやらに矢張使はれて居るのだわ。もし初花姫様、吾等姉妹に何卒お暇を下さいませ」

と怖さうな風をして慄へながら泣く。

高姫「これこれ高子、宮子、恐れ多くも如意王様の妾は娘、左様な事を申すと承

知致ちちいたしませぬぞや。コーラン國こくの刹帝利せつていりさま様のお館やかたをさして、魔神まがみの城しろとは以てもつの
外ほかの事こと、も一度いちどそんな事ことを云いうて御覽ごらん、決して許ゆるしはしませぬぞや」

高子たかこ「それでも嬢様ぢやうさま、あの小父をぢさまが魔神まがみの仕業しわざと仰有おつしやいました。妾わらは姉妹あやうだいはそれ
を聞きくと、何なんだか怖おそろしくなりました。何卒どうぞ此處ここでお暇ひまを下くださいませ。さうして
妾わらはのお友達ともだちがまだ十人じふにんばかり御厄介ごやくかいになつて居ゐますが、皆許みんなゆるしてやつて下ください、
お願ねがひ致いたします」

宮子みやこは又また涙なみだを袖そでにぬぐひながら、

「もしお嬢様ぢやうさま、お願ねがひでムいいます、妾わらはは假令たとへ殺ころされても厭いとひませぬが、十人じふにんの友とも
達たちを何卒どうぞ助たすけて下くださいませ。其代りそのかは妾わらはは此處ここで喉のどをついて死しにます。ああ惟かむながら神靈たま
幸倍坐世ちはへませ」

と云いふより早はやく、懷ふところの懷劍くわいけんを抜ぬいて喉のどに突つき立てむとす。高姫たかひめは慌あわてて飛とびつき
懷劍くわいけんをもぎ取りと、腹立はらだたしげに、

「これ宮子みやこ、何なんと云いふ不心得ふこころえの事ことをなさるのだ。もし旅たびの方かた、貴方等あなたがたが何なんでもな
い事ことを仰有おつしやるものですから、初花姫はつはなひめの迷惑めいわく、どうか二人ふたりの侍女こしもとを諭さとして下くださいま

せ
」

ランチ「イヤ、お子供衆の前で不謹慎な事を申しまして、實に申譯がムいませぬ。これこれ侍女殿、決して私の云うた事を眞に受けて貰つては困ります。あまり立派なから、曲神の仕業ぢやあるまいかと云つただけです。決して曲神の仕業であるとは申しませぬ、さう早合點しては困ります」

宮子「いやいや何と仰有つても貴方の仰有つた事は眞實でムいます。そんな氣休めを云はずと、何卒死なして下さいませ。纖弱き女の身をもつて曲神の擄で居ら

うより、死んだ方が増でムります」

と泣き倒れる。片彦は氣の毒で堪らず、傍へ寄つて宮子をなだめるやうに、

「もしお嬢さま、どうも濟みませなんだ。皆嘘ですから、何卒氣にかけて下さいませぬ」

「イエイエ何と仰有つても貴方の氣休めと思ひます。よう云うて下さつた、曲神の業に違ひありません、サア高子さま、早く逃げませう」

と早駆け出しさうにする。

高姫「これ高子、宮子、なんぼ逃げてもお父さまが馬で追つかけさせるから、駄目ですよ。そんな小父さまの云ふ事など聞かずに、妾と一緒に歸りませう。お前は主人の云ふ事を聞きませぬか」

と極めつける。高子は涙を袖に拭ひながら、

「初稚姫様のお言葉に……：宣傳使は決して嘘や偽りは云はぬものだ……：と仰有いました。このお方は宣傳使様、どうして嘘など仰有りませう、妾はどうしても初のお言葉を信じます」

片彦「ああ困ったことだなア、どうしたらよからうか」

「何卒小父さま、一遍来て下さい。そして果して魔神の館なら、何卒妾を連れて逃げて下さい。妾のお友達も十人許り来て居ますから」

高姫「貴方は元は將軍で、今は立派な三五教の宣傳使と仰有つたぢやありませんか。それに妾の迷惑になるやうな事を仰有つて、それで貴方の勤めがすみませぬか」

片彦、ランチ兩人は芝生の上に手をついて、

「イヤ姫様、誠に失禮を致しました。何卒見直し聞直しを願ひます」

「妾は初花姫と申すもの、初稚姫様とよく似た名で△ります。承はれば靈の姉妹だと仰有いました。サア何卒城内に一度宣傳の爲お出で下さいませうか」
片彦「ランチ殿、如何致しませうか、初稚姫様が御逗留とあれば、お目にかかつて置くも結構ぢやありませんか」
「何と云うても、治國別様が道寄をしてはならぬと仰有つた以上、何事があつても道寄はなりません」
高姫「モシ、ランチ様とやら、侍女二人がこの通り逃げると云ひます。妾は何うして一人で城内に歸れませう。何卒お二人で送つて下さいませうか。これと申すも、皆貴方等から起つた事、宣傳使の職責を重んじて、邪が非でもお願い申します」

「ランチ殿、年にも似合はぬ偉い理窟をかますぢやないか、驚いたなア」
「驚いたなア、こりやうつかりしては居られますまい。併し本當の初稚姫様、如意王か、但は曲か、調査するのも強ち無駄ではありませんまい。一層此初花姫の言葉に従ひ、城内を探つて見ませうか」

「サア、さう致しませう」

と二人は茲に決心し、口を揃へて兩人は、

「イヤお供致しませう、お世話に預りませう」

「それは早速のお聞きずみ、有難うムいます。初稚姫は申すに及ばず、父母も嘸

喜びますでムいませう。サア高子、宮子、もう心配には及びませぬ。宣傳使様が

来て下さいますから」

高子、宮子はやつと機嫌を直し、二男三女は連れ立って、金銀珠玉を鑲めたる

樓門を潜り奥へ奥へと進み入る。高姫は道々歌ふ。

「七千餘國の月の國中にも別けてコーランの

國の王とあれませる妾は如意王の子と生れ

戀しき國を立出でてはるばる此處に引き移り

十二の侍女を従へて何の不自由もなければ

山河風土の變りたるこれの都は何となく

物淋しくぞ思はれぬ
ウラルの教を守りたる

父と母とはバラモンの
神の軍に降服し

コーラン國を打ち捨てて
漸く此處に逃れまし

安全地帯に都をば
造りて永久の住處ぞと

定め玉ひし尊さよ
城の普請も漸くに

夜に日をついで竣工し
いづれの神を祀らむと

考へ居ます折もあれ
瑞の御靈の御教を

四方に傳ふる宣傳使
初稚姫が現はれて

父と母とを初めとし
吾等一同を神國の

花咲く園に誘ひて
天國淨土の樂みを

諭したまひし有難さ
父と母とは勇み立ち

名さへ目出度き三五の
教の道に歸順して

朝な夕なに太祝詞
上げさせ給ふ健氣さよ

妾は未だ十八の
蕾の花の初心娘

二人の侍女を引き連れて

春野の蝶に憧憬れつ

董タンポポ摘まむとて

いつとはなしに門外に

歩みを運び湯津蔓

椿の下に遊ぶ折

遙に聞ゆる宣傳歌

よくよく耳を澄ますうち

初稚姫の宣りたまふ

御歌の心によく似たり

これぞ全く三五の

教司にますならむ

なぞと心を動かしつ

花を頻に摘み居れば

忽ち聞ゆる太い聲

頭を上げて眺むれば

見るも凜々しき宣傳使

妾が乞ひを容れたまひ

父の命に面會し

初稚姫の御前を

訪ねやらむと宣りたまふ

其御言葉を聞くにつけ

天にも昇る心地して

手は舞ひ足は自ら

踊るが如く進むなり

春野に遊ぶ蝶の舞

花に寄りくる蜜蜂の

劍を捨てたる宣傳使

吾等三人を慇懃に 送らせ給ふ嬉しさよ

ああ惟神々々 尊き神の御恵

謹み感謝し奉る 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

三五教は世を救ふ 救ひの神と現れませる

神素蓋鳴の大御神 従ひませる神司

わけて初稚姫司 ランチ、片彦宣傳使

揃ひも揃うて吾館 訪れ給ふ嬉しさよ

嗚や父上、母君も 喜び迎へ給ふらむ

ああ惟神々々 神の御前に願ぎまつる

と歌ひながら、麗しき門を幾つとなく潜り玄關口に辿りついた。

(大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 加藤明子録)

第一三章 槍襖（一三二八）

高姫は玄關口につき、

「もし御兩人様、何卒お上り下さいませ。これが父の本宅でムいます」

ランチ「イヤ有難うムる。何とまあ、四邊眩きばかり七寶をもつて飾られ、恰も

天國淨土の莊嚴を見るやうでムる」

片彦「いかにも左様、某生れてからまだ、斯様の館を拜見した事がない。ハルナ

の都の靈照殿でも、このお館に比ぶれば非常な劣りを感じます」

「お二人様、お恥かしい破家でムいます、何卒奥へお通り下さいませ。これ高子、

宮子、早く奥へ往つてお父さまやお母さまにお客様がみえたと云つて来るのだよ」

「ハイ」

と答へて二人の侍女は衝立の影に姿を隠した。七寶をもつて描かれたる衝立の繪

は月夜の海面であつた。如何なる畫伯の手になりしものか、一目見るより幽玄壯

大の氣分に漂はさるのであつた。二人はオツオツ高姫の後について長い廊下を

面恥かしげに進みながら、ランチは片彦に向ひ、

「片彦殿、實に瑠璃宮のやうでムるなア」

「成程、形容の辭がムらぬ。これはこれとはばかり花の吉野山、とても言つて置きませうかな。嬋妍窈窕たる美人に導かれ、金、銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、碑磔、玻璃の七寶をもつて飾られたる珍の御殿を進み行く吾々兩人は、夢でも見て居るのでムるまいかなア」

と、こんな事を囁きながら、奥へ奥へと進み入つた。パツと突き當つた所に觀音開きの庫のやうなものが立つて居る。其處から花を欺く許りの十二三の乙女が七八人、バラバラと現はれ、中の最も年かさらしき乙女は叮嚀に手を仕へ、

「お嬢様、どこへ行つていらしたのでムいます。御兩親様が大變御心配でムいました。そこで妾がお探ねに往かうと思つて居た所、そこへ高子、宮子様がお嬢様は今お客さまを連れてお歸りとの事に、お迎へに參りました。ようまア歸つて下さいました」

と叮嚀に云ふ。

高姫「其方は五月ぢやないか、御苦勞だつたねえ。このお方は三五教の宣傳使様

だよ。サア奥へ御案内して下さい。初稚姫様のお居間へねえ」

五月「ハイ承知致しました。サアお客様、妾が案内致しませう」

ランチ「ヤア、これは誠に恐れ入ります」

片彦「左様なれば遠慮なく御免を蒙りませう」

と観音開きを潜らうとする時、

高姫「もしお客様、妾は一寸父母に會つて参りますから、何卒應接の間に待つて

居て下さい。これ五月や、お客様を鄭重に御待遇なされや」

「ハイ畏まりました」

片彦「どうぞ初花姫様、お構ひ下さいませう」

ランチ「左様ならばお待ち申して居ります、どうぞ直にお顔を見せて下さい」

「ハイ承知致しました。一寸失禮致します」

と、扉を開けてパツと姿を隠した。これは高姫の與へられた狸穴の立派な部屋で

ある。片彦、ランチは八人の少女に導かれ、観音開きを潜つて中に入った。室内

の諸道具は行儀よく整理され、五脚の椅子が、圓いテーブルを中央にして並べられてある。二人は五月に勧めらるる儘に腰を下した。何とも云へぬよい気分である。ドアは何時の間にか固く鎖された。二人はコクリコクリと夢路に入った。暫くすると、

『もしもし』

と肩を叩くものがある。二人はフツと目を醒ませば、机の上に見た事もない綺麗な器に、酒や壽司や果物が盛られて居た。そして何とも云へない妙齡の婦人が衣服一面に寶玉を鏤め、其光は燈火に反射して一層麗しく輝いて居る。赤、紫、青、紅、黄、白、橄欖色、紫紺色などの光が全身から溢れて居る。二人は夢かとはかり驚いた。さうして室内に燈火のついて居るのを見て、餘程長く眠つて居たものだと思つた。

ランチ『ヤア、どうも失禮致しました。結構なお館へ引き入れられてまして、失禮千萬にも眠つて仕舞ひました。何卒吾々が無作法をお咎めなく、お許しを願ひます』

三人の女は何れも玉子に目鼻のやうな、揃ひも揃うた容貌をして居る。併し中央に腰をかけて居る女は、どこともなしに氣品高く、且つ二つばかり年かさのやうに見えた、十八才に十六才位な姿である。中なる美人は兩人に向ひ、

「私は初稚姫でムいます。承はれば貴方等はランチ將軍、片彦將軍様ださうですなア、よくまア三五の道に御入信なさいました。妾は大神の命を受けハルナの都を指して宣傳の旅に上る途中、如意王様に見出され、暫く此處に足を止むる事となりました。さうして此右に居られる方は秋子姫、左の方は豊子姫と申すお方でムいます。まだお年は若うムいますが、王様がコーラン國から侍女としてお連れ遊ばした淑女でムいます。何卒以後相共に宜敷く御提携を願ひます」

ランチ「貴女が、名に高き初稚姫様でムいましたか。これは又不思議な所でお目に懸りました。私は仰せの通りランチでムいます。一度は鬼春別將軍の部下となり、大黒主の命を奉じ、勿體なくも齋苑の館に攻め寄せむとした罪人でムいます。然るに、大神様のお恵によつてスツカリ改心を致し、治國別様の長らくの御教訓をうけ、御添書を頂いて齋苑の館へ修業に參る途中、王女初花姫様にお目に

かかり、導かれて此處まで參上致しました。何卒至らぬ吾々、萬事御指導を願ひ奉ります」

拙者は片彦でムいます。ランチ殿と同様の徑路を辿つて、今は治國別様のお弟子となり、此門前に於て王女様に導かれ、只今これへ參つた所でムいます。何分宜敷く御指導を願ひます」

これより初稚姫は、秋子、豐子に命じ盛に兩人に酒を勧めさせた。兩人は恍惚として酒と二人の美貌に酔ひ、吾身の天にあるか、地にあるか、海中にあるか、野か山か、殿中か、殆ど見當のつかぬ所まで酔ひつぶれて了つた。さうして三五の教の教理も、治國別の教訓も、残らず念頭より遺失し、今は只ランチには豐子の顔、片彦には秋子の顔が、浮いたやうに目にボツと映るのみである。ランチ、片彦兩人は二人の女に手を引かれ、ヒヨロリヒヨロリと廊下を渡つて、麗しき一間に導かれ、二男二女は枕を並べて寝についた。

暫くあつて二人は氣が付き四邊を見れば、石と石とに疊まれた一室内の石疊の上に横たはつて居た。さうして何處にも出口がない。一枚板を立てたやうな滑ら

かな大理石で四方が包んである。二人は俄に顔色を變へ、

ランチ「ヤア、こりや大變だ。片彦さま、どうだらう、美人に手を曳かれ眠つた

と思へば、斯様な石牢の中へ放り込まれたぢやないか」

片彦「成程、こいつは困つた。どうしたらよからうかなア」

「どうしようと云つても手のかかる所もなければ、押しても突いても出口も入口もないのだから、仕方がないぢやないか。斯ふ云ふ時にこそ、天津祝詞を奏上するのだな」

「如何にも左様」

と二人は天津祝詞を奏上せむと焦れども、どう云ふものか、一口も出て來ない。外の言葉なら何でも出るが、天津祝詞に限つて一言も出ないのは、不思議中の不思議であつた。

ランチ「ヤア駄目だ、片彦、御身も駄目と見えるのう」

片彦「誠に残念至極でム。一つ力限り呶鳴つて見ようではムらぬか。さうすれば誰かが聲を聞きつけて救ひ出して呉れるだらう」

「宜敷からう」

と二人はアオウエイを連發的に幾度も重ねて唸り出した。併し石疊に少しの隙もなく圍まれた十坪許りの此室は、聲の外に漏れる筈もなく、聲は残らず反響して、遂には兩人とも喉を破り、カスリ聲しか出なくなつて仕舞つた。

ランチ「ああ駄目だ、もう此處でミイラになるより仕方がないワイ」

片彦「これも吾々の罪劫が報うて來たのだと諦めて、男同士の心中でもしやうぢやないか」

「どうも仕方がない」

とこれもひつついたやうな聲で呟いて居る。忽ち足許から、カツカツカツと鋭利な鑿で岩を打ち碎くやうな音がしたかと思へば、筈のやうに鋭利な槍が石疊を通して又ツと現はれた。

「ヤアこれは險難だ」

と後へすぎると、又もやカツと音がして槍の穂先が湧いて出る。瞬く中に三本四本五本十本と石疊を通して隙間もなく鋭利な槍が立ち竝んで來た。横壁になつて

居る石疊からも槍の穂先が三尺許り、カツカツと云ひながら四方から頭を出した。最早兩人は眞直に立つて居るより、横になることも何うする事も出来ないやうに槍に包まれて了つた。槍の穂先は忽ち蛇と變じ、ペロペロと兩人の身體を舐めむと一齊に首を擡げて舌端火を吐く奴、中には水を吐く奴、黒煙を吐く奴、次第々々に延長して兩人の身體を雁字搦みにして了つた。二人は聲も得上げず、互に顔を見合せた。俄に顔はやつれ、恨の顔色物凄く、忽ち地獄の餓鬼のやうな面相になつて了つた。

此時、何處ともなく太鼓のやうな聲が聞えて來た。二人は耳を澄ましてよく聞けば、

「アア惡魔外道の教をもつて世を誑らかす三五教に迷信致し、
イイ印度の都ハルナに坐します大黒主の命令に背き軍務を捨てて、
ウウ迂闊千萬にも三五教に寢返りを打ち迷信致した罪によつて、
エエ閻魔の廳より許しを受け、汝兩人を劍の山、蛇の室、焰の牢獄につつまみ、
オオ臆病者の汝等の靈肉を亡ぼし、地獄のどん底へ落して呉れむ。」

カカカ改悪致して片時も早く神にお詫を致せばよし、何時迄も頑張りて居るならば、

キキキ錐の地獄へつき落とし、鋸の刃をもつて汝が首を引き破り、
ククク苦しみの極度に達せしめ、糞を食料に與へてやるがどうだ。

ケケケ怪しからぬ其方。

コココ是より此處で改心致すと申せば、この苦痛を許してやらうが、何處までも
あななひけう三五教を奉ずるとあらば、最早許さぬ百年目、返答はどうだ」

と雷の如き聲が聞えて来る。

ランチ「拙者は苟くも三軍を指揮したる武士でゐる。一たん三五教に歸順したる

上は、決して所信はまげぬ此方、サア早く某を如何やうとも致したがよからう。

假令肉體は亡ぼさるとも、如何なる責苦に遇ふとも、拙者の靈は肉を離れ、大神
の天國に上り、神軍を引率して汝等の魔軍を木端微塵に粉碎して呉れむ。如何様

なりとも致したらよからう」

何處ともなく又もや大きな聲、

『さてもさても合點の悪い代物だなア。

シシシ強太う致して我を張りよると、汝が靈肉を粉碎し、高天原へ上る所か、第三天國の軍勢をもつて、汝が悪業を數へ立て、槍の穂先に亡ぼし呉れむ。スス素直に改惡致して、此方の云ひ分についたが汝の身の爲であらう。

セセセ背中腹はかへられまい。

ソソソ傍に立ち上るその劍先、今に焰を吐いて汝を焼き盡すだらう。片彦も同様だぞ。一同思案を定めて返答を致すがよからう』

片彦『タタタ叩くな叩くな、惡魔の計略に乗ぜられて、假令此肉體は亡ぶとも、チチチ些とも怖れは致さぬ。

ツツツ突くなと斬るなと勝手に致せ。

テテテテングを致すと、やがて三五の大神現はれたまひ、汝を罰したまふべし。トトトとほうに暮れて、如何に柝麵棒を振るとも、決して其方は許されまいぞ』

頭の上から又怪しの聲、

『ナナナ何をゴテゴテと世迷言を吐すか。』

二二二二人とも大黒主様に叛旗を翻し、

又又又ツケリコと士節を破り三五教の道に、

ネネネ寝返り打つた横着物、

ノノノ望みとあらば、此槍の穂先を廻轉させ、喉と云はず、頭と云はず、腹と云

はず、突いて突いて突き捲つてやらうか」

ランチ「ハハハ腹なりと喉なりと、

ヒヒヒ肱なりと背なりと勝手に、

フフフ不足のないやうに、サア突けい、ガツプリ突けい。

へへへ下手な事を致して地獄の苦しみを受けな。

ホホホ呆け野郎奴、このランチは、汝如き悪神に屁古垂れるやうな弱蟲ではない

程に、鯉は俎の上に載せらるれば決して跳ねも動きも致さぬ。武士の花と謠はれ

たるこのランチ、片彦兩人は一寸も動かばこそ、大磐石心だ、勝手に致したがよ

からう」

と、かすれた、ひつついた聲を出して抵抗して居た。

不思議の事には槍は林の如く突立ち、火は炎々として燃えて来る。蛇、蜈蚣は體一面に集つて来るが、併し痛くも痒くもない。兩人はこれぞ全く神様の御守護と大神を念じ、且一時も早く天國に上らむ事をのみ念じつつあつた。

ああ此兩人は如何にして救はるであらうか。
(大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 加藤明子録)

第一四章 自惚鏡(一三二九)

妖幻坊の高宮彦は侍女の五月を高宮姫の居間に遣はし、一度吾室へ來れと命令した。此五月といふ美人は實は竹藪の中に棲んでゐる豆狸さまである。

「御免なさいませ。高宮姫様、御城主様が御招きでゝいますよ」

高姫は脇息にもたれて、うつらうつら居眠つてみたが、パツと目を開き、
「ああ其方は五月であつたか、吾君様が、妾に御用があると仰有るのかい」

「ハイ、直様お出でを願ひたいとの事でムいます」

「すぐに参りますから、一寸御待ち下さいませと、云つておいておくれ」

五月は、

「ハイ」

と答へて、ここを足早に立去つた。高姫は鏡臺の前にキチンと坐り、髪をほつれをかき上げ、衣紋を整へ、口をあけたり、すぼめたり、種々と美顔術の限りを盡し、

「ホホホホ、何とマア、人魚でも食つたのかいな。五十の尻を作つてをる此高姫も、自分ながらに吃驚を致す程若くなつたものだなア。まるきり、十七か六位な、うひうひしい姿だ。初稚姫が何程綺麗だと云つても、此高宮姫には、ヘン、叶ひますまい、ホホホホ。如意寶珠の玉といふものは、本當に偉いものだワイ。空助さまも今は高宮彦と、眞面目な顔して名乗つてムるが、ヤーパリ、偉いものだ。ようマア、齋苑の館の寶物を甘くチヨロまかされたものだなア。之だから人に氣は許されぬといふのだなア。素盞鳴尊の盲神や、言依別のドハイカラ、八島主の

青瓢箪、それに東野別のウスノ口、ガラクタばかりが居りやがつて、奇略縦横の
空助様を、真正直な人間だと思ひつめ、へへへへへ、蝟の揚壺を喰つて、今では
齋苑の館は梟鳥の夜食に外れたやうな、小難しい顔をして居るだらう。あああ、
心地よや、氣味がよや、ドレドレ此綺麗な姿を吾背の君にお目につけ、一つ喜ば
して上げませうかな。見れば見る程御綺麗な、何とした良い女だらう。何程空助
さまに氣が多いと云つても、どこに一つ點のうち所もない、髪髪の毛の先まで、愛
嬌がたつぷり溢れてゐる此高ちやまを、どうして捨てられるものか。何程世界に
美人があると云つても、之は又格別だなア。本當に此鏡の側を離れたくないやう
だ。空助さまも此鏡を見たら、さぞ嬉しからう、併し自分が自分に惚れる位な美
人だからなア。私だつて、私の姿にゾッコン惚込んで了つた。併し自分の姿を見
る譯にゆかず、此鏡の前に立つた時ばかりだ。ああ離れともない、鏡の君、お名
残惜しいけれど、暫く空助さまの御機嫌を伺つて來る程に、鏡さま、又歸つて來
て此綺麗な姿を寫して上げるから、楽しんで待つてみなさいや」

高子「ウフフフ」

宮子「ホホホホ」

「エーエ、お前は此處に居つたのかいな。居るなら居るとなぜ言はぬのだい、皆私の獨言を聞いたのだらう」

高子「ホホホホ」

宮子「フツフツ」

「エーエ、餘り自分の姿に見とれて、二人の侍女が横に居るのも氣が付かなかつた。ホンにさう思へば、向ふの方に人間の姿がうつつてるやうだつたが、氣がつかかなかつた。コレ二人の娘兼侍女、こんな事、吾背の君を始め、誰にも言つちやなりませんよ。サアサア参りませう」

「アイ」

と答へて二人は高姫の前後につき添ひ、妖幻坊の居間へ進んで行く。ソツとドアを開いて中を伺ひ見れば、目もくらむ許り、金色燦爛と輝いてゐる。そして四方の壁は残らず鏡のやうに光り、高姫の妖艶な姿は、鏡面を互に反射して、幾十人とも知れぬ程映つてゐる。高姫は自分のやうな美人は恐らく天地の間に、自分一

人よりないと誇り顔に思つて、盛装を凝らし、顔の造作まで修繕してやつて来たのに、自分と同様の美人が、幾十人ともなく妖幻坊を中心に取り巻いてゐるので、俄にクワツと悋氣の角を生やし、

「これはこれは、高宮彦様、お樂しみの所を、お多福がお邪魔を致しまして、さぞ御迷惑でムいませう。これだけ澤山に美人をお抱へになつてゐる以上は、私のやうなお多福には到底手がまはりません。成程私と同棲しないと仰有るのは分りました。私はどうせ数にも入らぬ馬鹿者、これだけ澤山の美人を側に侍らし、私だけは只一人、こんな少女を側において監視させ、自分は榮耀榮華に、蝶の如き花の如き美人に戯れ、ホんにマア偉いお腕前、恐れ入りました」

「ハハハハ、コレ高宮姫、そりや何を云ふのだ、誰もゐないぢやないか。此高宮彦は只一人、孤壘を守つてゐるのだ。大方お前の姿が玻璃壁に映つて、それが互に反射してゐるのだ。それ故澤山の美人があるやうに見えるのだが、皆お前の姿だよ」

「エー、うまいこと仰有いませ。鏡に一つの姿がうつる事は、それはムいませう、

これ程四方八方に映る道理はありませぬ。あれを御覽なさい、右を向いたり、左を向いたり、前へ向いたり、背を向けたりしてのぢやありませんか。私は妬くのぢやムりませぬが、なぜ貴方は水臭い、女があるなら、これだけあると仰有つて下さいませぬのか。私に恠氣させ、怒らせて樂しまうとの企みでムいませう。そしてこれだけの女に高宮姫の狂亂振を見せて、笑はしてやらうとの御考へ、ヘン、誰が其手に乗るものですか。決して怒りませぬよ。併しながら皆さま、お氣の毒ながら、此高宮彦は私の夫、ここで意茶ついて御覽に入れるから、指をくはへて御覽なさい。ヘン、すみまへんな。コレコレもうしこちの人、否々吾背の君様、どうでムいます、御機嫌は……」

「イヤ、高宮姫、よくマア来て下さつた、これだけ澤山女は居れども、氣に入つたものは一人もない、何と云つてもお前の肌は細かい、そして柔かい。背の先まで尻の穴まで、何とも云へぬ香ばしい匂ひがする、又【ワイガ】は特別香ばしいと云ひながら、高姫の頬に吸ひ付いてみせた。高姫はグニヤグニヤになり、目を細うして鏡の映像に向ひ、

「オイ、そこな立ん坊、へん、すみまへんな。高宮姫さまは高宮彦の愛を獨占して居りますよ。ここで夫婦の親愛振を見せて上げませう」
と云ひながら、四方八方を見まはし、舌をペロツと出して見せた。どの姿も此姿も同様に舌をペロリと出す。

「エー馬鹿ツ」

と腮を前へ突き出して唝鳴ると、又一時に腮を突き出し、口をあける。高姫は、

「コラ、失敬な、眞似をしやがるか、此高宮姫は正妻だ、ガラクタ奴」

と云ひながら、握り拳を固めて突貫し、壁に鼻を打つてウンと一聲其場に倒れた。妖幻坊は此奴ア大變と打驚き、豆狸に渭の水を汲ませにやり、高姫の頭部面部の嫌ひなく吹きかけた。漸くにして高姫は正氣に返つた。四邊を見れば使ひに行つた豆狸が、まだ高姫は中々氣がつかうまいと安心してゐたものだから、變相もせず、其儘にチヨコンと坐つてゐた。流石の妖幻坊は高姫が失神した間も、何時氣が付くか知れぬと思ひ、其體を崩さなかつた。高姫は、

「此豆狸」

と云ひながら、ポンと頭を叩いた。當り所が悪うて、一匹の狸は其場に悶絶した。他の一匹は一生懸命に窓の穴から飛出して了つた。

「ああ、あの憎い女に鼻をこつかれて、ふん伸びました。高宮彦様、何卒お願いだから、彼奴を皆歸なして下さいな。私は何だか氣分が悪くてたまりませぬワ」
「あれは其方の姿が鏡に映つてゐるのだが、それ程分らねば、此光つた壁に泥を塗つて上げよう、さうすれば映らなくなつて疑が晴れるだらう」

と云ひながら、裏の背戸口に使ひ餘りの壁土があるのを、妖幻坊は大きな盥に一杯盛り、片手にささげ、片手に泥を握つて、一面に室内を塗つて了つた。そして盥を外へ出し、手を洗つて再び入り來り、

「高姫、これで疑が晴れただらうな」

「なる程、貴方はヤツパリ私が可愛いのですな、あれだけ澤山の女を、繩蟲かなんぞのやうに、皆泥で魔法を使つて平げて了つた其手竝は、實に天晴なものです

よ

「天地の間の幸福を一身に集めたのは其女と某だ。併し高姫、御苦勞でムつたな

ア。ランチ、片彦兩人は、甘く其方の計略にかかり、今は殆ど囊中の鼠、活殺の権利は此高宮彦の掌中にあるも同然だ。ホホー頼もしい頼もしい。かふいふ仕事は其女に限るよ。此高宮彦も其女より外に何程美人があつても心を迷はさないから、安心して高子、宮子を伴ひ、何卒日に一遍は、椿の下まで人曳きに行つてくれ。これがお前の勤めだ。お前も春野の花を摘みながら、郊外散歩は餘り悪くはあるまいから……」

「ハイ、さう致しませう。本當に昨日のやうに甘く行きますと、心持がようムいませう。そうしてあの兩人は如何なさいました。其後根つから私に顔を見せませぬがな」

「彼奴は何程云ひ聞かしても、到底ウラナイの道に歸順する見込がないによつて、生かしておけば三五教の宣傳使となり、吾々兇黨界……否善のお道の邪魔を致すによつて、石牢の中にブチ込んでおいた。かうしておけば自然に寂滅爲樂、モウ此方のものだ。別に骨を折らなくとも、刃物持たずの人殺、丁度お前と同じやり方だ、アハツハハハ」

「コレ、もし吾夫様、私が人殺とは、ソラ餘りぢやムいませぬか。何時人を殺しました」

「アハハハハ、其方の美貌で一寸睨まれたが最後、戀の病に取りつかれ、寢ても醒めても煩惱の犬に追はれて忘れられず、遂には氣病を起して不斷の床につき、身體骨立してこがれ死ぬやうになつて了ふのだ。此高宮彦も其方の事を思へば、骨までザクザクとするやうだ。此高宮彦を殺すには、チツとも刃物はいらぬ。お前が一つ尻をふつたが最後、忽ち寂滅爲樂の道を辿るのだ。アハハハハハ、てもさても罪な男殺のナイスだなア。それさへあるに、毒酸を以て珍彦夫婦を殺さうとなさるのだから、イヤハヤ恐ろしい、安心して夜も晝も眠られない代物だ、

アハハハハハ」

「コレ、空ちやま、ソラ何をいふのだい、お前さまが發頭人ぢやないか。私は教へて貰つてやつたのぢやないか。口に番所がないかと思つて餘りな事を云つて下さるな」

とソロソロ生地を現はし、野卑な言葉になりかけたが、フツと氣がつき、俄に言

葉を改めて、

「吾背の君様、擲揄ひなさるも、いい加減に遊ばせ。妾は悲しうムいます、オン

オンオンオン」

「アハハハハ、面白い面白い、人間といふものはいろいろの藝を持つてゐるもの
だなア」

「ヘン、人間なんて、チツと違ひませう。ソリヤ私は人間でせう。併し靈は義理
天上日の出神の生宮ですよ、何卒見損ひをして下さいますな」

「ハハハハ、イヤもう恐れ入りました。義理天上様、今後はキツと慎しみませう」

「コレ高さま、宮さま、何をクツクツ笑つてゐるのだい、それ程可笑しいのか。
子供といふものは、仕方のないものだなア」

高子「それでもお母さま、可笑しいぢやありませんか。チンチン喧嘩をなさるの
だもの、ねえ宮さま、可笑しいてたまらないぢやないか」

妖幻「ハハハハ、オイ、高宮姫さま、子供が笑つてゐるよ」

「貴方が、【しよう】もない事仰有るから、二人が笑ふのですよ」

高子たかこ「それでもお母かあさま、貴女あなたのお居間ゐまで可笑をかしかつたぢやありませんか。あの時ときはお父とうさまはゐませぬでしたね。お母かあさま一人ひとりで私等わたしら二人ふたりが堪たへきれない程ほど、可笑をかしい身振みぶりをなさいましたワ」

妖幻えうげん「アハハハハ、大方おほかたおやつしの所ところを見たのだらう」

宮子みやこ「ハア、さうですよ。お尻いしをふつたり口くちを歪ゆがめてみたり、獨言ひとりごとをいつたり、

自分の姿すがたに惚ほれたり、そして此姿このすがたを吾背わがせの君きみに見みせたら、さぞお喜よろこびだろツて言い

つてゐらつしやいましたよ。ねえ高たかさま、違ちがひありませんだらう」

高子たかこ「本當ほんたうに其通そのとほりでしたね、お母かあさまも餘程よつほど面白おもしろいお方かただよ」

妖幻えうげん「アハハハハ」

高姫たかひめ「ああ、夫をつとや吾子わがこに、ぞめかれ、ひやかされ、別嬪べっぴんに生うまれて來くると辛つらいも

のだ。ホホホホ、アハハハハハ、フフフフ」

と四人よにんは一度いちどに笑わらふ。高姫たかひめに頭あたまをくらはされて死しんでゐた豆狸まめだぬきは、此この笑わらひ聲こゑにフ

ツと氣きがつきムクムクと起おきあがり、室内しつないを二三遍にさんべん驅かけまはり、窓まどの口くちから、手早てばやく

姿すがたを隠かくした。

高姫たかひめ 「何とマア、これ程立派な御殿に狸が棲んでゐるとは不思議ぢやありませんか。犬でもおいたら、皆逃げて行くでせうにねえ」

妖幻えうげん 「イヤ俺は何時も申す通り、申の年の生れだから、犬は大嫌ひだ。それだから諺にも、仲の悪い間柄を犬と猿みたやうだといふではないか」

申まをといふのは、男の方からヒマをくれる事、犬といふのは女房の方から夫にヒマを呉れて歸ることかへでムいませう。モウ之から、犬だの申だの、縁起の悪い事はいはぬやうに、互に慎しませうね」

「こつちは慎しんでゐるが、お前の方から、何時も約束を破るのだから困つたものだよ、アハハハハ」

左様ならば、又夜の拵へもムいますから、妾は居間に引取りませう」

「コレ高宮姫殿、二人の侍女を……否子供をお前が獨占しようとは餘りぢやないか。どうか一人ここにおいてゐてくれまいかなア」

「如何にも、貴方は一人、男が一人居ると、何時魔がさすか分つたものぢやありませんか。コレ高子ちやま、お前御苦勞だが、お父さまのお側に御用を聞いてゐて

下さい。そして、もしも外の女がここへ入つて來たら、いい子だから、ソツと私に知らすのだよ」

高子はワザと大きな聲で、

「ハイお父さまの居間へ、どんな女にもせよ、入つて來たものがあつたら、キツと内證で知らしてあげますワ」

「コレ高子さま、そんな内證がありますか。エーエ氣の利かぬ子ぢやなア」

妖幻「ハハハハ、何處までも御注意深いこと、イヤハヤ恐れ入りました。高子は要するに、私の監視役だなア。ヤアこはいこはい。コレ高子さま、お手柔かく願ひますよ。何事があつても決して高宮姫に内通しちや可けませぬぞ、アハハハハ」

高姫「エー、なんぼなと仰有いませ、さようなれば」

と宮子の手をひき、吾居間に肩をゆすり、袖の羽ばたき勇ましく、長い襦袢を引きずつて、シヨナリシヨナリと太夫の道中宜しく歸り行く。

(大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 松村眞澄録)

第一五章 餅の皮（一三三〇）

高姫は宮子と共に吾居間へ歸り、直に襦衣をぬぐ筈だが、マ一度自分の盛装した姿をトツクリと見てからでなくては惜しいと思つたか、鏡の前にスツクと立ち「ウーン」と云つたきり、わが姿に見とれてゐる。宮子は高姫の後に行儀よく坐つてゐた。高姫は益々感心して「ウーン　ウーン」と息を詰め、餘り氣張つて感心したので、上へ出る息が裏門へ破裂し「ブブブブ」と法螺貝を吹いた。宮子はビツクリして「クスクス」と鼻を鳴らせながら、二歩三歩後しざりした。此宮子に化けた化物は妖幻坊の片腕で、數千年劫を経た獅子のやうな古狸であつた。忽ち鼻が歪むやうな奴を吹きかけられ、思はず知らず正體の一部を現はして、クスクスと云つたのである。高姫は四邊を見廻し、

「アレマア、宮ちやまとした事が、行儀の悪い、こんな所でオナラを弾じたり、ホホホホ」

「アレマア、お母さまとした事が、自分がオナラをひりながら、殺生だワ」

「コレコレ宮子さま、お前は侍女ぢやないか。侍女といふものは、主人がオナラを弾じた時に、不調法を致しましたと自分が引受けるのだよ、それが侍女の第一の務めだからな。これから日に七回や八回は出るかも知れないから、其時はキツトお前さまがあやまるのだよ」

「それでも私、閉口だワ」

「狸のやうに、クスクスなんて、これから笑つちや可いませぬぞや」

「それでも、お母さま、餘り臭かつたので、狸の屁かと思つたのよ」

「コレ宮さま、一寸外へ遊びにいつて来ておくれ、お母さまはチツトばかり、内

證の用があるから」

「へへへへ甘い事仰有いますワイ。私を外へ出しておいて、又自惚鏡の前で、獨

言を云つて喜ぶのでせう」

「どうでも宜しい、お前さまは子供だから、やつさなくても美しいのだ。女は身嗜みが肝腎だからなア。黒い顔や亂れた髪を、夫や人に見せるのは失禮だ。女として慎しむべきことは第一身嗜みだから、お前さまが居ると、氣がひけて、十分

に化粧が出来ないから、半時ばかり、田圃へいつて遊んで来なさい。田圃が遠ければ、一遍城内の庭園をみまはつて来て下さい」

「それなら行つて参ります、十分おやつしなさいませ」

「エー、いらぬ事を云ひなさるな、トツトとお行きんか」

「ハイ」

とワザと怖さうに腰を屈め、這ふやうにしてドアの外に飛出し、三つ四つポンポンと足踏みをして床板を鳴らし、それから同じ所をドスドスドスと一歩々々低くし、遠くへ行つたやうなふりを装うた。高姫は足音がだんだん低くなるので、廊下を傳つて遊びに行つたものと思ひ、やつと安心して自惚鏡に立向うた。そして餘り一心になつてみたので、ドアの開いてあるのに気がつかなくつた。宮子は観音開のドアの三角型に開いた一寸ばかりの隙から、丸い目を剥いて中の様子を窺つてみた。

「あああ、何とマア、見れば見る程、フツクリとした頬べた、それに紅うつりのよい唇、天教山の木花姫のやうな鼻の形、鈴をはつたよな目許に、新月の眉、雪

の肌、耳朶のフツサリとした、髪かみの毛けの艶つやのよさ、なぜマア造化ざうくわの神かみは、私わたし許ばかりにこんな美貌びばうを與あたへて、世間せけんの女をんなには、可愛相かあいさうに、あんな不器量ぶきりやうな顔かほを與あたへたのだらう。どう考かんがへてみても、背恰好せかつかうといひ、高たかからず、低ひくからず、太ふとからず、細こまからず、肉にくは柔やはらかにしてシマリあり、此指このゆびだつて、一節ひとふしひとふし々々、梅うめの蒼つぼみの開ひらきかけのやうだワ。爪つめの色いろは瑪瑙めなうのやうだし、ああ神様かみさま、私わたしはなぜにこれ程ほど美しいのでせう、イヤイヤさうではあるまい、義理天上日ぎりてんじやうひの出神でのかみの生宮いきみやだから、ヤツパリ人間げんではないのだ。空助もくすけさまが、お前まへは高天原たかあまはらの最奥靈國さいあうれいこくの天人てんにんだと仰有おつしやつた。成なる程ほど、それで人間にんげんとはすべての點てんが違ちがふのだ。あああ、顔かほや手てばかり見みて居をつた所で、自分の姿すがたも全部ぜんぶ査しらべてみなくちや分わかるものぢやない。ドレドレ侍女こしもとのをらぬのを幸さいはひに、赤裸まつぱたかとなつて、肉體にくたいの曲線美きよくせんびを査しらべてみようかな」

と獨語ひとりごとちつつ、着物きものを全部ぜんぶ脱ぬぎ、鏡かがみに打向うちむかひ、

「ヤア、どこからどこまで完全無缺くわんぜんむけつなものだ。乳房ちぶさのフツクリとした、そしてツンモリとしてゐる所ところ、何なんとしたいい恰好かつかうだらう。胸むねは扇形あふぎがたになり、腰こしのあたりは蜂はちのやうだワ。そして尻しりはポツクリと丸まるう丸まるう太ふとり、肌はだのツヤは瑠璃光るりくわうのやうだ

し、膝頭の位置から踵との距離、大腿骨の太さ、長さ、どつから見ても、これ理想的に出来た身體は、マアあるまい。ドレドレ肝腎の如意のお玉も、一つ鏡に映してみませうかなア」

とパサパーナをやる時のやうなスタイルで、一生懸命に御玉をうつしてゐる。

「ああ恰好のいい事、ホホホホ、こんな所を人にみられちゃ、大變だがな、併し此御殿は中から開かなくちゃ、外から開かぬのだから都合よくしてあるワイ」

と夢中になつて鏡に映してゐる。八人の少女に化けてみた豆狸は、妙な匂ひがするるので、戸のあいた所からスツと侵入し、ドブ貝の食ひ頃ころに腐つたのが落ちてゐると思つて、矢庭に飛び付いた。高姫はキヤツと驚き、赤裸の儘ままひっくり返つた。豆狸は驚いて、雲を霞と逃げ出して了つた。

「此座敷には、劫經た鼠がある見える、うつかり裸にはなつては居れまい。どつかで猫の子でも貰つて来て飼つておかねば、夜分も碌ろくに寝られたものぢやない、アイタタタ、空助殿の貴重品を臺たいなしにして了つた」

と慌しく着物を着かへ、チャンと振を直して、尚も自惚れながら、ソツと入口を

見れば、観音開の戸は三角型に外へ開き、二寸ばかりのスキから、宮子が半正體を現はし、團栗のやうな目で睨んでゐる。高姫は思はず、

『コラッ』

と叫んだ。宮子はビツクリして、其場を立去つた。

『まるでここは化物屋敷みたやうな所だ。あのドアを確に締めてある筈なのに、音もせずにあいて田螺が睨んでゐた。諺にも美人には魔がさすといふ事がある。』

私が餘り美しいものだから、鼠や田螺までが秋波を送るのかなア。それ程戀慕うて來るのに、私も何とか挨拶をしてやりたいけれど、こればかりは、博愛主義は實行する事は出來ぬ。愛といふものは普遍的、公的のものだが、戀愛となると一人愛に限る遍狹な愛だから、何程森羅万象が私に惚れた所で、こればかりは仕方がない。天地の萬物、必ず必ず高姫を愛するのはよいが、戀愛などはしてくれな。今高姫が天地萬有に向つて宣示しておく程に、ホツホホ、餘り自惚れすぎで、エライ事を云つたものだ。併しながら事實は事實だから仕方がない。あんな年のよつた姿の時でも、秋波を送つてくれた蝶螭別さまに、一度此姿を見せて上

げたいものだなア。ああ、ママならぬは浮世だ。かかる金殿玉樓に、尊貴を極め
榮耀を極めて、而も義理天上日の出神、靈國第一の天人と現はれた身でさへも、
世の中に儘にならぬ事があるものだなア。雙六の賽と河鹿川の流れと蝶蜋別さま
との密會は、此高姫の儘にならぬ所だ、モウ一つ困るのは三五教の宣傳使共だ。
併しながら上見れば限りなし、下みれば程なし、マアここらで満足せなくちやな
りますまい。てもさても幸福な身の上ぢやなア。此上空助さまがコレラでも煩つ
てコロツと亡てくれた其後へ、蝶蜋別さまが又ツケリとお越しにならば、それこ
そ何も云ふ事がないけれどなア。北山村でスキ焼鍋を眞中に、八モや鯛や玉子の
あばれ食ひ、香ばしい酒に酔うて、狐のやうに釣上つた蝶蜋別さまの目元をみた
時は愉快であつた。せめて死ぬまでに、モ一度、蝶蜋別さまに、此立派な御殿で
會うて見たいものだなア」
と何時の間にか聲が高くなり、喋り立ててゐる。外からポンポンと叩く礫の音。
「誰だなア、何用だい」
「ハイ、私は宮子でムいます、何卒開けて下さいな」

「ササお入りなさい、いい子だつたな」

と云ひながら、ドアを開いて、宮子を引入れ、厳しく戸をとぎて錠を卸した。高姫は今の獨言を、もしや宮子が聞いてゐなかつただらうか、聞かれたら大變だと、稍不安の念にかられながら、

「コレ宮さま、お前どこへ行つてゐたの、餘り早いぢやないか」

「ハイ、お母さまが庭園をまはつて来いと仰有いましたから、一生懸命に這うて廻りましたの。そして所が、犬の遠吠が聞えたので、ビツクリして逃げて歸つて来たのよ」

「這うて歸つたの、犬の聲にビツクリしたのと、まるで狸か何ぞのやうな事を云ふぢやないか」

宮子はウツカリ喋つてしまつたと思つたが、稍落着かぬ體で、

「イーエ、どつかの人が四這に這つてゐたのよ。そして犬か鼠か知らないが、お尻のあたりを咬まれて走つてゐたのを見ましたの」

と高姫の事は知らねども、うまく其場をつくらうてみた。高姫は自分が鏡の前で

赤裸まじばだかとなつて身體からだを映うつしてゐた事を、外ほかの事ことに【よそへ】て言いつたのだと思おもひ、
稍やや不ふ機き嫌げんな顔かほしながら、

「コレ宮みやちやま、お前まへは私わたしが裸はだかになつてゐた所ところを覗のぞいてゐたのだな」

「イーエ、知しりませぬワ」

「それでも、ドアの外そとに立たつてゐただろ」

「チツとばかり立たつてゐましたが、田螺たにしのやうな目めを剥むいたものが向むかふから來きましたので、ビツクリして逃にげました。そして庭園ていゑんを一ひと廻まりして來きましたよ」

「お前まへもあの田螺たにしのやうな目めを見みたのかい」

「ハイ見みました。あれは大方おほかた浮木うきぎの森もりに居をつた猿さるの妄念まうねんでせう。さうでなければ犬いぬかも知しれませぬワ」

「コレ、宮みやさま、猿さるだの犬いぬだのと、ここでは云いつちや可いけませぬよ。お父とうさまが大變たいへんにお嫌きらひだから」

「【さる】の嫌いやなのはお母かあさまぢやありませんか、お父とうさまは犬いぬが嫌きらひなのよ」
「オホホホ、何なんとマア口くちの達者たつしやな子こだこと」

□ 如意寶珠の玉の片割れたもの、チツとは口が達者のよ。お母さまの口から入つて口から出たのだから、其口がうつつて、此様によくはしやぐのだよ。姉さまの高ちやまは懸河の辨、私は富樓那の辨ですよ

高姫はキチンと坐り、パンをパクつき、宮子にも割つて與へ、葡萄酒を二三杯、グツと引かけ、ホ口酔ひ機嫌になつて、思ひを遠く海の彼方に走せ、蝶蜆別の身の上を案じ煩ひながら、宮子の耳を憚つて、思ひも深き戀の海の歌を唄つた。

□ 沖を遙に見渡せば

淋しく聞ゆる潮の音

空すみ渡る青白き

月の御蔭に飛ぶ海鳥

星は深し冷たき魚の血の如き

眞青に慄ふ海

胸の轟き戀の波

悲しげに歌ひ續ける

白い波

風は物凄く吹き渡り

冷たい月は雲間に慄ふ

逃れゆく海鳥の

憐れげな叫び聲

衰弱せる海の歎き

ああ神祕の海は

悲しき歌を永久に

彌永久に歌ひつづくる

と戀の述懐をもらしてゐる。今まで空助に現をぬかし、斯かる美はしき金殿玉樓に榮華を極むる身となつては、またもや萌す戀の暗、烈しき焔に包まれて、今は悲しき涙にかきくれてゐる。宮子は不思議さうに高姫の顔を見て、

「アレまアお母さま、泣いてゐらつしやるの、お父さまが氣にくはないのですか」
「コレ宮さま、何といふ事を仰有る、天にも地にも高宮彦さまのやうな偉い人が
ありますか、どこに一つ缺點のない男らしい、勇壯活潑な、そして氣品の高い、
筋骨の逞しい、摩利支天様の御靈、勿體ない、嫌ふなんて、そんな事があります
ものか」

「それでもお母さま、いま泣いてゐただぢやないか」

「そらさうよ、よう考へて御覽なさい。お父さまは同じ館に住みながら、女房の
側にやすんで下さらぬのだもの。私だつてチツとは淋しくもなり悲しくもなりま
すワ」

「それでも蠓蠓別とか、何とか言つてゐらつしやつただぢやありませんか」

「其蠓蠓別といふ奴、私の敵だよ。お父さまを常につけ狙ふ悪い奴だ。そして今
は三五教にトボけてゐるのだから、神變不思議の術を習つて、何時私を攻めに來
るか分らないワ。けれども、モウ斯うなつた以上は、お父さまの御神力と如意寶
珠の神力で蠓蠓別を往生させ、此結構な所を見せびらかしてやりたい。エー、そ

れが出来ぬが残念だと思つて泣いてゐたのよ。こんな事をお父さまに言つちやな
りませぬぞや」

「決して、左様な詰らない事は申上げるやうな馬鹿ぢやありません。そしてお
母さまのお側に可愛がつて貰つてゐるのだもの、チツト位お母さまに不都合があ
つても、隠しますワ。それが母子の情ですからなア」

「成程、お前はヤツパリ私の子だ。どんな事があつても、善悪に拘はらず、喋つ
てはなりませんぞや。女の子は口を慎しむのが一番大切だからなア」

斯かる所へ又もやドアの外から、五月の聲として、

「モシモシ奥様、宮子様、旦那様がお出でになりますから、此處をあけておいて
下さい」

高姫は此聲に驚き、俄に涙を拭き、そこらを片付けて、宮子に命じて錠を外さ
せ、高宮彦の入り来るを今や遅しと待つてゐる。

(大正一二・一・二六 舊一一・一二・一〇 松村眞澄録)

第四篇 夢狸野狸

第一六章 暗闘（一三三一）

春風かをる小北山 木々の梢も緑して

梅散り桃は紫の 花を梢に飾りつつ

神の御稜威も灼然に 老若男女の朝夕に

足跡たえぬ神の庭 訪ね来りし高姫や

妖幻坊の空助は 神の御稜威に照らされて

醜の企みは忽ちに 露顯し岩下に投げられて

コリヤたまらぬと尻からげ 痛さをこらへてスタスタと

雲を霞と逃げ下る 折柄ヨボヨボ登り來る

盲爺めくらおやぢの文助ぶんすけと 衝突しよつとつしたる其そのはづみ

曲輪まがわの玉たまを遺失あしつして コ八こはちさに慄ふるひ戦まのきつ

一目散いちもくさんに逃にげて行ゆく 後追あとおつかけて出いで來きたる

初はつ、徳とく二人ふたりに命めい令れいし 小北こぎたの山やまへ引返ひつかへし

曲輪まがわの寶たからを取返とりかへし 文助爺ぶんすけおやぢを突倒つきたふし

又またもスタスタ逃にげて行ゆく 所構ところかまはず打撲たぼくされ

苦くるみ悶もだえ文助ぶんすけは 力限ちからかぎりに人殺ひところし

誰たれか出でて來きて助たすけよと 叫さけびし聲こゑに驚おどろいて

忽たちまちかけ來くる數すうじふ十じふ人にん 老若ろうじやく男女なんによの信徒まめひとは

右往うわう左往さわうに彷徨さまよひつ こは何者なにものの仕業しわざぞと

皆みなとりどりに話はなしゐる かかる所ところへ階段かいだんを

下り來きたれる二人ふたりの女をんな お千代ちよお菊きくは立寄たちよつて

いろいろ雜多ざつたと介抱かいほうし 文助爺ぶんすけぢさまに其由そのわけを

承うけたまはれば初はつ、徳とくの 二人ふたりがわれを突つき倒たふし

ブンブン玉の神寶を
奪つて直様逃げ行きし

其物語聞くよりも
侠客育ちの兩人は

何條以て許すべき
お千代を後に残しおき

文助爺の身の上を
依頼しおきてお菊嬢

二人の後を追ひかけて
雲を霞と走り行く

怪志の森に来て見れば
永き春日も暮れはてて

あたりは暗に包まれぬ
お菊は森の入口に

佇み思案にくる折
程遠からぬ暗がりに

ウンウンウンと呻き聲
ハテ訝かすと耳すませ

腕をば組みて聞きゐたり。

初「あああ、餘り草臥れて、何時とはなしに夢路に入つて了つた。併しあまり時

間も経つてゐないやうだ。其證據には走つて來た時の動悸はまだ止まず、痛みは

チツとも軽減してゐないし、汗も乾いてをらぬ。なア徳、暗いと云つても、これ

だけ暗い夜さはないぢやないか。ヤツパリ怪志の森だな」

徳「ウーン、俺もまだ半眠半醒状態で、トツクリ寝られないワ。何だか胸がドキドキして仕方がない。モシ高姫さま、空助さま、チツと起きて下さいな、ああ首筋元がゾクゾクとして来ました。ああ、返辭をして下さらぬぞ、ヤツパリ御兩人さまも草臥れて寝てムると見えるな、夜逃同様に撤兵して来たのだから、草臥れるのも無理はないワイ。何せよ高姫さまの外交がなつてゐないものだから、こんなヘマを見るのだよ。グズグズしてると、ここらあたりにバルチザンが襲來するかも知れないよ。其日暮しの日傭ひ外交だからなア。吾々國民は枕を高うして寝られないワ。どう考へても眞から寝つかれないからなア」

「どうやら、高姫さまは空助と、吾々雑兵を放つたらかして、満鐵で逸早く逃歸つたらしいぞ。併し幽霊内閣の立去つた後は、何が出るか知れたものぢやないワ。どうしてもコリヤ吾々國民が腹帯を締め、國民外交をやる氣でないと、當局者に任しておいても、肝腎の時になつたら逃げられて了ふからなア」

「さうだなア、一體何處まで逃げたのだらう」

「逃げるのに、定つた場所があるかい。其時の御都合主義だ。敵が遠く追つかければ遠く逃げるだけのものだ。今日の國際的外交は、朝に一城を譲り夕に一壘を與へて、十萬億土のドン底まで讓歩するのだからなア。それが所謂宋襄仁者の唯一の武器だ、最善の方法だ。弱い者には何處までも追つかけて行く程利益だが、強い奴には逃げるのが最も賢明な行方だ。併し斯う淋しくつては仕方がないぢやないか。オイ、一つ歌でも歌つて氣をまぎらさうぢやないか。……折角文助のドタマを擲り倒して、ウマウマとブンブン玉をひつたくり、此處まで持つて來て空助さまに渡し、喜んで貰つたが、餘り八百長芝居がすぎて、足腰が立たぬ程打ちのめされ、動きのとれぬ所を見すまして、此暗がり置き去りするとは、誠に残酷ぢやないか。これでは吾々下人民は、やりきれない。どうしたらよからうかなア」

「小鳥つきて鷹喰はれ、免つきて良狗煮らるとは俺たちの事だ。あれだけ吾々が血を流してやつと奪つた曲輪の玉を、又強者に掠奪されて了ふと云ふのは、ヤツパリ未來の何處かの外交手腕が映つてゐるのだよ。手腕のワンは犬の鳴き聲だが、

本當に尾を股へはさんで、シヨゲ シヨゲと逃げ歸る喪家の犬のやうな手腕だからな。しまひには、只一つよりない大椀（臺灣）まで逃すかも知れぬぞ。何程琉球そに言うても、骨のない蒟蒻腰では駄目だ。貴様だつて俺だつて、半身不隨だから、腹中の副守、ガラクタ連中には、うまく誤魔化しておいて、兔も角、自分の身體回復を待たねばなるまいぞ。何程人の爲だの、刻下の急務だのといった所で、ドドのつまりは、自分が大切だからな、ハハハハハ

お菊は二人の話をスツカリ聞いて了つた。そして高姫、空助の兩人は曲輪の玉を、此奴等兩人の手から引つたくり、逃げて了つた事を悟つた。……此奴ア一つ、文助の聲色を使つておどかしてやらうか……と横着なお菊は暗がりを幸に、

「ヒヤー、恨めしやなア、初公、徳公の兩人に頭をコツかれ、ブンブン玉をボツたくられ、其上命までも取られたわいのう、ヤイ、初、徳の兩人、冥途の道伴れ、其方の生首を貰うて歸るぞよ」

初「コリヤ徳、此厭らしい森の中で、馬鹿な眞似をするない。何だ、爺の聲を出しやがつて……」

徳「ヘン、貴様が眞似をしたぢやないか、怪體な奴だなア」

「何、貴様が妙な聲を出したのだらう」

「俺は決してそんなこた、言うた覺がない。貴様も言はないとすれば、どつか他に人間が一匹來てゐるに違ひない。暗がりを幸に、ヤツパリ空助さまが隠れた眞似をして、俺達の話を書いてゐたのかも知れぬぞ。ハテ困つたのう」

「モシ、空助さま、此厭らしい夜さに、そんな惡戯はやめて下さいな。困るぢやありませんか」

お菊「ホホホホ」

徳「高姫さま、腹の悪い、そんな厭らしい聲を出したつて、吾々はビクともしませぬぞや」

「尻を叩かれ、骨まで腫上り、ビクとも出來ぬだらう。實に憐れなものだのう、オホホホホ」

「コリヤ高姫、馬鹿にすない、人をよい程使つておいて、こんな苦しい目に遇はして、其上可笑しさうに笑ふなんて、チツとは人情を辨へたらどうだ」

「此高姫は人情なんか、嫌だツ、よく考へて見よ。今日の世の中に人情を知つた奴が一人でもあるか。ニンジヨウといへば松の廊下で鹽谷判官が師直に斬りかけた位なものだ。人情なんか守つて居らうものなら、お家は斷絶、其身は切腹、家來は浪人、しまひの果には泉嶽寺で腹を切らねばならぬぞや。そんな馬鹿が今日の開けた世の中にあるものかい。時代遅れの馬鹿だなア、オツホホホ、いい氣味なこと、空助さまと實の所は、小北山を占領し、貴様等兩人をウマウマ ちヨ口まかして使つてやらうと思つたなれど、櫛の棒で二十や三十撲られて、悲鳴をあげ、歩けないのなぞと弱音を吹くやうな奴は、高姫も愛想がつきた。そんな事で、どうして悪の企みが成就すると思ふか、馬鹿だなア、オホホホ」

初「エー、胸クソの悪い、もう斯うなれば馬鹿にして小北山へ歸る譯にゆかず、又そんな悪人の後へついて行つたつて駄目だし、進退惟谷まつたなア、のう徳、これから一つ善後策を考へなくちやなるまいぞ」

徳「さうだなア、マア此處で足の直るまで、ゆつくり養生して、トクと考へようかい。コリヤ空助、覺えてけつかれ、貴様の企みは何處までも邪魔してやるから、

一寸の蟲も五分の魂だぞ

「此空助は貴様のやうな小童武者の百匹千匹、束に結うて來てもビクとも致さぬ英雄豪傑だ。ましてや尻をひつぱたかれ、骨を挫き、體の自由にならぬ奴が、假令萬人攻め來るとも、決して驚く者でない。又假令體の自由が利く代物でも、今の人間は金輪の魔術を以て口にはましたならば、どれもこれも皆往生致す代物ばかりだ、アハハハハ」

「コリヤ空助、俺は斯うして、腰が立たぬと云つて、貴様の様子を考へてみたのだ。本當の事は此處まで走つて來た位だから、自由自在に立つのだ、サア來い勝負だ。貴様のやうな冷酷な餓鬼の後を追つて行た所で仕方がない。それよりも貴様の生首を引抜いて持ち歸り、松姫様にお詫の印にするのだ。オイ初、貴様もい

い加減に起きぬかい」
「ウン、モウそろそろ活動しても可い時分だ。俺も何だか、此先の浮木の里が氣にくはぬので、一寸作病を起してみたのだが、つひグツと寝て了ひ、其間に高姫、空助に逃げられたと思つて残念でたまらず、副守の奴と作戦計畫をやつてみた所、

神かみの神力しんりきに照てらされて、高姫たかひめ、空助もくすけの奴やつ、後うしろへ引寄ひきよせられよつたのだなア。何なんと神力しんりきは偉えらいものだ。サア空助もくすけ、高姫たかひめ、汝なんぢが如ごとき老おいぼれの五匹ごひきや十匹じつびき、束そくに結ゆうて掛からうとも食くひ足たらぬ某それがしだ、サア来こい」

「オツホホホホ、此暗このくらがりに目めが見みえるのか、喧やかまし吐ぬかすと、聲こゑをしるべに撲なぐりつけてやらうか。暗やみの晩ばんに嘯さへづる奴位やつくらゐ馬鹿ばかはないぞ」

「オイ徳とく、確しつりせぬかい、益ます々怪けしからぬ事ことを吐ぬかすぢやないか」

お菊きくは足音あしおとを忍しのばせ、聲こゑをしるべに、ついで來きた杖つゑで暗やみをポンと打うつた。都合つがふよく二人ふたりの頭あたまに橋はしをかけたやうに、カツンと當あたつた。二人ふたりは一度いちどに、

「アイタタタ、コラ初はつ、馬鹿ばかにすない」

「ナア二徳とくの奴やつ、人ひとの頭あたまをなぐりやがつて、馬鹿ばかも糞くそもあるかい」

「それでも貴様きさま、俺おれを撲なぐつたぢやないか」

「ナア二、俺おれやチツとも撲なぐつた覺おぼえがない」

「ホホホホ、同土打喧どうしうちげん嘩くわは面白おもしろい面白おもしろい、向むかふ見みずの途とちう中の鼻高はなだかが、暗雲やみくもで、欲よくばかり考かんがへ、吾程われほど偉えらい者ものはないと思おもうて慢心まんしん致いたすと、何時いつの間まにやら鼻はなが高たかう

なり、鼻はなと鼻はなとがつき合あうて、しまひには一いちも取とらず二にも取とらず、大騒動おほさわどうを起おこすぞよ。可哀相かあいさうな者ものであるぞよ。何なんと云いうても暗くらがりの人民じんみんを助たすけるのであるから、頭あたまの一ひとつや二ふたつは叩たたいてやらねば目めがさめぬぞよ。神かみも中々なかなか骨ほねが折をれるぞよ、早はやく改心かいしん致いたされよ。神かみの申まをす事ことを素直すなほに聞きく人民じんみんは結構けつこうなれど、今いまの世よはサツパリ鬼おにと賊ぞくと悪魔あくまとの世よの中なかであるから、神かみの教をしへを聞きく奴やつはチツともないぞよ。餘あまり改心かいしんが出来できぬと、スコタンくらふぞよ。』

と云いひながら、又またカツンとやつた。
初公はつこうは前額部ぜんがくぶをシタタカ打うたれ、

『アイタア』

と云いつたきり、すくんで了しまつた。徳とくは、

『何でも近ちかくに聲こゑがした、高姫たかひめの奴やつ、ここに居ゐやがるに違ちがひない……』

と四這よつばひになり、手てをふりまはして探さぐつてゐる。もし足あしにでもさはつた位くらゐなら、ひつくり返かへしてやらうと思おもつたからである。お菊きくは何なんだか自じ分の足許あしもとに這はふものがあるやうな氣きがしたので、杖つゑを以もつて力限ちからかぎり、足許あしもとを拂はらうた。途端とたんにただれた尻しりの

あたりをピシヤツと打った。

徳「アイタタ、コリヤ、尻叩きはモウすんだ筈だ。まだこんなとこまで来て叩く

といふ事があるかい」

お菊「約束の三百がまだ二百許り残つてゐるから、これから叩いてやるのだ」

徳「オイ初、氣をつけよ、馬鹿にするぢやないか……コラ高姫、空助、サア来い」

と暗がりに、どつちに敵が居るか分りもせぬのに、空元氣を出して氣張つてゐる。

お菊は杖を縦横無盡に打ちふり、二人の頭といはず尻といはず、手當り次第にポ

ンポンポンと撲り倒し、

「ホツホホホ」

と厭らしい笑ひを残し、森を立出で、息を殺して二人の様子を考へてゐた。

(大正一二・一・二七 舊一一・一二・一一 松村眞澄録)

お菊は夜明け間近くなつたので、餘り遠くもない小北山へ、一度歸つて見ようと思ひ、暗がり落ちてゐる石を二三十拾うて、ここらあたりと思ふ所へ、一つ二つ三つと數へながら投付けて、

「ああこれで文助さまの仕返しもしてやつた。何れ暗に鐵砲のやうな石玉だけれど、一つでも當れば尚面白いがなア」

と獨言を云ひながら、スバシこく歸つて了つた。二人は怪志の森でお菊の放つた礫に鼻を打たれ、額を打たれて、三日許りウンウン唸りつづけ、懐からパン片を出して飢を凌ぎ、漸く手足が動くやうになつたので、何處までも高姫、空助の在處を探ね、敵を打たねばおかぬと、杖を力に進み行く。

浮木の森の槻や樅、松の太木がコンモリとして廣く展開してゐるのが目につき出した。此邊一面は森の中も外も身を没する許りの萱がつまつてゐる。又篠竹や小竹の藪が彼方此方に散在してゐる。併しながらランチ將軍の軍隊が駐屯してゐただけあつて、可なり廣い道だけはいて居た。二人はチガチガ足をさせながらやつて來ると、椿の根元に高姫が泥まぶれになり、羽織を裏向けに着て、大きな

狸が二匹つき添ひ、椿の花をおとしては、甘さうに吸うてゐる。高姫は、竹切れの腐つたやうな穴のあいたのへ、草をむしつては入れ、馬糞をつかんで拵ぢ込み、一生懸命になつて、わき目もふらず、何かブツブツ言ひながら竹筒につめてゐる。

初「オイ、高姫が誑されてゐるぢやないか。あれみよ、大きな狸が二匹、椿の木をゆすつては花を吸うてゐるぢやないか。そこへ高姫の奴、着物を逆様に着やつて、ありや大方騙されてゐるのかも知れぬぞ」

徳「ホンニホンニ大きな狸だなア。暗がりには俺達の頭をはつて逃げやがった罰で、古狸にやられてゐるのだ。放つとけ放つとけ、いい見物だからなア」

二人は萱ン坊の中に身を隠し、高姫が、どんな事をするか、あの狸奴、どこへ行きやがるかと、目を放たず見てゐると、狸は椿の葉を口にくはへ、花を頭に被り、三つ四つ體を揺ると、十四五の何ともいへぬ美しい乙女になつて了つた。さうして高姫は二人の乙女に手を曳かれ、目をつぶつた儘、首を切りにふつて、或立派な火の見櫓の中に引張られて行くのであつた。之を見た兩人は、狸の化ける

のに上手じやうずなのを非常ひじやうに感心かんしんして、

初はつ「オイ徳とく、高姫たかひめの奴やつ、あの立派りつぱな火ひの見櫓みやぐらの中なかへ引張ひっぱられて行きよつたぢやないか」

徳とく「ウン、確たしかに行きよつた。併しかし狸たぬきの奴やつ、甘うまく化ばけるものだな。大方おほかた高姫たかひめは一人ひとりは空助もくすけ、一人ひとりは蝶いもり蛸わけくらゐ別位おもに思おもつてるか知しれぬぞ。一つひとつ後あとをつけて、高姫たかひめがどんな事ことをしられよるか、見みてやらうぢやないか」

「そら面白おもしろい、サア行ゆかう」

「そつと、足音あしおとのせぬやうにして行ゆかぬと、狸たぬきがカンづいたら駄目だめだぞ、静しづかに静しづかに」

と二人ふたりは差足さしあし拔足ぬきあししながら、火ひの見櫓みやぐらの側そばに立寄たちよつて、戸との節穴ふしあなから覗のぞいてみた。見みれば今いままで美人びじんに化ばけてゐた狸たぬきは、又またもや正體しやうたいを現あらはし、高姫たかひめに泥どろを掴つかんでか
けたり、木きの葉はを引ひつたり、いろいろとしてゐる。しまひには萱かやの刈かつた奴やつを
ドツサリ抱かかへて來きて、高姫たかひめの身からだ體たいを包つつんで、一度いちどにドツと火ひをつけた。高姫たかひめは火くわ
焰えんの中なかに包つつまれて、苦くるしさうな聲こゑを出だし、

「助けてくれい、助けてくれい」

と唖鳴つてゐる。かうなつて來ると、何程憎い高姫でも、人情として助けねばならぬ。高姫を救ひ出し、二匹のド狸を捕りくれむと、戸を蹴破り、矢庭に飛込んだと思へば、二人は糞壺の中におち込み、頭から黄金を浴びて、山吹色の活佛となつて了つた。

初「エー、クソいまいましい、狸の奴、こんな所へ落しやがったぢやないか。オイ徳、ここらで清水が湧いてをつたら、トツクリと洗うて、眉毛に唾をつけ、此憎くき狸を平げようぢやないか」

徳「さうだ、馬鹿にしてけつかる、これでは何うも臭くて仕方がない。いい水が湧いとらぬものかなア。マア兔も角、あの椿の木の下あたり、行つて見ようぢやないか。キツと椿の木のある所にや溜池のあるものだ。」

井底より上におち來る椿かな

と云つてな、椿の花が上から落ちるのが、水に映つて、池の底から上へ落ちて來るやうに見えるものだ。俺も一つ井戸をみつけて、下か上へ、椿ぢやないが、ドブンと落ちこみ、肉體の洗濯をして、それから出かけよう。赤裸では困るから、暫く、乾くまで、此馬場で相撲でも取つて居らなくちや、寒くて辛抱が出来ぬぢやないか、ヤ、案の條泉水があるぞ」

と、今度は小便壺へ糞まぶれの着物ぐち飛込み、バサバサと振り落し、漸く這ひ上り、兩人はクルクルと赤裸となつて、石の上に着物をおいて、捻ぢたり、踏んだり、壓搾したりして、漸く水氣を落し、傍の木の枝に引懸け、それから四股をふんで、一生懸命に萱の中で相撲を取つてゐる。妖幻坊の眷族、幻相坊、幻魔坊を始めとし、澤山の古狸や豆狸が幾百千とも分らぬ程、四邊を取巻いて、二人の相撲見物をやつてゐる。そこへ宣傳歌を歌ひながらやつて來たのは、ランチ將軍に仕へてゐたケースであつた。ケースは……大變な大相撲が廣い馬場に始まつてゐるなア、なんと澤山の見物だ、俺も餘り急ぐ旅ぢやないから、一つ見物して行かうか、口八の相撲なら安いものだ……と蓑笠を脱ぎすて、金剛杖にもたれて、澤

山な見物の後の方から伸び上つて、口をあけ「ワハハハワハハハ」と笑ひ興じてゐた。立變り入變り、古狸が初公、徳公を相手に相撲を取つてゐる。けれども初徳は言ふに及ばず、ケースの目にも人間とより見えなかつた。ケースは俄にどの力士も取口が下手なのに、劫が湧いて堪らず……俺も一つ飛入りでやつてやらう……と早くも着物をそこに脱ぎ棄て、禪をしめ直し、土俵の側に飛出し、ドンドンと四股を踏み鳴らしてゐる。數多の見物は手を叩いて「ワアワア」とぞめいてゐる。ケースは俺が今出たので、何といふ立派な體格だ、彼奴が出たら、此相撲も活氣がつくだらうと思つて、田舎者の見物が騒いでゐやがるのだな、ヨーシ、日の下開山横綱のケースが力量をみせてやらう。東から出ようか、西から出ようか……待てよ、東は智慧證覺の優れた者の居る所だ。さうすると、ヤツパリ俺は東の大關と惟神的にきまつてゐる……と獨言云ひながら、東の土俵にドスンと腰をおろし、横綱氣取で狸の相撲を「アハハハアハハハ」と笑ひながら見てゐる。春とはいふものの、まだ何處ともなしに寒くて仕方がない。一つ相撲でも取組まなくては體温を保つ事が出来ぬ。ぢやと云つて、何うやら三番勝負になつたらし

い。さうすると此大關も順が廻つて來るのは日の暮だらう。三役が今頃から裸になつて居つても詰らない。今の内に着物を着て、俺の番が來るまで待たうかな、併しながら一旦大勢の中で赤裸になつたのだから、後へ引返して着物を着て來るのも、力士の體面を恥しめるやうなものだ。ナア二構ふものか、ここが辛抱だ……と我慢してみたが、體一面に寒疣が出てガタガタ慄うて來る。「此奴ア四股をふみ、體中に力を入れるに限る」と一生懸命に腕を固めドンドンと四股ばかり踏んでゐる。漸く汗がタラタラ流れ出した。併し今の中にこれだけ力を出して了つたら、肝腎の俺の番になつた時は、モウ力の品切れになるかも知れぬぞ。マア暫く休養しようかなア……とドスンと東の力士の席に坐り込んだ。さうすると行司が唐團扇を持つてやつて來た。

「モシ貴方は飛び入りでムいますか」

「ウン、飛込だ」

「何と云ふお力士さまでムいます」

「俺は日の下開山、野見の宿禰の再來、摩利支天の兄弟分、谷風、小野川、稻川、

雷電爲右衛門、出羽の海軍梅ヶ谷、大錦の丈常陸山勝右衛門だ。體量はウソ八百八十貫八百八十匁、如何なる者なりとも、此方の禪に手をかけた者は、ルーブル紙幣百圓を褒美として遣はす」

「ヤア、それは随分偉い力士が来て下さったものです。勸進元もさぞ満足致しませう。併しながら、それ程お強いお方にはお相手がムいますまい。誰とお相撲をお取りなさいますか」

「八八八誰でもよい。山門の仁王を呼出し、それに靈を吹きかけて、活躍させても苦しくない。それでゆかねば、ゴライヤス、五大力、まだ足らねば、當麻蹴速、それで行かねば、八岐の大蛇に金毛九尾、妖幻坊、誰でもよいから、強いと名のついた奴には相手になつて遣はす」

「前以て貴方のやうな力士がお出でになるといふ事が分れば、相手方を願つておのうでしたが、餘り俄の事で、一寸困ります。エー此相撲は晴天十日續くのムいまずから、今日はお控へを願つて、明日か明後日あたり、堂々と土俵に上つて貰ふ譯には参りますまいかな」

「折角裸になつたのだ。武士が刀を抜いたら、キツト血を見なくちやをさまらぬと同様に、力士が裸になつた以上は、せめて一番なりと組合はなくては、此儘に下る譯には参り申さぬ。孫悟空でも金角坊でも銀角坊でもよいから、一寸臨時傭うて来てくれないか」

「ハイ、それなら直様、飛行機を以て、金角坊さまを願つて参りませう」

「エー、凡そ時間は幾ら程かかるかな。餘り遅くなると、こつちも困るのだが」

「ハイ半時許りお待ちを願ひます。さうすれば假令一萬里あらうとも、魔法を以て呼寄せます」

「ソリヤどうも有難い、早く頼むぞ。イヤア、腕がなる、此腕の持つて行きどころがないと思つて居つたに、マアこれで俺の男が立つといふものだ。如何に金角坊魔術を使ふとも神力があるとも、此ケース横綱の腕つ節を以て、只一突に土俵の外へ、蛙をブツけたやうに投出し、忽ち大の字を地上に描く大曲藝、此中には随分美人も澤山居る。キツト俺の力量を見たならば惚れるだらう……相撲取を男にもち、江戸長崎國々へ行かんしやんした其後で、夫に怪我のないやうと、妙見

様へ精進を……なんて、ぬかすナイスが一ダースや二ダース飛び出すに違ひない。さうすりや俺もチツと困らぬでもないが、其中から互選をさして、最高點者を女房にするのだなア。其上堂々と祠の森を越え、齋苑の館へ、日の下開山の御參拜だ。まだ齋苑の館へは、澤山人は參詣するけれど、日の下開山横綱の力士が參るのは初めてだらう、エへへへへ、面白うなつて來たぞよ、オホホホホ
とシクシク原に尻を下し、得意になつて、一人笑壺に入つてゐる。立ちかはり入りかはり、幾十組ともなく、瘦せた力士や腹ばかり大きな不恰好な奴が土俵に現はれては、脆くも倒れる可笑しさ。初、徳の二人は尻を紫色に腫らかした儘、かはるがはる土俵へ上つては取組んでゐる。ケースは……
「あの尻の黒い男、消してもないのに、何遍でも出やがる。其癖餘り強い力士ではない。此奴ア怪しからぬ、一行司に掛合つて見ようかなア……オイオイ行司、一寸尋ねたい事がある。あの尻の紫とも墨とも分らぬやうな力士、二人に限つて何遍でも取つ組み合せをするぢやないか、あら何うしたものだ。俺だとして彼奴が出られるならば、出られない筈がないぢやないか」

「ハイ、あの方は相撲氣違ですから、特別に許してあるのですよ。年寄連中も、彼奴は此土地切つての顔役でもあり、力強でもあるから、言ふ通りしておかねば、後が面倒いといふので、相撲道の規則には反きますが、これも地方の状況によつて、止むを得ず取らして居ります。随分強い男でせうがな」

「ウン、相當に強いな、併し外の奴が弱いから強く見えるのだ」

「貴方とはどんなものでせうな」

「さうだ、到底相撲にならぬワイ。併しながら、俺も斯うチヨコナンと、見役ばかりしてゐるのも手持無沙汰だから、頼みとあれば、彼奴二人を向ふへ廻し、取つてみてもいい」

「ああ左様でムいますか。それなら、一つ年寄と相談を致します。一寸待つてみて下さいませ」

と行司は頭取の席に走り行き、何だかブシヤ ブシヤと話をし、又東の席へ飛んで来て、頭取や年寄と囁き、ケースの前に現はれ、

「ヤ、エー、頭取や年寄衆が賛成です。何卒一つ取組んでみて下さい。そして貴

方のお名乗は餘りお長いやうですが、何とか簡単なお名をつけて頂きませぬかな

「摩利支天でも仁王ヶ嶽、ゴライアスでもいいぢやないか」

「それなら貴方は浮木の森と云ふ名を付けたらどうでせう」

「ウン、そら結構だ、どうぞ頼むよ」

「ハイ」

と行司は答へて、土俵に上り、唐團扇をふつて、

「東イ浮木の森、西イ負田山竝に轉田山ツ、二人一度に日の下開山、浮木の森に

消しがり」

見物は雨霰の如くピシヤ　ピシヤ　ピシヤと手を拍ち、各自に狸の腹鼓をうつ

て、ワアワアと喚き立てた。初、徳の兩人は、

「ヤア面白い、新手が来よつた、俺達兩人は彼奴を十六俵の土俵の外へ投出し、

大喝采を受けねばなるまい。馬鹿らしい、二人も一緒にかかるのは、一人に限る

よ」

と囁きながら、土俵に上る。先づ初公は西方に現はれ、四股踏みならし、砂を手

に掬うて體にぬりつけ、兩方から猫の狙ふやうな調子で呼吸をはかつてゐる。行司は「ヤツ」と團扇をひいた。ペタペタペタと四つに組んだが、何だか負田山の體がヌルヌルしてゐて臭くて堪らない。されど大法螺を吹いた手前、此奴を倒さねば男が立たぬと、ケースは一生命に押しに行く。糞まぶれの一方の體はヌルヌルと鱧の如く鰻のやうに迂る所へ、スカシをくつて、土俵の中央へ、うつ向けに倒れ、口に砂を一杯頬張り、齒から血が滲み出した。行司は團扇を西の方へ上げた。見物は一度にワイワイと喚く。ケースはむかつて堪らず、死物狂となつて、四本柱を引抜き、縦横無盡に負田山、轉田山の二人に向つて打ちかかる。二人も亦同じく柱を引抜き、前後左右に荒れ狂ひ、遂には力盡きて三人其場にドツと倒れて了つた。彼方にも此方にもポンポンと鼓の聲、これは澤山の豆狸が腹鼓を打つて笑ひながら、各古巢へ歸り行く聲であつた。

(大正一二・一・二七 舊一一・一二・一一 松村眞澄録)

第一八章 糞奴使（一三三三三）

『ぶんめいのはなひらくさんせんこく
文明花發三千國』

道術元通九萬天。

時節花明三月雨

風流酒洗百年塵。

默然坐通古今

天地人共進退。

片々靈碁一局

家々燈天下花。

北玄武從亥去

東青龍自子來。

去者去來者來

有限時萬邦春』

と救世教主の詠んだ詩を吟じながら朧月夜の光を浴びて、草鞋脚絆に身を固め、
蓑笠金剛杖の扮装にてやつて来たのは、ランチ將軍の副官たりしガリヤであつた。
道の傍に新しき墓が澤山に竝んである。ガリヤは陣中に於て浮木の森のマリイと
云ふ妙齡の美人に慕はれ、滞陣中は間がな隙がな密會を續けて居た。マリイとの
關係がついたのは、ランチ將軍が命令を下して、四邊の女は老幼の區別なく残ら
ず引捕へて陣中に連れ行き、炊事其外の軍務に就かしめむためであつた。此時ガ
リヤは其役目に當つて、マリイの家にふみ込み來り老人夫婦に、
「此村の女は残らず軍務に徴集さるべし。就いては炊事のみならず、數多の猛惡
なる兵士に凌辱を受くる惧あれば、今宵の中に女は残らず逃げ去れ」
と親切に云つて呉れた。マリイの父は此村の里庄であつた。直ちに村に其由を内
通し、勝手覚えし山道を辿り、或は小北山又は思ひ思ひにパンを負うて山林に身
を隠したのである。マリイは、ガリヤの親切な計らひによつて、村中の女は危難
を救はれたのだ、自分は、

「村中の女を代表し人身御供に上つても構はぬ。況んやバラモンの軍人とは云へ、

之位^{これくひ}やさしき武士^{ぶし}が何處^{どこ}にあらうか。自分^{じぶん}も夫^{をと}を持つならば斯様^{かやう}な武士^{ぶし}と添^そひ度^たいものだ………^〇

と妙^{めう}な處^{ところ}へ同情^{どうじやう}を起^{おこ}し、早^{はや}くバラモン軍^{ぐん}が自分^{じぶん}を捕縛^{ほぼく}に來^きてくれまいかと、兩親^{りやうしん}の止^とめるのも諾^きかず只^{ただ}一人家^{ひとりいへ}に待^まつてゐたのである。そして幸^{さい}ひに此^{この}マリイの家^{いへ}はガリヤの宿所^{しゆくしよ}と定^{さだ}められたのである。ガリヤは他^たの同僚^{どうれう}が一人^{ひとり}も女^{をんな}を連^つれてゐないのに、自分^{じぶん}のみ女^{をんな}を侍^{はべ}らして居^をつては將軍^{しやうぐん}の手前^{てまへ}は如何^{いかが}と氣遣^{きづか}ひ、倉^{くら}の中に忍^{しの}ばせて隙^{すき}ある毎^{ごと}に密會^{みつくわい}を續^{つづ}けてゐたのである。然^{しか}るにマリイは身體^{しんたい}日に日^ひに瘦^{やせ}衰^{とろ}へ、遂^{つひ}には鬼籍^{きせき}に入^いつた。そこでガリヤは夜密^{よるひそ}かにマリイの死骸^{しがい}を此墓所^{このはかしよ}に葬^{はつむ}り、目標^{もくへう}を建^たてて置^おいたのである。俄^{にはか}に適當^{てきたう}な目標^{もくへう}もないので外^{ほか}の墓^{はか}の石^{いし}を逆様^{さかさま}に立^たて、何時^{いつ}か時^{とき}を見^みて立派^{りつぱ}に祀^{まつ}つてやらうと思^{おも}つてゐる矢先^{やさき}、治國^{はるくにわけ}別に歸順^{きじゆん}したのである。ガリヤはクルスの森^{もり}で百日^{ひやくにち}の薰陶^{くんたう}を受け、それよりテームス峠^{たうげ}に於^{おい}て、又^{また}もや第二回^{だいにくわい}の薰陶^{くんたう}を授^{さづ}かり、治國^{はるくにわけ}別の添書^{てんしよ}を得^えて、ケースと共に齋苑^{いそ}の館^{やかた}へ修業^{しゆげふ}に行く途^{とちう}中^{ちゆう}であつた。彼^{かれ}は一度^{いちど}マリイの墓^{はか}に詣^{まゐ}り弔^{とむら}つてやらねばならぬ、それにはケースと同道^{どうだう}しては都合^{つがふ}が悪^{わる}いと思^{おも}つたので、

□ 一寸其邊まで芋を埋けに行つて来る、君は一足先へ行つてくれ、何れ浮木の森で追付くから……□

とうまくケースをまいて自分は谷川に入り、水をいぢり或は蟹を追ひかけ等して日を暮し、東の空からボンヤリとした月の出たのを幸ひ、此處までやつて来たのである。ガリヤはマリーの墓に近づき、涙ながら述懐して云ふ。

□ 水色の月光は流れ

眞青に墓は並び立つ

ああされどマリーの君よ

君は情焰の人魚に非ず

死を願ひつつ墓を抱き

吾を見捨てて遠く行きましぬ

後に残りし吾身は

潜々と涙を濺ぐ

君きみの心こころの紅絹こうけんは

ガリヤの心こころを巡めぐり

やがて桃色ももいろの雰圍氣ふんゐきは

あたりを包つつむ

されど青あをき墓はかは

地ちに影かげさへも動うごかさず

君きみの姿すがたのみ幻まぼろしの如ごとく月つきにふるひぬ

ああ花はなは半開はんかいにして散ちりぬ

惜をしむべきかな桃色ももいろの頬ほほ

月つきの眉まゆ、雪ゆきの肌はだ

一度見みまく欲ほりすれど

一度君きみに會あはまく欲ほりすれど

今は詮せんなし諸行無常しよぎやうむじやう

是ぜ生滅しやうめつ法ぽう生滅しやうめつ々つち已

寂滅爲樂頓生菩提と

弔ふ吾を

仇には棄てな桃色の君よ

と慨歎久しうし、形ばかりの墓場に涙を濺ぎ、残り惜しげに墓場を辭し、又もや
宣傳歌を歌ひながら、風薫る朧夜の月を浴びて進み行く。

四方の山々春めきて

吹き來る風も暖かく

今を盛りと咲き匂ふ

マリーに似たる桃の花

三月三日の今日の宵

瑞の御靈の御教を

頸に受けてトボトボと

天津御空に照りもせず

曇りもやらぬ春の夜の

朧月夜の風光に

如くものなしと誰が言うた
吾は心もかき曇り

朧の月を眺むれば
千々に物こそ思はるれ

嘆ち顔なる吾涙 乾く暇なき夜の旅

定めなき世と云ひながら 花を欺くマリー嬢

吾を見捨てて墓を越え 幽冥界に旅立ちぬ

悔めど歸らぬ戀の仲 神や佛は坐さぬかと

思はず知らず愚癡が出る 汝をば慕ふ吾心

仇に聞くなよマリー嬢 向ふに見ゆるは浮木の里か

印象益々深くして 戀に道ふ益良夫の

心の空は烏羽玉の 暗夜とこそはなりにけり

ああ惟神々々 御靈幸はひましまして

惑ひ來りし戀雲を 晴らさせ給へ三五の

皇大神の御前に 謹み敬ひ祈ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

大地は假令沈むとも 星は空より落つるとも

神に任せし此體 三五教の御爲に

盡つくさにや置おかぬ益ます良夫らの　　ひきて返かへらぬ桑くはの弓ゆみ
彌や猛たけ心こころを何處どこまでも　　貫つらぬき通とほす神かみの道みち
進すすませ給たまへ惟神かむながら　　神かみの御前みまへに願ねぎまつる』

と歌うたひながら椿つばきの花はな咲さく木蔭こかげまでスタスタやつて來きた。

ガリヤは椿つばきの下もとの天然てんねんの石いしのベンチに腰こしを打掛うちかけ、火打ひうちを取出とりだし煙草たばこを熏くすべながら、浮木うきぎの森もりの彼方あなたを眺ながめ感慨無量かんがいむりやうの息いきを洩もらしてゐる。

『有為うゐて轉變んぺんは世よの習ならひ、變かはれば變かはるものだな。僅わづか四ヶ月しかげつ以前いぜんにはバラツク式しきの陣營ぢんえいが澤山たくさんに建て並ならべられてあつたが、何時いつの間まにやら、大なる城廓じやうくわくが建たつてゐるやうだ。はて、何人なんびとの住宅すまゐであらうか。合點がてんの行ゆかぬ事ことだな』

と獨語ひとりごとちつつ目めをつぶつて考かんがへ込こんでゐる。何だか間近まぢかの方ほうから人聲ひとこゑが聞きえて來くる。ガリヤはツと立たつて人聲ひとこゑを當あてに月つきに透すかしながら探さぐり寄よつた。見みれば三人さんにんの男おとこが萱かやの茂しげつた中なかに眞裸まっぱだかとなつて四這よつぱひとなり、思おもひ思おもひの事ことを囀さへつつてゐる。

『はて不思議ふしぎだ。春はるとは云いへど夜分やぶんはまだ寒さむい。それに何ぞや、斯様かやうな萱草かやくさの中なか

に荒男が而も三人、何をして居るのだらう。八八ア大方、浮木の森の豆狸につま
まれよつたのだらう。一つ氣をつけてやらねばなるまい」

と思つたが、又思ひ直して、

「待て待て彼等三人の言ひ草を聞いてから、何者だと云ふ事の、凡その見當をつ
けてからでなくては、如何なる災難に遇ふかも知れない。まづ凡ての掛合は相手
を知るが第一だ」

と思ひ直して杖にもたれて覗く様にして考へ込んでみた。

裸の一「おい、轉田山、あの摩利支天と云ふ奴、口ほどにない弱味嚙だな。俺の

反にかかりやがつて、土俵のド中央にふん伸びた時の態と云つたらなかつたぢや

ないか」

裸の二「貴様は負田山だと名乗つてゐるが妙に強かつたぢやないか。大方向ふが

力負したのかも知れないのう」

「馬鹿云へ。俺が強うて向ふが弱かつたのだ。弱いものが負けると云ふのは何萬
年経つたつてきまつた規則だ。然し、彼奴は吃驚しやがつて雲を霞と逃げたぢや

ないか」

「ナ―ニ、そこに居るぢやないか。アー、臭い臭い貴様、屁を垂れやがったな。

俄に臭くなりやがったぞ」

「馬鹿云へ、貴様も臭いわ。最前から何だか臭いと思つたが、よう考へりや相撲

に呆けて忘れて居たが、古狸に撮まれて糞壺へ貴様と俺とが落ち込み、椿の下の

泉で衣服を洗ひ、木に掛けて乾かす間に、寒さ凌ぎに相撲を始めたぢやなかつた

かね」

「ウン、さう云ふと、そんな氣も……する様だ。此體が臭いのは洗ひが足らな

つたのに違ひないぞ。何程雑兵だと云つても、こんなに臭い筈はないからな」

裸の三「こりや、二人の奴、貴様は狸に騙されよつたのだな。馬鹿だな」

裸の一「アハハハハ、あれ程澤山の相撲取や見物が来て居つたのは皆狸だ。オ

イ何處の奴か知らぬが、弱相撲、貴様だつてヤツパリ騙されて居つたのだよ」

裸の三「馬鹿云へ。俺は貴様と相撲とつたのだ。貴様こそ狸を相手に挑み合つて

あつたのだよ。あれほど澤山居つたが、人間はただの三人より居なかつたと見える。

本當に馬鹿の寄合ひだな。オイ、貴様の本名は何と云ふのか。負田山、轉田山では、テインと分らぬぢやないか」

「俺の本名が聞きたくば、貴様から名告れ、そしたら云ひ聞かしてやらう」

「俺の名を聞いて驚くな。バラモン軍のランチ將軍が副官ケースの君だぞ」

「何だ、そんな肩書をふり廻したつて今時通用しないぞ。某こそは三五教の未來の宣傳使初公別命だ。もう一人は徳公別命だぞ」

ケース「お名を承はりましたして初めて呆れ返りました。如何にも下賤愚劣のお方で
ムるな」

初「きまつたことだ。神變不思議の力を有する、何うしても解せぬ男だらう。酒を飲めば「グレッツ」く事は天下の名人だ。小北山の初公と云ふより下賤愚劣と云つた方が、よく通つてるからな、アハハハハ」

ガリヤは、

「ハハア、ケースの奴、狸にチヨロまかされ相撲とりよつたのだな。そして糞壺へはまつた奴と取組みよつたと見える。何だか臭くなつて來たぞ。一つ大聲を出

して嘔鳴り、眼を醒してやらなくちや駄目だ

と云ひながら臍下丹田に息をつめ（大聲）「ウー」と發聲した。三人は猛獸の襲來かと早合點し、赤裸の儘ノタノタと這ひ出し、何れも云ひ合した様に椿の根元に集つて了つた。

ガリヤ「オイ、お前はケースぢやないか。拙者はガリヤだ。何だ、こんな處へ赤裸になりよつて……」

ケース「ウン、兄貴か、もう一足早く來ればよかつたにな。大變狸相撲がはづん

でゐたよ、アハハハハ」

初「エへへへへ」

徳「臭い臭い臭い、ウツフフフ、糞面白うもない。糞にされて了つた」

ケース「揃ひも揃つて臭い野郎だな」

ガリヤ「アハハハハ、ああもう夜が明けた」

三人は泥まぶれの顔をして其處等を見まはした。糞まぶれの着物は異様の臭氣を放ち、傍の青木の枝に烏の死んだのを水に漬けた様な形になつてブラ下つて居

る。椿つばきの下の清泉せいせんは……と覗のぞいて見れば臭氣しゅうき紛々ふんぶんたる肥壺こえつぼであつた。金色こんじきの蠅はいがブンブンと四人よにんの顔かほを目標めあてに襲撃しふげきし、目めをせせつたり鼻はなの穴あなへ潜伏せんぷくしたり、口くちの角かどなどを頻しきりにいぢり出した。

「此奴こいつア堪たまらぬ」

とガリヤ及び三人さんにんの裸はだかは一生懸命いっしやうけんめいに北きたへ北きたへと逃にげて行く。

(大正一二・一・二七 舊一・一・一二・一一 北村隆光録)

第十九章 偽強心ぎきやうしん (一三三四)

ガリヤはケースに、

「どこで着物きものを脱ぬいだか」

と尋たづねて見みた。ケースは、

「あまり相撲すまうに呆はうけてゐたので、脱ぬぎ場所ばしよを忘わすれた。大方狸おほかたたぬきの野郎やらうくはへて去いん

だのだらう」

と答へた。

「それでも何處かにあるだらう」

と一生懸命探して見たが、杖が一本あるばかりで着物らしいものはない。

ケース「此奴狸の奴、敷物にしようと思つて、狸穴へくはへて行きよつたのだな

ア。えー残念だ」

と齒ぎしりしながら北へ北へと進んで行つた。丁度一間巾ばかりの青藻を被つた

川流れがある。そして深さは四寸位平均になつてゐる。三人は交代に川に横たは

り、水を淀めて川端の草を千切り、手拭に代用して體中を擦り、臭氣を漸くにし

て洗ひ落した。

ケース「さア、之で裸百貫だ。人間はここ迄落ちぶれなくちや力が分らない。之

から一日々々暖かくなるのだから裸でも結構だ。おい初公別、徳公別、急いで齋

苑の館へ参る事にしよう」

初「おい徳、小北山へ寄れば、古着の一枚位は何とか云つて貰へるだらうけれど、

一寸義理の悪い事がしてあるので、こんな時には立寄る譯にも行かぬわ。ああ困ったな

と手を組んで思案をしてゐる。何處ともなくフワリフワリと笠に蓑、衣類などが三人前降つて来た。三人は手早く拾ひとり、よくよく見れば自分の着物だ。そして何時の間にか、カラカラに乾き、何程嗅いで見ても臭氣は除いてゐる。そして強い糊をしたものがパチパチに固くなつてゐる。

初「ハハア、狸の奴、神様に叱られよつて到頭洗濯をやりよつたのだな。もう徳、これだから信仰はやめられぬのだ」

徳は嬉し涙を零し兩手を合せて、

「惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世」

と感謝してゐる。然し其實は菰の半腐つたのが立派な衣服に見えてゐたのである。三人は嬉しさうにチャンと着替へ、

「さア、之で大丈夫だ。愈齋苑の館へ行かう」

初、徳兩人は慌てて引き留め、

初はつ「もしもし、貴方あなた、一寸待ちよつとつて下さい。三五教あななひけうの強敵きやうてきがこの近邊きんぺんに隠かくれてゐるに違ちがひありませんから、一遍いっぺん其奴そいつを平たいひらげておいでになつたら如何どうです。貴方等あなたらもよい土産みやげになりますよ」

ガリヤ「三五教あななひけうの強敵きやうてきとは誰たれの事ことですか」

「齋苑いその館やかたの總務そうむをやつて居をつた時置師神ときおかしのかみの空助もくすけと宣傳使せんでんしの高姫たかひめと云いふ奴やつです。彼奴あいつ、此頃このころ大變たいへんな謀叛むほんを起おこして居をりますよ」

「治國別はるくにわけの先生せんせいから承うけたまはれば、高姫たかひめさまは何どうも怪あやしいが、空助もくすけさまは三五教あななひけうの柱石ちうせきだと聞きいてゐたのに、それは又また妙めうな事ことを承うけたまはるものだな」

「それが猫ねこを被かぶつてゐるのですよ。祠ほこらの森もりの聖場せいぢやうを占領せんりやうせむとして尻尾しつぽを出だし、高たか姫ひめと夫婦ふうふとなつて小北山こぎたやまへ逃にげ來きたり、小北山こぎたやまの聖場せいぢやうで又またもや謀叛むほんを企たくみ、神力しんりきにうたれて逃にげ出し齋苑いその館やかたの御寶物ごほうもつ、金剛不壞こんがうぶゑの如意寶珠にょいほうしゆを奪うばひ取とつて逃にげて來きよつたのです。何どうしてもあの寶たからを取返とりかへさなくては、三五教あななひけうも玉たまぬけですからな」

ケース「何なに、そんな事ことがあつたのか。何どうも人間にんげんと云いふものは分わからぬものだな。ガリヤさま、こいつは一つ聞きき棄すてにはなりませんぞ。此この兩人りやうにんを案内者あんないしやとして、

何處どこに居をらうとも彼奴きやつの在處あつかを索もとめ、その寶たからを奪うばひ返かへして行ゆかなくては吾々われわれの役やくが濟すみますまい』

ガリヤ『そりや、さうです。おい御兩君ごりやうくん、その空助もくすけ、高姫たかひめは何方どちらへ行いつたかな』
徳とく『怪志あやしの森もりから此方こちつへスタスタと二三日前にさんにちまへに走はしつて來きよつたのです。此處ここは一筋街道すぢみちだから、貴方あなた怪あやしいものに出會であひませぬか。五十位ごじふくらゐな女をんなと同年輩どうねんばいの大男おほをとこと二人ふたりですよ』

ケース『ガリヤさま、根ねつから、そんなものに出會であひませぬな。さうすると此浮このうき木の森もりの奥おくの方ほうの小山こやまにでも隠かくれてゐるのかも知しれませぬぜ。兔とも角かく吾々われわれは一生いっしやう懸命けんめいに探さがさうぢやありませぬか』

ガリヤ『承知しやうちしました。初はつさま、徳とくさま、さア之これから此萱野ヶ原このかやのがはらを探さがして見みませう。吾々われわれの聲こゑを聞きいて恐おそれをなし、潛伏せんぷくしてるかも知しれませぬよ。然しかし之これだけ廣ひろい原野げんやなり、萱かやも伸のびてゐるから、互たがひに連絡れんらくを圖はかつて、五間ごけん以上いじやう離はなれない様やうにして探さがませう』

『ハイ、宜よろしからう』

と評議一決し、萱草の生え茂つたのを小口おしに探しつつ、奥へ奥へと進み入つた。

後の方から、

「オーイ オーイ」

と甲聲を出して招くものがある。四人は後振り返り見れば、一人は十二三、一人は十六七の綺麗な娘が一生懸命に道傍の高い石の上から差招いてゐる。初公は耳を傾け、

「やアあの聲はお千代さまにお菊さまだ。こりや何か變つた事が出来たに違ひない。おい徳、一先づ後へ歸らう。もし御兩人、御苦勞だが暫く後へ引返して下さるまいか」

「何は兔もあれ引返しませう」

とケース、ガリヤは二人の後について、少女の立つてる岩の前まで漸く歸つて來た。

初「お前はお千代さまに、お菊さまぢやないか。俺を呼び止めたのは何か急用で

も出來たのか」

千代「別に急用でもありませんが、高姫、空助の兩人が此浮木の森にあの通り立派な陣屋を構へ、魔法を使うて俄に城廓を造り、町まで拵へて三五教の信者を小口から引張り込みますので、松姫さまが高姫、空助を説き諭さうと云つてお出になりました。私も跟いて行つたのだが、忽ち松姫様を牢の中へぶち込んで了ひました。私は裏口から脱け出して此處まで逃げて來たのですよ。初さま、徳さま、何卒松姫さまを助けに行つて貰ふ譯には行きませぬだらうかな」

「オイ、徳、如何しよう」

「さうだなア、松姫がさうなれば、一層の事俺達は後へ歸つて小北山で頑張らうぢやないか」

「そんな無茶な事が出来るかい。何とかして松姫さまをお助け申し、今までの御無禮をお詫して、もとの通り使つて貰はうぢやないか。これがお詫のよい仕時だガリヤ」
「これこれ娘さま、松姫さまと云ふのはお前の先生かな」
お菊「ハイ、小北山の教主で松彦さまと云ふ立派な夫があるのよ」

「ヤア、そりや如何してもお助け申さなくちやなるまい。松彦さまには大變なお世話になつたのだからな。さア行かう、ケース」

「ヤア面白い面白い、浮木の森は私は勝手を知つてるのだ。牢の在處も何も彼も手にとる如くだから、さア一働きやらう」

千代「何卒お母さまを助けて下さいませ。妾が案内を致します」

ケース「ハ、宜しい宜しい、心配しなされるな。お前は泣いてゐるぢやないか。ヤ、無理もない、お母さまがそんな目に遇つたのだからな。然し吾々が駆け込む上は大丈夫だから、心配なされるな。さア初さま、徳さま、行かうぢやないか」

「賛成々々」

ここに四人の男と二人の女は、浮木の森の曲輪城の表門をさして足を早めて進み行く。大門口に進めば、向ふより綾錦を纏うた妙齡の美人が七八人、手に籠を持ちながら、董を摘み蒲公英をむしりつつ、何事か嬉しげに囁きながらやつて来た。其華やかさ、淑やかさに四人の男は魂を宙に飛ばして見惚れて居る。

(大正一二・一・二七 舊一一・一二・一一 北村隆光録)

第二〇章 狸姫（一三三五）

ガリヤ、ケース他四人は大門を潜つた。さうして天女のやうな八人の美人の姿に見惚れて居た。その中で一番年かさと思しき女、揉み手をしながら言葉優しく、
「これはこれは三五教の宣傳使様、ようこそお出で下さいました。妾は如意王の娘初花姫と申します」

ガリヤ「イヤ吾々は宣傳使ではムいませぬ。これより齋苑の館に修業に参り、旨く合格すれば初めて宣傳使になるのでムいます。さうして私が三五教だと云ふ事は、どうしてお分りになりましたか」

「ハイ、四ヶ月以前より月の國コーラン國から此處まで國替を致しまして、俄造りの城廓を拵へ住まつて居ります。今まではウラル教でムいましたが、バラモン教に追立てられ此方に参りました所、三五教の宣傳使初稚姫様がお出になり、いろいろと御教訓下さいましたので、兩親は直ちに三五教に歸順し、今は熱心な信者でムいます。さうして初稚姫様が奥殿にお留まりになり、結構なお話を聞かし

て下さるのだから、城内一般の喜びは譬がたない程でムいます。さうして初稚姫様のお言葉には、三五教の方が三四人見えると云ふ事でムいましたから、侍女を連れ、此處までお迎へ旁遊びながら参りました。サア御遠慮はいりませぬ、何卒お通り下さいませ」

「ヤアそれは願うてもない事でムる。初稚姫様は既に宣傳の途に上られ、齋苑の館へ参つても到底御面會は叶ふまいと覺悟をして居ました。此處で御目に懸れるとは全く神様の御引き合せ、イヤ是非ともお世話に預かりませう」

ケース「吾々兩人は四ヶ月前まで、バラモン軍の棟梁ランチ將軍の副官を致して居りましたガリヤ、ケースでムります。何時の間にか立派な建築が出来たぢやありませんか」

「晝夜兼行で數萬の人力夫を使役し、やつと此頃出来上つた所です。御覽の通りまだ壁も乾いて居りませぬ」

「成程さう承はれば、どこともなしに生々しいやうな氣分がする。併しながら昨冬此處に陣取つて居た事を思へば、木の芽はめぐみ、草は萌え、まるで地獄から

天國へ行つたやうな氣が致しますてんごく いく

「サア皆さま、私が御案内致しますみな わたし ごあんないませう」

初はつ「もし姫様、折角機嫌よくお遊びの途中になつては濟みませぬ。放つて置いて下くださいませ。併しかし一寸物をお尋ね致しますが、このお館には高姫、空助と云ふ兩人が大將となつて頑張つて居ると聞きましたが、如何でいかがムいませうか」

「ハイ、空助様と高姫様がお越しになり、ウライナイ教とやらを非常にお説きになつて居ます。初稚姫様のお話を聞いて、次に御兩人のお話を聞きますと、それはそれは詳しく分ります。つまり初稚姫様は、ほんの概略を仰有るなり、空助、高姫様は噛んで含めるやうに細かう説いて聞かして下さるので、どちらの方にもお世話になつて居ります」

徳とく「工一寸承はりたいですが、此お館に小北山の教主松姫様が、牢獄に打ち込まれお苦しみの事、それは事實でムいますか。今ここに松姫の娘、お千代さまと云ふのが、泣いて吾々に頼まれましたから、實否を探らむと参つたのです。何卒包み匿さず事實を仰有つて貰ひたいものですな」

「ハイ、何でも松姫さまとかが見えまして、大變な、高姫様、空助様との間に爭論が起つて居たやうです。其後は、どうなつたか妾は存じませぬ。大方仲直りが出來たかと存じます」

千代「イエ皆さま、お母さまは牢の中へ打ち込まれたのよ。さうして此初花姫さまに化けて居るのは、妖幻坊の眷族ですから用心なさいませ。私だつてこんなものよ」

と云ふより早く獅子のやうな古狸となつて、ノソリノソリと奥を目蒐けて這ひ込んで了つた。お菊は又もや、

「をぢさま左様なら、私の正體はこれだわ」

と云ふより早く、以前のやうな大狸となつて又もや驅け込んで了ふ。

四人の男は不審に堪へず、初花姫の正體を見届け呉れむと、眼を怒らして目ばなしもせず睨んで居た。

「ホホホホ、まア皆さまの六つかしいお顔、サウ睨んで頂くと私の顔に穴があきますよ。この浮木の森には古狸が居まして、チヨイチヨイワザを致しますので、

それを防ぐために三五教の神様をお祀りして居るのでムいますよ。貴方等の御神力によつてあの可愛らしい女の正體が現はれたのですよ。何が化けて居るのか分つたものぢやありません。ほんに化物の世の中ですから。妾も何かの變化ぢやないか、よく調べて下さい」

ガリヤ「イヤ決して決して貴女は疑ひませぬ。併し浮木の森は妖怪の巢窟ですから、斯様な所へお館をお建てになれば、随分狸の巢がなくなるから、ワザを致しませう」

「ハイ父も困つて居ますの、自分の小間使だと思つて居れば、毛だらけの手を出したりして仕方がありません。何卒初稚姫様が居られますから、あの方と力を合せて妖怪退治をして下さい。高姫さま、空助さまも何だか怪しいやうな氣がします。中にも空助さまなぞは耳がペロペロ動くのですもの」

ケース「成程、吾々も實は狸に化かされ、眞裸になつて相撲を取らされて來ましたよ、なア初さま、徳さま、アハハハハ」

「ホホホホ、本當に悪い狸が澤山居ますので、何とかして退治せねばならないと

申して澤山の家來を四方に遣はし狩立てましたけれど、到底人間の力ではいけません。神力高き御方の法力に依らねば駄目だと申し、俄に信仰を致したのでムいます。サア斯様な所で立話をして居ては詮りませぬ。何卒奥へ行つて休息して下さいませ」

ガリヤ「然らば遠慮なく御厄介になりませう」と幾つかの門を潜つて玄關口についた。

「サア何卒お入り下さいませ。俄作りで準備も整はず、不都合の家でムいます」ケース「いやどうも有難う、實に立派な御殿でムいます。以前とは面目を一新し、吾々が駐屯して居た時の面影は少しもムいませぬ。まるで別世界へ行つたやうでムいます」

ガリヤ「サア皆さま、御免を蒙つて通らして頂きませう」

「ハイ」

と一同は初花姫他七人の美女に後先を守られて、奥へ奥へと進み行く。観音開きの庫のやうな一室に請ぜられた。以前にランチ、片彦兩人が請ぜられた居間であ

る。五脚の椅子が丸いテーブルを中にして行儀よく並べてある。さうして随分廣い居間であつた。初花姫は四人を案内し各椅子に着かした。四人は何とはなしに氣分のよい居間だと、満足の體で安全椅子に凭れかかり、欄間の彫刻などを眺めて頻りに褒めちぎつて居る。初花姫は、

「一寸父に報告を致して來ますから、皆さま此處で御休息を願ひます。左様ならと軽く挨拶して七人の侍女を伴ひ此場を立ち去つた。四人は八人の女の綺麗な事や、何ともなしに淑やかな事、どれもこれも優劣のない美人なる事などを涎を垂らして語り合つて居る。初公は思ひだしたやうに、

「皆さま、吾々はかうして結構な座敷に休んで居るのもよいが、此處へ來た目的は松姫さまを救ひ出す爲ではなかつたかなア」

ガリヤ「そりやさうだつた。併しお千代、お菊と云ふ奴、劫經た狸の正體を現はしよつたぢやないか。あれから見ると吾々は一寸狸に騙されよつたのだ。さうすると、あいつの云ふ事は當にならぬ。松姫様の此處に囚はれて居るのは全く嘘だと思ふが、君達はどう思ふ」

「サア」

と三人は首を捻つて居る。そこへ光つたものを衣服一面に鏤めた妙麗の美人が、ドアを開いてニコニコしながらやつて来た。最前見た初花姫以下も美しかったが、これは又素的滅法界のナイスである。そして背は少し高く、どこともなしに犯すべからざる威厳が備はつてゐる。四人は思はずハツと頭を下げ敬意を表した。美人は一脚の空椅子に腰を下し淑やかに、

「妾は三五教の宣傳使初稚姫でムいます。よくまアお越し下さいましたなア」

拙者は治國別様の弟子でガリヤと申します。何卒お見知りおかれまして御指導を願ひます」

「拙者はケースと申します、何分宜敷くお願い申します」

「某は初公別と申します」

「拙者は徳公別と申す、未來の宣傳使でムいます。何分宜敷く、萬事お引き立てを願ひ奉ります」

と、「ド」拍子のぬけた聲で挨拶をする。

「早速ながら貴方等にお願ひ致したい事がムいます。それは外の事ではムいませぬ。空助、高姫と云ふ三五教に於ける「ユダ」がこのお館へ旨く入り込みまして、妾の説を極力攻撃致し、又ランチ、片彦の兩人を石牢に打ち込み、その上松姫様まで何處かへ匿して仕舞つたのでムいます。彼高姫、空助は狸を使ひまして人の目をくらし、變幻出沒自在の魔力を發揮致しますれば、妾一人のみにては如何ともする事が出来ませぬ。誰かのお助けを借りたいと大神様を念じて居ました。所が明日は三五教の信者を四人ばかり寄こしてやらうと仰有つたので、首を長くして待つて居ました。城主如意王様も初花姫様も大變な御心配でムいます。どうかお力をお貸し下さいますまいか」

ガリヤ「ハイ、お頼みまでもなく吾々は一旦主人と仰いだランチ、片彦様の御遭難を聞いて、これが黙つて居られませうか。最早義のためには命を捨てます。なあケース、一つ獅子奮迅の活動をやらうではないか」

ケース「イヤやりませう、姫様、御心配なさいますな。きつと惡魔を退治してお目にかかせませう。高姫、空助、如何に妖術を使ひましても、此方には正義の刃が

ありますから、大神の愛善の徳と信眞の光によつて、見事化を現はしてお目にか
けませう」

「何卒宜しくお願い致します」

初「吾々と雖もお師匠様の松姫様を、どうしても取返さなくてはなりません。徳
公と兩人力を協せて高姫、空助の魔法を破つて御覽に入れませう」

「館の様子はほぼ呑み込んで居りますれば、ランチ、片彦様初め松姫様の在處を
力を協せて探し出し救ひ出して頂きませう。唯些し心配なのは松姫様の事で、

ます。何でも水牢に放り込んだのではあるまいかと存じます」

初「猪口才な高姫、空助、今に見よ、思ひ知らして呉れるぞ」

と思はず知らず大音聲に呼ばはつた。慌しくドアを押開けて入つて来たのは空助、
高姫の兩人であつた。兩人は棒千切を振り上げ、初稚姫の左右より目を怒らせな

がら、

空助「ヤア初稚姫、よくも吾々が計略の穴に陥つたなア、覺悟致せ」

と打つてかかる。初稚姫は椅子を取つて受け留める、高姫は又棍棒にて空気を切

りブンブン唸らせながら、

「ヤア初稚姫、覺悟を致せ、觀念せい」

と一人の女に二人の男女が渡り合ひ、互に秘術を盡して戦ふ。四人は黙視するに忍びず、各椅子を取つて、空助、高姫に打つてかかる。七人は渦をまいて室内を荒れ狂ひ、漸くにして高姫、空助は隙を窺ひ棍棒をなげつけ、雲を霞と此場を逃げ出した。

初稚姫は涙ながらに四人に向ひ、急場を救はれし事を感謝した。

(大正一二・一・二七 舊一一・一二・一一 加藤明子録)

第二章 夢物語(一三三六)

四人の坐つて居つた椅子は、何時の間にやら膨張して角を生やし、次で毛が生え、牛の如き動物と化し、四人共其背に跨つて居た。

ガリヤ「ヤア此椅子、化けやがったな。ヤ此奴は牛とも馬とも分らぬ奴だ。オイ三人、確りせないと揺り落されるぞ。カアアアンナガララアアアさつぱり駄目だ。こりや怪物、ぢつと致さぬか」

怪獸は四匹とも聲をそろへて、空砲のやうな調子で、

「ホホホホ、ホホホホ」

と笑ひ出した。それから一生懸命四人を背中に乗せ、廊下をドスドスドスと威喝させ廣場に駆け出した。初稚姫も同じく怪獸に跨り、

「オーイ オーイ」

と呼ばはりながら追っかけ来る。怪獸は益々狂ひ出し、初めは一二間の所を上下して見たが、終ひには人間が燕のやうに見える所まで上り、空の上で前後左右に荒れ狂ふ。四人は背中にくらひつき、

「工工怪物奴、落すなら落して見よ。貴様に噛ぶりついて離れはせぬぞ。オイ、徳、初、ケース、確り掴まへて居よ。落ちるのなら此奴と一緒にだ。あれ見よ、初稚姫様も空中に跳ね上つて居られるではないか。天馬空を行くと云ふ事があるが、

これは馬でなくて牛だ、これ畜生、もうよい加減に往生致さぬか」

「こりや、唐變木、俺は天の魔だ。椅子になつて化けて居れば、腰を掛けやがつて、もう了簡せぬのだ。マダマダ空に上つて、そこで貴様を揺り落してやるのだ。楽しんで居れ。ウホホホホ、ウフフフ」

と五匹の牛は一齊に笑ふ。初稚姫は怪獸の尻を鞭をもつて打ち叩き、空中を滑走するやうに浮木の森をさして下り行く。四人は益々高く、雲を押し分けて怪獸に跨り上り行く。

ケース「オイ、ガリヤ、初公、徳公、もう「やけ」だ、飛び下りようぢやないか。何處まで行くか分りやしないぞ。サアーイニウ三ツだ」

三人は、

「ようし、一イニウ三ツ」

「ぼいと飛んだ……と思へば元の所にテーブルの脚をつかまいて、汗をズクズクにかいて氣張つて居た。」

「ホホホ皆さま、机の脚を握つて何をしていらつしやいますの」

四人は初めて気がつき、ポカンとして恨めし気にテーブルを眺めて居る。さうして椅子は依然として四脚あいてゐる。初稚姫は以前の儘椅子に腰打ちかけニタニタ笑つてゐる。

ガリヤ「イヤどうも怖ろしい夢を見たものだ、殆ど天上する所だつた。やつぱり此處は化物屋敷だな」

ケース「如何にも合點の往かぬ魔窟だ。初稚姫様、貴女は如何で△いましたか、私達は天上まで上げられ、地上に顛落したと思へば、幻覺を感じて居ました」

初「イヤもう話にならぬわい、徳、貴様は随分怖さうな顔をして居つたな」

徳「生れてからこれだけ肝を潰した事はないわ。ヤツパリ狸の奴、魅みやがつたと見えるな。こりやうつかりしては居られないぞ。もし初稚姫さま、こんな怖ろしい所によろ貴女は居ますな」

「ホホホ、義理天上さまが見えて居ますから、魔法を使ひ遊ばして貴方等を天上にお上げ遊ばしたのでせうよ。時々怪物が出ますので、妾も些とも安心がなりませぬの」

徳とく 『さうですな、實じつに奇怪きつくわいせんばん千萬ことな事ことです』

斯かく話はなして居ゐると、圓まるいテールブルが又またツと狸たぬきのやうな顔かほを出だし、みるみる中うちに荒あらい毛けを生はやし、長ながい足あしをノタノタとドアの外そとへ這はうて行く。

初はつ 『ヤア益ますます々もつて奇怪きつくわいせんばん千萬こと、はて、訝いぶかしやなア』

と芝居しばゐがかりになる。初稚はつわかひめ姫ひめは、みるみる中うちに厭いやらしき鬼女きぢよと變へんじ、耳みみまで裂さけた口くちを無む雑ざ作さに開ひらき、牛うしのやうな舌したを出だし四人よにんに向むかつて噛かみつきに来くる。四人よにんは肝きもを潰つぶし、一生いっしやうけんめい懸命けんめいに驅かけ出すと、向むかふより初花はつはなひめ姫ひめが七人しちにんの美女びぢよを連つれてやつて來くる。何なんでも彼處あそこまで行ゆかねばならぬと焦あせ慮せれど藻搔もがけど追付おつかず、四人よにんは同おなじ處ところに足あしをバタバタとやつて居ゐる。初稚はつわかひめ姫ひめの妖怪えつくわいは後うしろより熱あつい火ひのやうな息いきを吹ふきかくる。

『アアアアツアツアツ』

と云いひながら、一足ひとあしにても逃のがれむと藻搔もがいて居ゐる。初花はつはなひめ姫ひめ他ほか七人しちにんの美女びぢよは又またもや怪あやしき化物ばけものと變へんじ噛かみつきに來きたる。四人よにんは聲こゑを限かぎりに呼よべど叫さけべど、少すこしも聲こゑは人ひとの耳みみに達たつしなかつた。

忽ち家は前後左右に廻轉し、上になつたり下になつたり、自分の身體が轉回したり、苦しくて息もつげなかつた。見れば傍に蒼味だつた泉水がある。四人はイニウ三ツで曲玉型の泉水に身を躍らせて飛び込んだ。石をなげ込んだ如く、四人の身體はズボ　ズボ　ズボと幾百間ともなき深き底に陥り、漸くにして岩窟に ついた。此處へ來ると蒼味立つた水はもはやなくなつてゐた。四人は一生懸命に悲鳴を上げて、

「オーイ助けて呉れい助けて呉れい」
と喚き立てて居る。どこともなしに桃の花の二片三片、四人の顔に落ちかかるのであつた。

よくよく見れば、四人は浮木の森の火の見櫓の傍にある曲玉型の泉水の傍に咲満ちて居る桃の木の根下に、阿呆のやうな顔をして眠つて居たのである。東の空は漸く茜さし、古狸が茶色の尾を垂らして唯一匹、頭に桃の花片を附着させながら、ノソリ　ノソリと這うてゐる。四人一度に、

「アア畜生、誑しやがつたな」

浮木の森の鳥が、阿呆々と四人を見下して鳴いて居る聲が、呆け顔を嘲つて居るやうに聞えて来た。

ガリヤ「アア惟神靈幸倍坐世、油斷と慢心の罪、何卒許させたまへ」
ケース、初、徳、

「アアしようもない、第五十一巻の瑞月靈界物語、狸に誑された奇妙奇天烈な八疊敷の大風呂敷に讀者を包んだ夢物語は、安閑坊喜樂の嘘八百萬の大神の神示」
(大正一二・一・二七 舊一一・一二・一一 加藤明子録)

靈界物語 第五一卷 眞善美愛 寅の巻

終り